

# 同所新田遺跡2 瀬沼遺跡2

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道  
新設事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成21年3月

国土交通省北首都国道事務所  
財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第312集

どう しよ しん でん  
同所新田遺跡 2  
せ ぬま  
瀬沼遺跡 2

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道  
新設事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成 21 年 3 月

国土交通省北首都国道事務所  
財団法人茨城県教育財団

## 序

茨城県は、県土の均衡ある発展を念頭におきながら、地域の特性を生かした振興を図るために、高規格幹線道路などの根幹的な県土基盤の整備とともに、広域的な交通ネットワークの整備を進めています。

その一環として国土交通省が整備する首都圏中央連絡自動車道は、首都高中央環状線などと一体となって、首都圏の骨格となる3環状9放射の道路ネットワークを形成し、東京都心部への交通の適切な分散導入と首都圏全体の道路交通の円滑化、首都圏の機能の再編成を図る上で極めて重要な役割を果たすものです。

しかしながら、この事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である同所新田遺跡と瀬沼遺跡が所在することから、これらを記録保存の方法により保護する必要があるため、当財団が国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所から埋蔵文化財発掘調査の委託を受け、平成18年4月から平成20年3月まで2年間にわたってこれを実施しました。そのうち、平成18年度に実施した調査の成果については、既に当財団の『文化財調査報告第289・290集』として刊行したところです。

本書は、第289・290集に続き、同所新田遺跡と瀬沼遺跡の平成19年度調査の成果を取録したものです。学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深めるために活用されることによりまして、教育・文化の向上の一助となれば幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、五霞町教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し深く感謝申し上げます。

平成21年3月

財団法人茨城県教育財団  
理事長 稲葉節生

## 例 言

- 1 本書は、国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成19年度に発掘調査を実施した、茨城県猿島郡五霞町大字小福田739番地の1ほかに所在する同所新田遺跡と、同町大字幸主496番地の1ほかに所在する瀬沼遺跡の発掘調査報告書である。

- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

### 調 査

同所新田遺跡 平成19年10月1日～平成19年12月31日

瀬 沼 遺 跡 平成19年12月25日～平成20年3月31日

整 理 平成20年6月1日～平成20年11月30日

- 3 発掘調査は、調査課長瓦吹堅のもと、以下の者が担当した。

### 同所新田遺跡

首席調査員兼班長 三谷正

主任調査員 小林和彦

調査員 江原美奈子

### 瀬 沼 遺 跡

首席調査員兼班長 三谷正

主任調査員 小林和彦

調査員 江原美奈子

調査員 鹿島直樹 平成20年2月1日～平成20年3月31日

調査員 作山智彦 平成20年2月1日～平成20年3月31日

- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長村上和彦のもと、主任調査員本橋弘己が担当した。
- 5 同所新田遺跡から出土した製鉄関連遺物の化学分析については、JFEテクノリサーナ株式会社に委託し、考察は付章として巻末に掲載した。また瀬沼遺跡で出土した木製品の保存処理については、株式会社古環境研究所に委託した。

## 凡 例

- 1 地区設定は、日本平面直角座標第Ⅷ系座標に準拠し、同所新田遺跡は $X = +12,600\text{m}$ 、 $Y = -5,640\text{m}$ の交点を、瀬沼遺跡は $X = +9,920\text{m}$ 、 $Y = -6,720\text{m}$ の交点を基準点(A1a1)とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A1区」「B2区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3、…0とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A1a1区」「B2b2区」のように呼称した。

- 2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 SI - 竪穴住居跡 SB - 掘立柱建物跡 SA - 欄跡 SK - 土坑 SD - 溝跡 SE - 井戸跡

WT - 溜め井跡 PG - ビット群 SX - 不明遺構 P - ビット

遺物 P - 土器・陶磁器 TP - 拓本記録土器 DP - 土製品 Q - 石器・石製品 M - 金属製品

G - ガラス製品 W - 木器・木製品

土層 K - 攪乱


- 3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は200、300分の1、各遺構の実測図は60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。


(2) 遺物実測図は原則として3分の1の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

 焼土・砂鉄・赤漆

 炉・骨粉

 粘土・溶着材・黒漆

 炭化範囲・煤

●土器・陶磁器 ○土製品 □石器・石製品 △金属製品 ▲木製品

- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

- 5 一覧表・遺物観察表の表記については、次のとおりである。

(1) 計測値の単位はm、cm、kg、gである。なお、現存値は（ ）で、推定値は[ ]を付して示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率や写真図版番号、その他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

- 6 「主軸」は、竪穴住居跡の炉（竈）を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N-10°-E）。

- 7 近世の陶磁器の器種・年代観については、『内藤町遺跡』（新宿区内藤町遺跡調査会ほか、1992）、『瀬戸市史 陶磁篇 六』（瀬戸市史編纂委員会、1998）、『九州陶磁の編年』（九州近世陶磁学会、2000）などを参考とした。

# 目 次

序	1
例	
凡	
例	
目	
次	
概	
要	1
第1章 調査経緯	5
第1節 調査に至る経緯	5
第2節 調査経過	5
第2章 位置と環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7
第3章 同所新田遺跡	11
第1節 遺跡の概要	11
第2節 基本層序	11
第3節 遺構と遺物	12
1 近世の遺構と遺物	12
(1) 掘立柱建物跡	12
(2) 溝跡	14
(3) 井戸跡	15
(4) 溜め井跡	16
(5) 廃棄土坑	21
(6) 土坑	28
(7) 不明遺構	32
2 その他の時代の遺構と遺物	48
(1) 竪穴	48
(2) 欄跡	50
(3) 溝跡	51
(4) 土坑	52
(5) ビット群	59
(6) 遺構外出土遺物	62
第4節 まとめ	63
第4章 瀬沼遺跡	69
第1節 遺跡の概要	69
第2節 基本層序	69
第3節 遺構と遺物	71
1 縄文時代の遺構と遺物	71
(1) 竪穴住居跡	71
(2) 土坑	74
2 中世の遺構と遺物	77
(1) 墓坑	77
(2) 火葬土坑	86
3 近世の遺構と遺物	96
(1) 墓坑	96
(2) 土坑	97
(3) 運河跡	99
4 その他の遺構と遺物	110
(1) 溝跡	110
(2) 井戸跡	111
(3) 土坑	112
(4) ビット群	124
(5) 遺構外出土遺物	129
第4節 まとめ	131
付 章	137
写真図版	
抄 録	

## 同所新田遺跡・瀬沼遺跡の概要

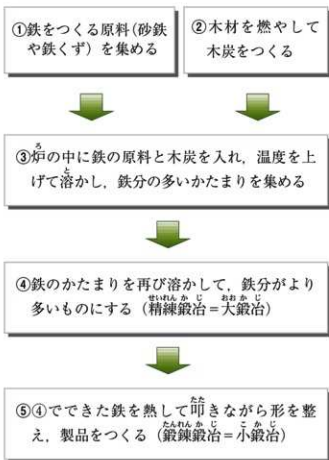
### 【はじめに】

同所新田遺跡と瀬沼遺跡は、茨城県西部の猿島郡五霞町に位置しており、利根川や江戸川など、町の周りには大きな川が流れています。江戸時代の史料によると、五霞町は多くの農民が暮らしており、湿地や田畑が広がっていたことや、周囲の川が氾濫する苦勞の多い地域であったことが記されています。今回の発掘調査は、五霞町に首都圏中央連絡自動車道（圏央道）が建設されることとなり、そこには同所新田遺跡と瀬沼遺跡があることから、両遺跡の内容を記録するために、茨城県教育財団が調査を行いました。

### 《同所新田遺跡》

五霞町小福田地区に位置する同所新田遺跡では、約200年前（江戸時代後期）の鉄づくりに関連する遺構（昔の人が掘ったあと）が確認されています。ここでは、鉄づくりに関連する遺構について説明します。

#### ～鉄ができるまで～



鉄づくりの例（左④）



鉄づくりの例（左⑤）

～18年度で確認できた遺構～



前図の④にあてはまる鉄づくりの作業場です。長さ9 m、幅3 mほどの大きなものです。



白線で示したのは、前図の⑤の鉄づくり作業を行った建物跡（規模が7×6 m）で、黒く丸いのは柱穴です。

～19年度で確認できた遺構～



**スロープがついた土坑（掘った穴）**  
直径が8 mほどで、中で作業をしている人たちからも、その大きさがわかります。



**粘土が貼られている土坑**  
底や壁は水が浸みこみにくい工夫がされています。鉄づくりに必要な水をためたところとみられます。

～同所新田遺跡から出土した遺物～

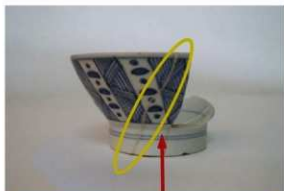


ほうろく  
**焙烙**という江戸時代の調理具  
豆や茶を煎ったりするものです。



小さい穴は、割れたものをつなぐためにあけた跡で、銅線などで結び、再び使用します。





割れたものを白玉粉でつなぎ合わせて再使用した碗が出土しています。



羽口は鉄づくりの温度を上げ、安定させるために風を送りこむ道具で、椀状滓は鉄づくりで不要となったお椀形のかたまりです。

### 【同所新田遺跡の調査からわかったこと】

平成18・19年度の調査で、同所新田遺跡での鉄づくりは、精練鍛冶（より鉄分の多い鉄をつくる作業）や、鍛錬鍛冶（鉄を叩いて製品をつくる作業）などを行っていたことがわかりました。ほかに、倉庫と考えられる柱が並んだ建物の跡や、水をためるための土坑など、さまざまな鉄づくりの作業場が発見されています。鉄をつくったり、鉄を研いだりなど、人々がこの地で「ものづくり」に励んでいたことが想像されます。

### 〈瀬沼遺跡〉

五霞町幸主地区に位置する瀬沼遺跡では、平成18年度の第1次調査で約4500年前（縄文時代中期）や約1500年前（古墳時代後期）の竪穴住居跡が1軒ずつ確認されています。今回の第2次調査では、縄文時代の竪穴住居跡のほか、約550年前（戦国時代）の墓跡、約200年前（江戸時代後期）の舟着場も確認されました。



#### 縄文時代の竪穴住居と縄文土器

約4500年前（縄文時代中期）に建てられた長方形の竪穴住居跡です。下のようになくさんの縄文土器が出土しました。



### 墓跡と火葬された跡

戦国時代の頃（約550年前）に亡くなった人の墓跡がたくさん見つかり、下のような古銭（中国や朝鮮から伝わったお金）が出土しました。また、亡くなった人を火葬した跡（右の写真）が41か所も確認されました。



亡くなった人を火葬した土坑で、アルファベットの「T」のような形です。白いは骨の残りです（○印）。



左から「洪武通寶」「永樂通寶」「宣徳通寶」「朝鮮通寶」



### 江戸時代（約200年前）の舟着場跡

杭が何本も立ち並んだ場所が発見されました。底面が長方形に掘られており、舟が到着した場所とみられます。



舟着場跡と考えられる場所

## 【瀬沼遺跡の調査からわかったこと】

これまでの調査について紹介してきたように、戦国時代の頃になると火葬土坑（亡くなった人を火葬した穴）41基、墓跡11基がまとまってつくられ、この地が墓地になったことがわかりました。これだけの火葬した跡や墓跡が一つの遺跡から確認されることは大変珍しく、貴重な資料となりました。また、江戸時代につくられた運河跡1条が確認され、この運河には舟着場があることから、人や物の移動に使われていたと考えられます。このように、瀬沼遺跡は古くは縄文時代から利用され、戦国時代や江戸時代を中心とした遺跡であることがわかりました。

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所は、五霞町において一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業を進めている。

平成16年8月20日、国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成16年9月14日に現地踏査を、平成17年10月11～14・22日に試掘調査を実施し、同所新田遺跡及び瀬沼遺跡の所在を確認した。平成17年12月12日、茨城県教育委員会教育長は国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所長あてに、事業地内に両遺跡が所在する旨を回答した。

平成17年12月26日、国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第57条の3第1項（現 第94条）の規定に基づく土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。平成18年1月10日、茨城県教育委員会教育長は現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所長あてに、同所新田遺跡及び瀬沼遺跡について工事着手前に発掘調査を実施するよう通達した。財団法人茨城県教育財団は、国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、同所新田遺跡は平成18年6月1日から11月30日、瀬沼遺跡は平成18年10月1日から平成19年3月31日に第1次発掘調査を実施した。

平成19年10月30日、茨城県教育委員会は瀬沼遺跡の試掘調査を再度実施した。平成19年2月23日、国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議した。平成19年2月27日、茨城県教育委員会教育長は、国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所長あてに、同所新田遺跡・瀬沼遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の発掘調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。財団法人茨城県教育財団は、国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、同所新田遺跡は平成19年10月1日から12月31日まで、瀬沼遺跡は平成19年12月25日から平成20年3月31日まで第2次発掘調査を実施した。平成20年3月18日、茨城県教育委員会は、瀬沼遺跡の遺構が調査区東側に延びていることが確認されたため、試掘調査を行い、補足調査を行った。

## 第2節 調査経過

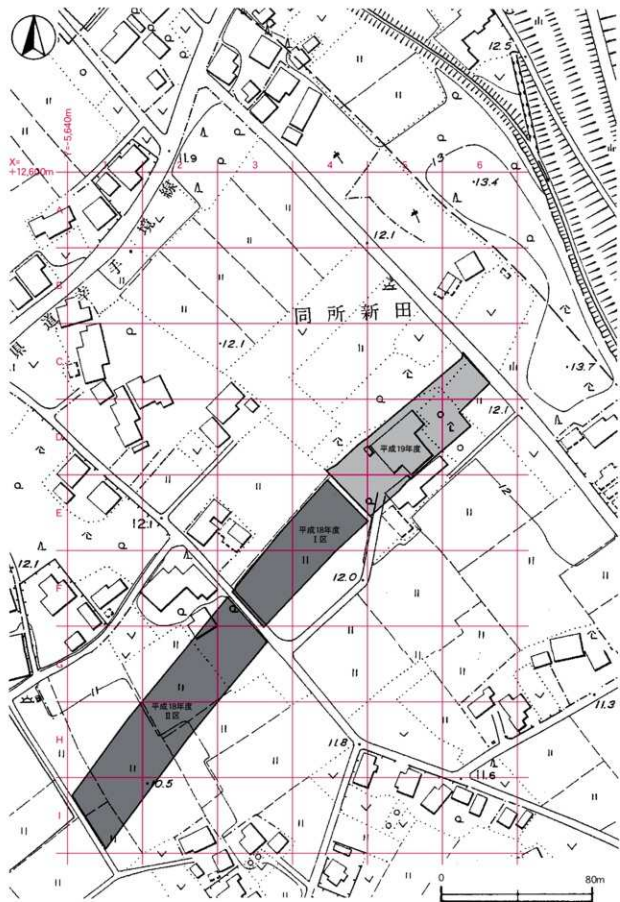
同所新田遺跡及び瀬沼遺跡の調査経過については、その概要を表で記載する。

同所新田遺跡

工程	月	10月	11月	12月
調査準備 表土除去 遺構確認		■		
遺構調査		■	■	■
遺物洗浄 注記 写真整理		■	■	■
補足調査 概 収				■

瀬沼遺跡

工程	月	12月	1月	2月	3月
調査準備 表土除去 遺構確認		■	■		
遺構調査		■	■	■	
遺物洗浄 注記 写真整理		■	■	■	■
補足調査 概 収					■



第1図 同所新田遺跡調査区設定図

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

同所新田遺跡は、狼島郡五霞町大字小福田739番地の1ほか、瀬沼遺跡は、同町大字幸主496番地の1ほか、に所在している。

両遺跡が所在する五霞町は、茨城県の南西部の利根川以南に位置している唯一の町で、北を利根川、東を江戸川、西から南にかけて権現堂川によって区画されている。町域の地形は利根川及び中・小河川によって開析された低地（谷底平野、自然堤防、三角州平野）と、五霞村台地と呼ばれる低位段丘群によって構成されており、町内の最高標高は17.5m、最低標高は9mで、平均標高は約12mである。この利根川流域に広がる低台地は、地質的には新生代第四紀沖積統が中心で、約1万年以降までの新しい時代の堆積層で形成されている。また、この沖積統の下には第四紀洪積統（奥東京湾時代）後期に形成された洪積統が堆積しており、下層から竜ヶ崎砂礫層、常総粘土層、関東ローム層（武蔵野ローム層、立川ローム層など）に分層される。

同所新田遺跡は、五霞町北東部の利根川沿いに位置し、標高10～12mの台地上に位置している。遺跡周辺の土地利用状況は、主として水田・畑地などの耕作地であり、遺跡の状況は畑地であった。

瀬沼遺跡は、五霞町南部の中川沿いに位置し、標高11mほどの台地上に位置している。遺跡周辺の土地利用状況は、主として水田・畑地であり、遺跡の状況は水田であった。

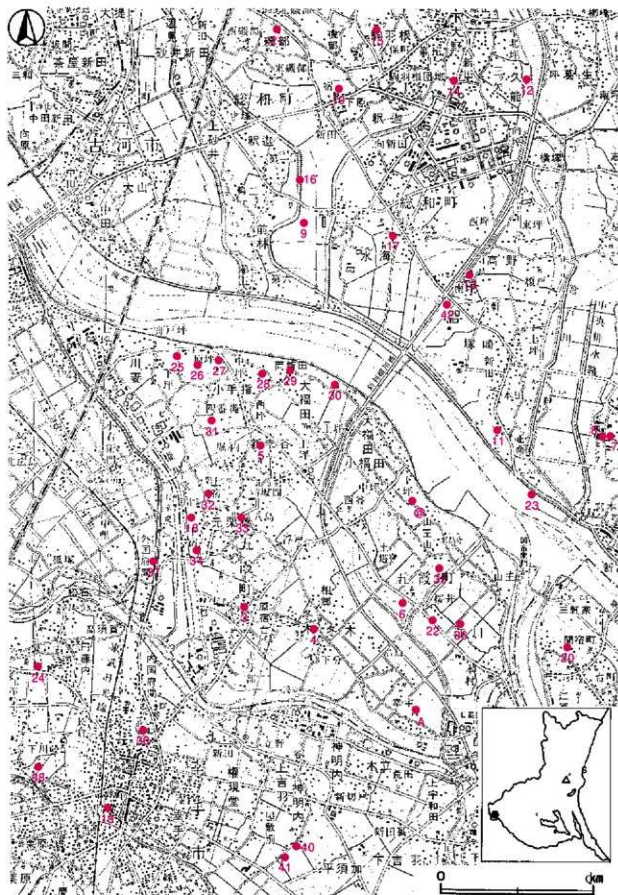
### 第2節 歴史的環境

同所新田遺跡と瀬沼遺跡が所在する現在の利根川流域には、沖積統の低地と洪積統の台地が広がっている。利根川の北側では、利根川の支流によって開析された谷津が広がり、谷津から洪積統の台地にかけて遺跡が存在している。また、利根川の南側は、広大な沖積統が広がり、奥東京湾に面した標高10～13mほどの低地に遺跡が確認されている。ここでは、両遺跡周辺に確認されている遺跡を中心に概要を述べる。

縄文時代の遺跡は、冬木A貝塚（3）で後期の竪穴住居跡29軒や人骨18体、冬木B貝塚（4）でも後期から晩期にかけての竪穴住居跡10軒が調査されている<sup>9</sup>。また、石畑遺跡（5）では、昭和51年から52年にかけての調査で前期と後期の竪穴住居跡21軒やヤマトシジミを主体とする地点貝塚が確認されている<sup>10</sup>。平成18年度に調査された土塔貝塚（6）では、前期や後期の竪穴住居跡が確認されており、冬木貝塚との関連が想定される<sup>11</sup>。さらには五霞町と隣接する埼玉県幸手市、千葉県野田市（旧岡宿町内）においても集落跡や貝塚などが数多く分布しており、両遺跡周辺は古くから人々の生活の場であったことを示している。

古墳時代の遺跡は、利根川以北の台地上に多く確認されている。前期の遺跡では、集落跡である末広遺跡（7）、かわい山遺跡（8）、羽黒遺跡（9）のほか、方形周溝墓が6基確認されている帆通才伝遺跡（10）などがある。中期の遺跡は、竪穴住居跡1軒が検出された清水遺跡（11）、祭祀遺構と考えられている土坑や、滑石製模造品の未製品が多量に出土した香取西遺跡（12）や、住居跡から子持勾玉をはじめとする滑石製品の祭祀関連物が多量に出土した向洋B遺跡（13）などがある。後期の遺跡は、集落跡である末広遺跡、羽黒遺跡、久能西原遺跡（14）、駒羽根遺跡（15）などが確認されている。

奈良・平安時代の遺跡は、かわい山遺跡、羽黒遺跡など古墳時代から継続する遺跡ではほごめられているほ



第2図 同所新田遺跡・瀬沼遺跡周辺遺跡分布図(国土地理院5万分の1「水海道」「鴻巣」)

表1 同所新田・瀬沼遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈平	中世			近世	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈平	中世
①	同所新田遺跡				○	○	○	○	22	桜井前遺跡	○		○	○	○	○
②	瀬沼遺跡	○			○		○	○	23	境河岸						○
3	冬木A貝塚	○							24	千塚柴原遺跡				○		○
4	冬木B貝塚	○			○	○			25	大崎穴薬師遺跡	○					○
5	石畑遺跡	○			○	○	○	○	26	大崎遺跡	○					○
6	土塔貝塚	○	○		○				27	寺山遺跡	○					○
7	末広遺跡				○				28	伊勢塚古墳			○			
8	かわい山遺跡	○			○	○			29	釈迦新田遺跡	○					○
9	羽黒遺跡	○	○	○	○	○	○	○	30	殿山遺跡	○		○			○
10	釈迦才仏遺跡	○	○		○			○	31	小手指遺跡	○			○	○	
11	清水遺跡	○	○	○	○				32	上舟戸遺跡	○			○	○	
12	香取西遺跡	○	○	○	○	○			33	三島神社古墳	○		○		○	
13	向坪B遺跡				○		○		34	元栗橋下宿遺跡	○		○	○		○
14	久能西原遺跡	○	○	○					35	西新畑遺跡	○					○
15	駒羽根遺跡	○			○	○	○	○	36	桜井浦遺跡	○					○
16	日下部遺跡	○	○	○	○	○	○		37	幸手市 No.8 遺跡			○			○
17	水海城跡					○	○		38	幸手市 No.10 遺跡						○
18	城山城跡							○	39	幸手義賑窮餓之碑						○
19	幸手市 No.3 遺跡						○		40	幸手市 No.19 遺跡					○	○
20	関宿城跡						○	○	41	幸手市 No.20 遺跡				○		○
21	香取東遺跡	○	○		○		○	○	42	南坪遺跡	○		○	○		

か、10世紀代の竪穴住居跡1軒と掘立柱建物跡2棟が検出された日下部遺跡(16)や水海城跡(17)などがある。また、複合遺跡である香取西遺跡からは、鉄製品の生産に関連する遺構や遺物が確認されている。

中世になると、古河公方足利氏と関連がある城館跡が分布している。河川に囲まれたこの地域を治める重要性は高く、田総和町には築田氏一族の城下である水海城跡、五霞町には野田氏の居城である城山城跡(18)、埼玉県幸手市には、一色氏の陣屋跡と考えられている幸手市No.3遺跡(19)、千葉県野田市(旧関宿町)には築田氏嫡流家の居城として発展した関宿城跡<sup>9)</sup>(20)などが知られている。羽黒遺跡や向坪B遺跡のほか、中世から近世初頭の土坑墓が確認された香取東遺跡<sup>21)</sup>、火葬土坑や地下式坑などが検出された板井前遺跡<sup>22)</sup>など、中世の集落跡や墓域が近年の調査で明らかになってきている。

近世初頭には、「利根川東渡」と呼ばれる大規模な河川改修工事が行われている。承応3年(1654)年には、会の川から古利根川へ向かっていった利根川本流が常陸川筋と連結し、関東平野の中央部を西から東へ貫流して太平洋へ注ぐようになった。それにより奥州から鬼怒川を下り、境河岸(23)などを経て、さらに利根川や江戸川を下って江戸へと至る輸送ルートが成立したことで、関宿周辺の河岸は輸送ルートの要として繁栄していくことになった。その交通・流通機能を大きく担うようになる境河岸は、正保期(1644~1647年)に関宿藩の居城である関宿城の城下町として機能するようになった。当該期の発掘調査が行われた主な遺跡としては、前述した千葉県野田市に位置する関宿城跡のほか、五霞町に位置する近世の溝跡1条が確認された石畑遺跡、埼玉県幸手市に位置し、陶磁器や水製品が多量に出土した生活廃棄物捨場1基が確認された塚原遺跡(幸手市No.4遺跡)(24)などがある。

※文中の〈 〉内の番号は、表1、第1図の番号と同じである。

#### 註)

- 1) 高村勇・根本康弘「冬木地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財報告書冬木A貝塚・冬木B貝塚」『茨城県教育財団文化財調査報告』Ⅹ 1981年3月
- 2) a 瓦吹堅「石畑遺跡」福島郡五霞村教育委員会 1977年3月  
b 成島一也「石畑遺跡」12県単道改第1203-261-0452号埋蔵文化財調査報告書『茨城県教育財団文化財調査報告』第192集 2002年3月
- 3) 須藤正美「土塚貝塚 瀬沼遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第289集 2008年3月
- 4) 石川義信「羽黒遺跡2 一級河川水沼川河川改修工事事業地内埋蔵文化財調査報告書2」『茨城県教育財団文化財調査報告』第262集 2006年3月
- 5) 川津法律「主要地方道つば古河線緊急地方道路事業地内埋蔵文化財調査報告書 大橋B遺跡 釈迦才伝遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第131集 1998年3月
- 6) 桑村裕「清水遺跡 同所新田遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第290集 2008年3月
- 7) 内山俊身「戦国期築田氏城下海水の歴史的位置-関東の二大河川流通路の結節点を考える-」『そとうの文化財』4号 総和町教育委員会 1995年
- 8) 郡山雅友ほか「茨城県総和町 都市計画道路東牛谷・釈迦線道路(町道9号線)改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 香取東遺跡・釈迦才伝遺跡」総和町教育委員会 2001年3月
- 9) 桑村裕「板井前遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第288集 2008年3月

#### 参考文献

- ・茨城県教育庁文化課「茨城県遺跡地図(地名表編・地図編)」2001年3月
- ・総和町史編さん委員会「総和町史 資料編 原始・古代・中世」2002年3月
- ・総和町史編さん委員会「総和町史 通史編 原始・古代・中世」2005年3月
- ・幸手市生涯学習課市史編さん室「幸手市史 考古資料編 幸手市教育委員会 2002年3月
- ・幸手市生涯学習課市史編さん室「幸手市史 通史編1 自然 原始・古代・中世・近世」幸手市教育委員会 2002年6月
- ・野田市史編さん委員会「野田市史 資料編 考古」野田市 2005年3月



## 第3章 同所新田遺跡

### 第1節 遺跡の概要

同所新田遺跡は、五葎町北東部の利根川右岸の標高約12mの台地平坦部に立地している。調査前の現況は畑地（旧宅地）であり、調査面積は2,831m<sup>2</sup>である。平成18年度に第一次調査が行われ、近世後半に比定される製鉄関連遺構が確認されたことは、『茨城県教育財団文化財調査報告第290集』（2008年3月）で報告されている（以下、「前回の調査」）。

今回の調査区は、前回の調査区の北東部にあたり、近世の掘立柱建物跡2棟、溝跡1条、井戸跡1基、溜め井跡4基、廃棄土坑5基、土坑17基、不明遺構2基、時期不明の炉跡1か所、欄跡1列、溝跡8条、土坑68基、ピット群5か所を新たに確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に43箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢）、土師質土器（焙烙、火鉢）、瓦質土器（焙烙、七厘、火鉢）、陶器（小杯、碗、皿、片口、德利、搦鉢、甕）、磁器（碗、皿、瓶、水注）、土製品（羽羽、ミニチュア、泥面子）、石器・石製品（砥石、火打ち石、硯）、金属製品（釘）、ガラス製品（簪）、腕状洋、鉄滓などである。

### 第2節 基本層序

調査区中央部南側のC519区にテストピットを設定し、基本土層の観察を行った。地表面の標高は13.2mで、地表面から2mほど掘り下げた。最上層で確認される表土は攪乱によって確認できなかったため、以下の土層を5層に分層した。観察結果は以下のとおりである。

第1層は攪乱を受けた層で、表土層は確認できていない。

第2層は褐色のソフトローム層で、粘性がやや強く、層厚は10～48cmである。

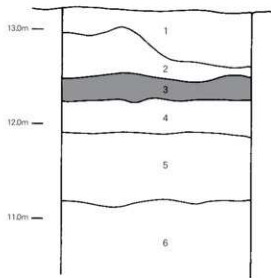
第3層は極暗褐色のハードローム層で、粘性、締まりともに強い。層厚は20～32cmで、第Ⅱ黑色帯と考えられる。

第4層は褐色のハードローム層で、締まりが強く、層厚は30～38cmである。

第5層は明褐色のハードローム層で、締まりが非常に強く、層厚は68～78cmである。

第6層は明褐色の粘土層で、粘性、締まりともに強い。下層は未掘のため、本来の層厚は不明である。

なお、遺構は第2層上面で確認されている。



第3図 基本土層図

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 近世の遺構と遺物

近世の遺構は、掘立柱建物跡2棟、溝跡1条、井戸跡1基、溜め井跡4基、廃棄土坑5基、土坑17基、不明遺構2基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

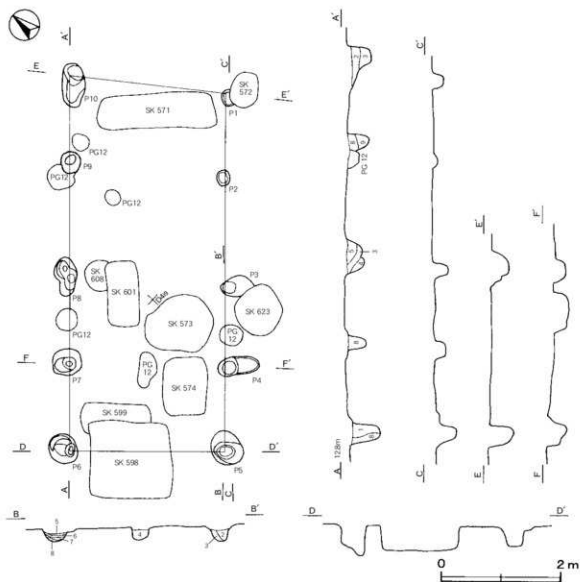
#### (1) 掘立柱建物跡

##### 第10号掘立柱建物跡（第4図）

**位置** 調査区西部のD4h9～D4i8区、標高12.6mの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第572・623号土坑、第12号ビット群に掘り込まれている。内部に7基の土坑が存在している。

**規模と構造** 桁行4間、梁行1間の掘立柱建物跡で、桁行方向はN-49°-Eである。規模は、桁行が6.00m、梁行が2.60mで、面積は15.60㎡である。桁行の柱間寸法は、1.4～1.8mと不揃いである。



第4図 第10号掘立柱建物跡実測図

柱穴 10か所。確認面からの深さは7～54cmである。土層は第1～5層が抜き取り後の覆土で、第6～9層は埋土である。P4は互層をなしており、締まりが強い。すべての柱穴から柱のあたりは確認できていない。

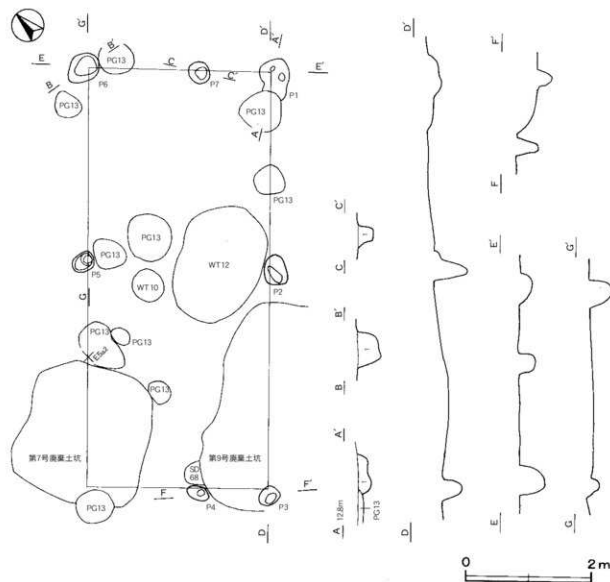
土層解説 (各柱穴共通)

- |        |                       |        |                  |
|--------|-----------------------|--------|------------------|
| 1 暗褐色  | ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量 | 6 褐色   | ロームブロック中量        |
| 2 暗褐色  | ローム粒子・粘土粒子少量          | 7 極暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色  | ロームブロック・粘土粒子少量        | 8 極暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック微量 |
| 4 暗褐色  | ローム粒子中量、炭化粒子微量        | 9 暗褐色  | ロームブロック多量、粘土粒子微量 |
| 5 極暗褐色 | ロームブロック少量、粘土ブロック微量    |        |                  |

所見 本跡の柱穴径は小さく、柱間寸法が不揃いであるが、前回の調査区で確認された第2号掘立柱建物跡とほぼ同軸であることから、倉庫としての機能が考えられる。時期は、遺物が出土していないため明確ではないが、18世紀後半と想定される。

第11号掘立柱建物跡 (第5図)

位置 調査区西部のD5j2～E5a1区、標高12.6mの台地平坦部に位置している。



第5図 第11号掘立柱建物跡実測図

**重複関係** 第7・9号廃棄土坑、第13号ピット群に掘り込まれている。内部に第10・12号溜め井跡が存在しているが、新旧関係は不明である。

**規模と構造** 桁行2間、梁行2間の隅柱建物跡で、桁行方向はN-47°-Eである。規模は、桁行が6.0m、梁行が2.90mで、面積は19.14m<sup>2</sup>である。柱間寸法は、桁行が3.0m、3.6m、梁行が1.1m、1.7mと不揃いである。

**柱穴** 7か所。確認面からの深さは12～56cmである。土層は抜き取り後の覆土で、すべての柱穴から柱のあたりは確認できていない。

**土層解説**

1 暗褐色 ロームブロック中量

**所見** 本跡は遺物が出土していないが、重複関係から機能していた時期は、19世紀前半に比定できる。内部に第10・12号溜め井が存在しており、前回の調査で確認されている第5号掘立柱建物跡と類似しているが、伴うものであるかは明確でない。

表2 近世 掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	桁行方向	柱間数 桁×梁 (間)	規模 桁×梁(m)	面積 (m <sup>2</sup> )	桁立柱間 (m)	梁立柱間 (m)	柱 穴				主な 出土遺物	備考 重複関係(古→新)
								構造	柱穴数	平面形	深S(cm)		
10	D4.19 D4.28	N-49°-E	4×1	6.00×2.60	15.60	1.40 1.80	2.00	側柱	10	円形・楕円形	7～54	-	本跡→SK572-623, PG12
11	D5.12 E5.a1	N-47°-E	2×2	6.60×2.90	19.14	3.00 3.60	1.10 1.70	側柱	7	円形・楕円形	12～56	-	本跡→第7・9号 廃棄土坑, PG13

(2) 溝跡

第68号溝跡 (第6・55図)

**位置** 調査区南部のE5a1～E5c3区、標高12.6mの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第9号廃棄土坑に掘り込まれている。第11号掘立柱建物跡とも重複しているが、新旧関係は不明である。

**規模と形状** 南東方向(N-135°-E)へ直線状に延びているが、第9号廃棄土坑と重複しているため、確認できた長さは11.5mである。規模は上幅80～160cm、下幅20～25cm、深さは58～106cmである。断面はU字状で、南部の東側に平場がある。底面は平坦で、南端から北端へ向かって緩やかに傾斜している。壁は下部が直立し、上部は外傾して立ち上がっている。

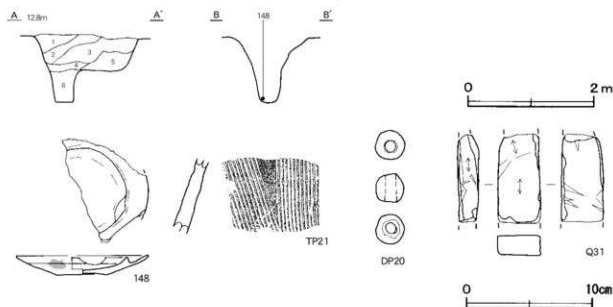
**覆土** 6層に分層できる。上部はロームブロックを多量に含んでいることから、埋め戻されている。最下層から砂粒が検出されており、下部は自然堆積である。

**土層解説**

1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 4 黒褐色 ロームブロック中量  
2 暗褐色 ロームブロック中量 5 暗褐色 ローム粒子中量  
3 暗褐色 ロームブロック少量 6 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子・砂粒微量

**遺物出土状況** 土師質土器片5点(鉢類)、瀬戸・美濃系陶器片1点(灯明受皿)、明石・堺系陶器片7点(播鉢)、肥前系磁器片5点(不明)、土製品1点(土玉)、石器2点(砥石)、鉄製品4点(釘2、不明2)、瓦片2点のほか、流れ込んだ礫3点が出土している。148が北部底面から出土し、ほかは覆土中から出土している。

**所見** 時期は、出土した陶磁器や重複関係から、18世紀後半に比定できる。



第6図 第68号溝跡・出土遺物実測図

第68号溝跡出土遺物観察表(第6図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	胎土色	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
148	陶器	灯明受皿	(10.3)	1.6	(4.0)	細砂	暗灰黄	灰白	良好	内面灰軸 外面油煙付着	北部底面	瀬戸・美濃系 40%
TP21	陶器	摺鉢	-	(5.9)	-	細砂	灰白	にぶい赤褐	普通	内面摺目 11条以上	覆土中	明石・堺系 5%
番号	器種	最大径	径	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考	
DP20	土玉	23	0.9	2.2	10.2	粘土	全面研磨 一方向からの穿孔			覆土中		
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考	
Q31	紙石	(7.1)	3.4	1.6	(64.9)	凝灰岩	紙面3面			覆土中		

## (3) 井戸跡

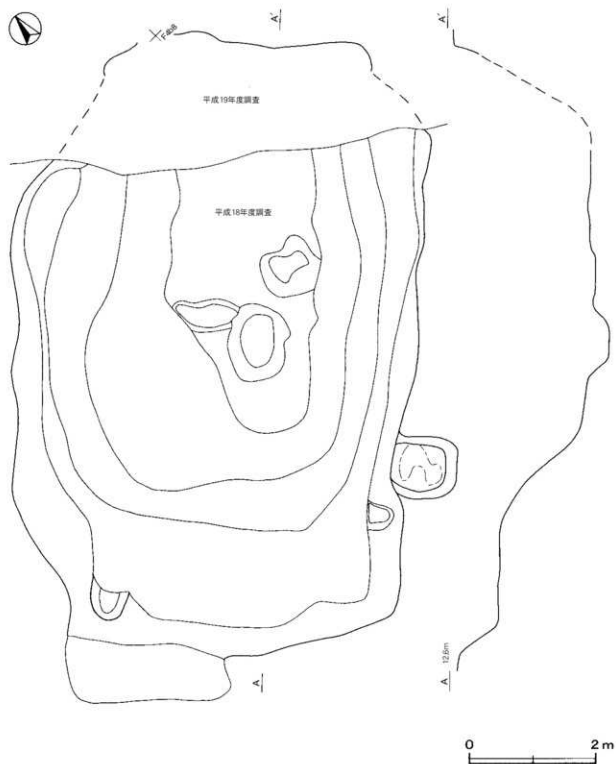
## 第10号井戸跡(第7図)

**位置** 調査区西部のE4 b8区。標高12.5mの台地平坦部に位置している。西部は平成18年度に調査されている。

**規模と形状** 東部壁際の一部を確認できた。前回調査された平面図と照合すると、長軸9.98m、短軸6.50mの長方形を呈し、長軸方向がN-40°-Eであることが判明した。覆土は攪乱を受けているため、ほとんど遺存していない。

**遺物出土状況** 土師質土器片3点(不明)、瀬戸・美濃系陶器片3点(碗2、徳利1)、鉄片3点(不明)、瓦片2点のほか、近現代と推定される産地不明磁器片6点(碗類)、ガラス片1点、煉瓦2点、礫5点が確認面から出土している。出土した土器や陶磁器は、細片のため図示できない。

**所見** 本跡は、前回の調査結果からまייず井戸と報告されているものである。今回の調査では、平面形が長方形であることが判明したが、内部が攪乱を受けており、本跡の北東部の形状などについては不明である。



第7図 第10号井戸跡実測図

(4) 溜め井跡

第9 A・B・C号溜め井跡 (第8・9図)

位置 調査区西部のD4 h0区、標高12.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 調査の結果、掘方への埋土や硬化した壁及び底面から、第9C号、第9B号、第9A号の順に構築され、2回の作り替えが行われていることが判明した。

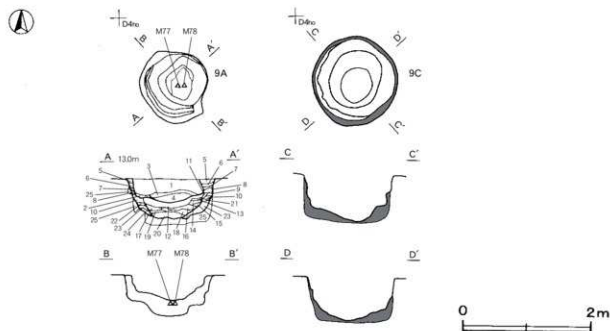
**規模と形状** 第9A号は、長径1.20m、短径1.06mの楕円形で、長径方向はN-43°-Wである。確認面からの深さは37cm、底面は皿状で、非常に硬化している。壁はロームブロックを含んだ土を充填して構築しており、ほぼ直立している。第9A号下に構築されていた第9B号は、確認面から35cm掘り下げたところで検出されており、確認できた径は1.28mの円形である。第9B号の壁は、第9C号の壁にロームブロックを充填して構築している。第9A号確認面からの深さは63cmで、底面はやや凹凸がある。壁は緩やかに立ち上がっている。第9C号は、第9B号外側に壁が検出され、確認できた径は1.30mの円形である。底面は第9B号と同じ面で、壁は外傾して立ち上がっている。底面と壁の一部に掘方への埋土が確認できた。

**覆土** 25層に分層できる。第1～4層は第9A号の覆土で、不自然な堆積状況を示していることから、埋め戻されている。第5～20層は第9A号の掘方への埋土で、締まりが非常に強く、突き固められている。第21～24層は第9B号の掘方への埋土で、締まりが非常に強く、突き固められている。第9B・C号は覆土が遺存していない。第25層は第9C号の掘方への埋土である。

**土層解説**

1 黒褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	13 暗褐色	ロームブロック多量、粘土粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子多量	14 褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック微量
3 褐色	ロームブロック中量	15 暗褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック微量
4 暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック・砂粒少量 炭化粒子微量	16 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック中量、粘土粒子少量	17 暗褐色	ロームブロック中量、粘土粒子微量
6 褐色	ロームブロック多量、粘土ブロック少量	18 褐色	ロームブロック中量、粘土粒子微量
7 におい褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子微量	19 極暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、粘土粒子・砂粒微量
8 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・鉄分微量	20 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
9 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	21 暗褐色	ロームブロック少量
10 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	22 暗褐色	ロームブロック多量
11 褐色	ロームブロック多量	23 暗褐色	ロームブロック・炭化物微量
12 黒褐色	ロームブロック少量、木片少量	24 極暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
		25 極暗褐色	ローム粒子・粘土粒子・砂粒微量

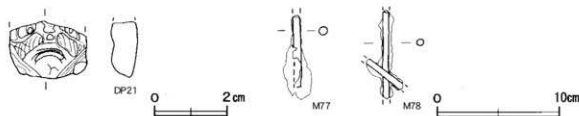
**遺物出土状況** 土師質土器片4点(焙烙2, 不明2)、瀬戸・美濃系陶器片6点(碗3, 瓶1, 水注1, 不明1)、瀬戸・美濃系磁器片2点(碗)、肥前系磁器片1点(碗)、産地不明磁器片5点(薄手酒杯3, 不明2)、土製品3点(泥面子1, 不明2)、鉄製品18点(釘6, 軸2, 鉄滓2, 不明8)、銅製品5点(古銭1, 不明)



第8図 第9A・B・C号溜め井跡実測図

4) が出土している。土器や陶磁器は細片のため図示できないが、壁の構築や埋め戻された覆土からまんべんなく出土している。DP21は第9A号の覆土中、M77・78は第9A号の底面から出土している。

**所見** 本跡は壁面及び底面が硬化した状況から、溜め井である。二度の作り替えが行われているが、構築方法が同じことから、時期差はほとんどないとみられる。第9A号の時期は、19世紀前半に比定できる。



第9図 第9A・B・C号溜め井跡出土遺物実測図

第9号溜め井跡出土遺物観察表 (第9図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP21	泥面子	(16)	2.1	0.7	(1.8)	粘土	人面	9A 覆土中	
M77	軸 <sup>a</sup>	(59)	0.7	0.7	(17.3)	鉄	断面円形	9A 底面	
M78	軸 <sup>a</sup>	(72)	(0.5)	0.5	(11.4)	鉄	断面円形 ほかの短い軸が接着	9A 底面	

第10号溜め井跡 (第10図)

**位置** 調査区西部のD5j2区、標高12.5mの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第11号掘立柱建物跡の内側に存在しているが、同時期か否かは不明である。

**規模と形状** 確認できた径は0.5mほどの円形である。確認面からの深さは6～8cmと浅く、下部のみが遺存している。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。

**遺物出土状況** 細片の鉄滓1点が出土している。構築部材とみられる板材が北部の壁面と底面から検出されている。底面の木片は非常に薄く、ほとんど遺存していないため、図示できない。

**所見** 本跡は下部のみしか遺存していないが、溜め井と推測される。壁面に確認された木片は、第11号溜め井でも確認されている。時期は、鉄滓が出土していることから、18世紀後半から19世紀前半と推測される。



第10図 第10号溜め井跡実測図

第11号溜め井跡 (第11図)

**位置** 調査区西部のD4j9区、標高12.6mの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第592号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 北東部が掘り込まれているため、確認できた長径が2.76m、短径1.75mの楕円形で、長径方向はN-48°-Eである。内部に2つの円形の落ち込みが検出されている。北東部の落ち込みは、確認面からの深さが64cmである。底面は皿状で、壁は緩やかに立ち上がっている。底面及び壁面には、構築部材とみられる



非常に薄い板材が確認されている。南西部の落ち込みは、確認面からの深さが48cmである。底面は皿状で、硬化している。壁は粘土ブロックを多量に含んだ土を充填して構築され、緩やかに立ち上がっている。

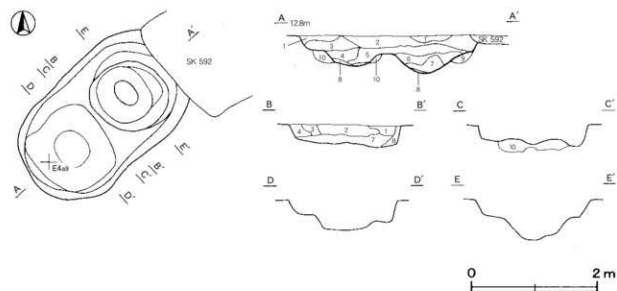
**覆土** 10層に分層できる。第1～7層は、ブロック状の堆積状況を示していることから、埋め戻されている。底面上にあたる第8層は、砂を多量に含んでおり、使用時に堆積した層と推測される。第9・10層は掘方への埋土である。

**土層解説**

1 暗褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック・炭化粒子少量	6 暗褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック少量
2 暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、炭化物微量	7 暗褐色	ロームブロック・砂粒中量、粘土ブロック少量
3 暗褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック微量	8 灰褐色	砂粒多量、ローム粒子少量
4 褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック少量	9 褐色	ロームブロック・粘土粒子中量
5 褐色	ローム粒子多量、粘土ブロック少量	10 褐色	ロームブロック・粘土ブロック中量

**遺物出土状況** 土師質土器片4点(焙烙1, 不明3), 瓦質土器片14点(火鉢), 瀬戸・美濃系陶器片1点(甕), 産地不明陶器片1点(不明), 肥前系磁器片2点(碗), 産地不明磁器片2点(皿), 土製品2点(泥面子), 鉄製品4点(釘3, 不明1)が出土している。出土した土器や陶磁器は、細片で図示できない。

**所見** 本跡は底面の構築状況から、溜め井である。底面で確認された木片の出土状況は、第10号溜め井と類似している。時期は、出土した陶磁器から19世紀前半と推測される。



第11図 第11号溜め井跡実測図

**第12号溜め井跡 (第12図)**

**位置** 調査区西部のE5 a2区、標高12.5mの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第11号掘立柱建物跡の内側に存在しているが、同時期か否かは不明である。

**規模と形状** 長径1.94m, 短径1.34mの楕円形で、長径方向はN-61°-Eである。確認面からの深さは64cmで、底面は平坦で硬化している。壁はロームブロックや粘土で構築されており、壁は外傾して立ち上がっている。

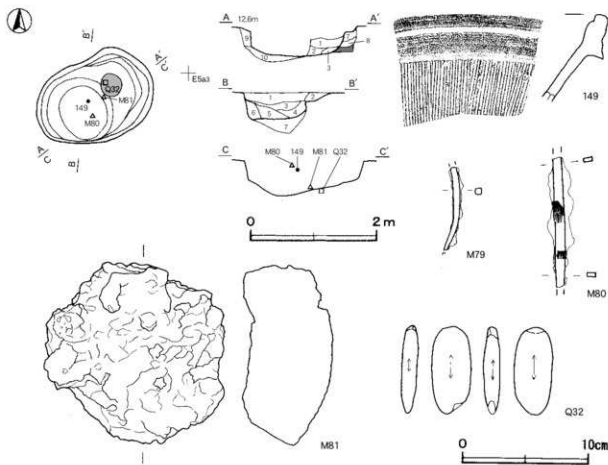
**覆土** 10層に分層できる。第1～6層が覆土で、ロームブロックや粘土粒子を含んでいることから、埋め戻されている。第7～10層は掘方への埋土である。

土層解説

- |       |                             |        |                          |
|-------|-----------------------------|--------|--------------------------|
| 1 暗褐色 | 砂粒少量、ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量  | 6 暗褐色  | ロームブロック・炭化物微量            |
| 2 褐色  | ロームブロック中量、炭化粒子・粘土粒子微量       | 7 褐色   | ロームブロック多量、炭化粒子微量         |
| 3 暗褐色 | 砂粒中量、ロームブロック・炭化物少量、粘土ブロック微量 | 8 褐色   | ロームブロック多量、炭化粒子・砂粒微量      |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量              | 9 暗褐色  | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック・炭化物少量               | 10 灰褐色 | 粘土ブロック多量、ローム粒子少量         |

遺物出土状況 土師質土器片13点(甕1, 焙烙12), 瓦質土器片4点(焙烙2, 不明2), 瀬戸・美濃系陶器片8点(碗), 明石・堺系陶器片1点(播鉢), 産地不明磁器片2点(不明), 石器4点(砥石3, 火打ち石1), 鉄製品13点(釘), 楠状滓2点のほか, 流れ込んだ縄文土器片1点, 細礫3点, 混入した瀬戸・美濃系磁器片7点(碗)も出土している。M79は覆土中, 149・M80は覆土上層から出土している。M81・Q32は底面から出土したもので, 羽口の先端部が付着している。なお, 底面中央付近から砂鉄が検出されている。

所見 本跡は, 底面が硬化している状況から, 溜め井跡である。時期は, 出土した陶磁器から, 19世紀前半に比定できる。



第12図 第12号溜め井跡・出土遺物実測図

第12号溜め井跡出土遺物観察表(第12図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	胎土色	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
149	陶器	播鉢	-	(70)	-	長石・石英	赤	普通	普通	内面幅目8条1単位。	覆土上層	明石・堺系5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q32	砥石	6.9	3.1	1.3	905	凝灰岩	砥面4面	底面	PL6
M79	釘	(6.7)	0.5	0.5	(5.4)	鉄	断面方形 頭部・先端部欠損	覆土中	PL6
M80	釘	(10.4)	0.7	0.3	(306)	鉄	断面方形 錆跡著 木片付着	覆土上層	PL6
M81	碗状洋	14.3	14.5	7.2	1670	鉄	表面は黒褐色で中核部は滑らかな で粘土粒子。組織が多量に付着 表面は暗青灰色	底面	PL6

表3 近世 溜め井跡一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模 (m) 深さ (cm)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係 (古→新)
				長径 × 短径	深さ					
9 A	D 4 h0	N-43°-W	楕円形	1.20 × 1.06	37	垂直	皿状	人為	土師質土器、陶器、磁器、土製品、 鉄製品、銅製品	WT9B・9C→本跡
9 B	D 4 h0	-	円形	(1.28) × (1.28)	63	緩斜	凹凸	人為		WT9C→本跡→WT9A
9 C	D 4 h0	-	円形	(1.30) × (1.30)	63	外傾	凹凸	人為		本跡→WT9A・9B
10	D 5 j2	-	円形	0.50 × 0.50	6~8	緩斜	平坦	不明	鉄洋	SB11
11	D 4 j9	N-48°-E	楕円形	(2.76) × 1.75	48.64	緩斜	皿状	人為	土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器 土製品、鉄製品	本跡→SK592
12	E 5 a2	N-61°-E	楕円形	1.94 × 1.34	64	外傾	平坦	人為	土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器 石器、鉄製品、碗状洋	SB11

## (5) 廃棄土坑

## 第5号廃棄土坑 (第13・14図)

**位置** 調査区中央部のD5f7区、標高12.8mの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 東部を第66号溝に掘り込まれている。

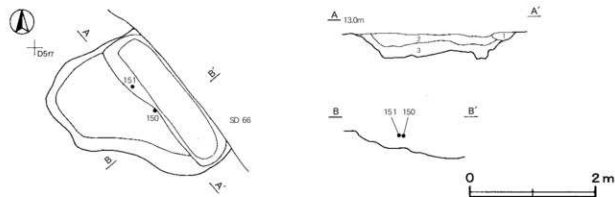
**規模と形状** 長径2.56m、確認できた短径が1.84mの不定形である。確認面からの深さは32~44cmで、東部底面が南部底面より18cm低く、有段状である。遺存している壁は、緩やかに立ち上がっている。

**覆土** 3層に分層できる。炭化物を多量に含んでいることから、埋め戻されている。

## 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量、炭化物微量  
2 黒褐色 炭化物多量、ローム粒子少量、焼土粒子・砂粒微量  
3 暗褐色 ローム粒子多量、炭化物微量

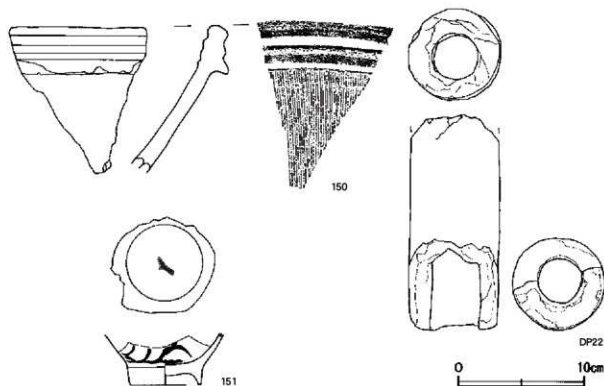
**遺物出土状況** 土師質土器片9点(焙烙)、瓦質土器片3点(焙烙)、瀬戸・美濃系陶器片14点(碗2、灯明受皿3、香炉1、鉢1、甕1、瓶1、不明5)、産地不明陶器片1点(緑釉皿<sub>a</sub>)、明石・堺系陶器片3点(播鉢)、肥前系磁器片3点(碗類3)、瀬戸・美濃系磁器片1点(碗)、土製品3点(羽口1、不明2)、鉄製品1点(釘)、碗状洋5点のほか、自然遺物8.3g(タニシ<sub>a</sub>)も出土している。土器類の総重量は、土師質土器片が181.7g。



第13図 第5号廃棄土坑実測図

瓦質土器片78.3g、陶器片695.5g、磁器片141.7gである。150・151は覆土上層から出土しており、DP22は覆土中から出土している。ほかの土器類は細片で、覆土中からまんべんなく出土している。羽口や椀状洋が出土したため精査をしたが、鍛造剥片や砂鉄は確認できなかった。

**所見** 本跡の本来の性格は不明であるが、廃絶後に廃棄場として利用され、埋め戻されている。時期は、出土した陶磁器から、19世紀前半に比定できる。



第14図 第5号廃棄土坑出土遺物実測図

#### 第5号廃棄土坑出土遺物観察表（第14図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	胎土色	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
150	陶器	椀鉢	-	(11.5)	-	長石		明赤褐	普通	内面横目8条1単位*	覆土上層	明石・堺系 0%
151	磁器	中碗	-	(4.1)	5.4	緻密	灰白	灰白	良好	広車輪 外面草文 縁筋一重内「口」 高台一重内	覆土上層	肥前系 90%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考	
DP22	羽口	(17.1)	7.3	7.2	(60.0)	粘土・スサ	口径約3.9cm	先端部欠損		覆土中	PL5	

#### 第6号廃棄土坑（第15図）

**位置** 調査区西部のD5i3区、標高12.6mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 長径2.25m、短径1.87mの楕円形で、長径方向はN-72°-Eである。確認面からの深さは24cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

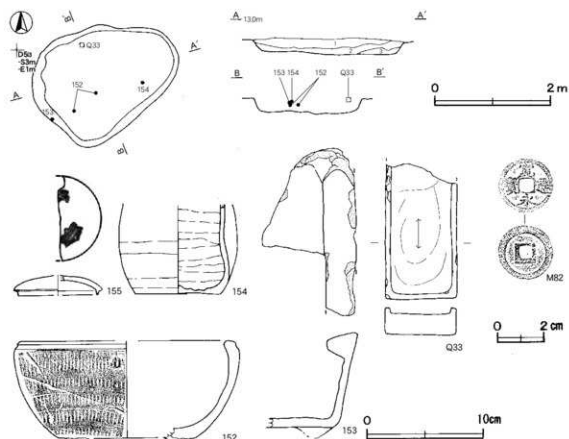
**覆土** 3層に分層できる。不自然な堆積状況であることから、埋め戻されている。

#### 土層解説

- 1 暗褐色 砂粒中量、ロームブロック少量、炭化粒子微量 3 褐色 ロームブロック中量  
2 褐色 砂粒少量、ロームブロック微量

**遺物出土状況** 土師質土器片29点(皿1, 培烙23, 鉢3, 火鉢2), 瓦質土器片2点(培烙), 瀬戸・美濃系陶器片14点(碗5, 灯明皿1, 徳利1, 鉢7), 明石・堺系陶器片1点(搦鉢), 肥前系磁器片11点(碗類9, 仏飯器1, 蓋1), 石製品2点(硯, 砥石), 鉄製品4点(釘2, 不明2), 銅製品1点(古銭)のほか, 軽石1点, 細礫4点も出土している。土器などの総重量は, 土師質土器片1660.1g, 瓦質土器片25.8g, 陶器片586.1g, 磁器片346.6gである。152-154は覆土中層, Q33は覆土上層から, 155・M82は覆土中からそれぞれ出土している。図示できないそのほかの遺物は, 覆土中からまんべんなく出土している。

**所見** 本跡の本来の性格は不明であるが, 廃絶後に廃棄場として利用され, 埋め戻されている。時期は, 出土した陶磁器から19世紀前半に比定できる。



第15図 第6号廃棄土坑・出土遺物実測図

第6号廃棄土坑出土遺物観察表(第15図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	胎土色	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
152	瓦質土器	火鉢	(18.1)	8.6	(11.7)	長石		赭灰	普通	外面型押文様 三足部貼り付け	覆土中層	30%
153	土師質土器	火鉢	-	8.9	-	長石・赤色粒子		にぶい黄橙	普通	方形 脚部貼り付け	覆土中層	10%
154	陶器	徳利	-	(7.8)	7.3	細砂	灰黄	赤褐	普通	錯輪 ベこかん	覆土中層	瀬戸・美濃系 30%
155	磁器	蓋	(6.8)	(1.7)	-	緻密	灰白	灰白	良好	天井部文様不明	覆土中	瀬戸・美濃系 50%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考		
Q33	硯	(11.7)	6.2	2.3	(276.0)	凝灰岩	丘部やや摩耗		覆土上層	PL6		
番号	銭名	径	孔幅	重量	初铸年	材質	特徴		出土位置	備考		
M82	寛永通寶	24	0.1	292	1636	銅	古寛永 無背		覆土中			

### 第7号廃棄土坑（第16図）

**位置** 調査区西部のE5a1区、標高12.5mの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第11号掘立柱建物跡、第6号不明遺構を掘り込み、第13号ピット群に掘り込まれている。

**規模と形状** 軸は2.1mの方形で、軸方向はN-60°-Eである。確認面からの深さは72cmで、底面は平坦である。壁は直立している。

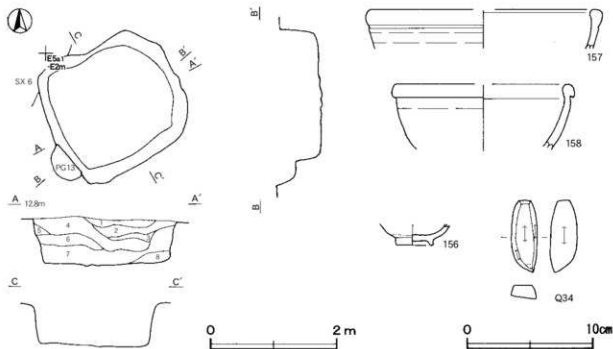
**覆土** 8層に分層できる。ロームブロックや粘土ブロックを含んでいることから、埋め戻されている。

#### 土層解説

- |                                       |   |
|---------------------------------------|---|
| 1 暗褐色 粘土ブロック多量、炭化物・ローム粒子中量、<br>粘土粒子少量 | 5 暗褐色 ロームブロック中量、炭化物微量                   |
| 2 黒褐色 粘土ブロック・炭化物中量、焼土ブロック・<br>ローム粒子少量 | 6 暗褐色 粘土ブロック・炭化物中量、ローム粒子少量、<br>焼土ブロック微量 |
| 3 褐色 ロームブロック・粘土ブロック中量                 | 7 灰褐色 粘土ブロック・炭化物中量、焼土ブロック・<br>ローム粒子少量   |
| 4 黒褐色 炭化物多量、粘土ブロック中量、ローム粒子・<br>粘土粒子少量 | 8 暗褐色 ローム粒子中量・炭化物焼土粒子・<br>粘土粒子少量        |

**遺物出土状況** 土師質土器片31点（焙烙）、瓦質土器片6点（焙烙4、火鉢2）、瀬戸・美濃系陶器片24点（碗9、鉢2、播鉢1、灯明皿2、瓶1、徳利5、不明4）、明石・堺系陶器片1点（播鉢）、肥前系磁器片17点（碗4、皿2、猪口1、不明10）、瀬戸・美濃系磁器片2点（碗、不明）、土製品2点（不明）、石製品2点（砥石、硯）、鉄製品23点（釘14、不明9）、銅製品1点（不明）、鉄滓2点のほか、細礫9点も出土している。土器などの総重量は、土師質土器片494.0g、瓦質土器片108.7g、陶器片283.1g、磁器片127.9gである。図示したものは、すべて覆土中から出土している。

**所見** 本跡の本来の性格は不明であるが、廃絶後に廃棄場として利用され、埋め戻されている。時期は、出土した陶磁器から、19世紀前半に比定できる。



第16図 第7号廃棄土坑・出土遺物実測図

第7号廃棄土坑出土遺物観察表 (第16図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	胎土色	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
156	陶器	小碗	-	(1.7)	2.9	細砂	灰	灰オリーブ	普通	灰軸 高台際無軸	覆土中	瀬戸・美濃系 50%
157	陶器	鉢	(17.9)	(3.2)	-	細砂	浅黄	灰オリーブ	普通	内・外面灰軸	覆土中	瀬戸・美濃系 5%
158	陶器	鉢	(13.7)	(5.2)	-	細砂	浅黄	浅黄	普通	内・外面灰軸	覆土中	瀬戸・美濃系 5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q34	紙石	5.7	2.0	1.1	167	凝灰岩	紙面4面	覆土中	PL6

第8号廃棄土坑 (第17図)

位置 調査区東部のD6c2区、標高12.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第517号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸1.70m、短軸1.50mの長方形で、長軸方向はN-41°-Wである。確認面からの深さは36-50cmである。底面はほぼ平坦であるが、西部の壁付近がやや落ち込んでいる。確認できた壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 4層に分層できる。ローム粒子や炭化材の堆積状況から、埋め戻されている。

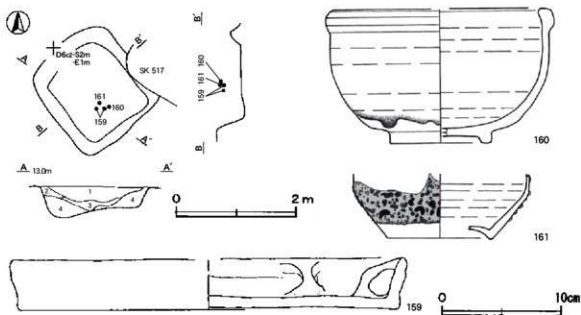
## 土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック・炭化材少量  
2 暗褐色 ローム粒子多量、炭化粒子微量

- 3 極暗褐色 ローム粒子多量、炭化材・粘土粒子微量  
4 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子微量

遺物出土状況 土師質土器片2点(焙烙)、瓦質土器片1点(火鉢)、瀬戸・美濃系陶器片1点(鉢)、明石・堺系陶器片1点(擂鉢)、大塚・相馬系陶器片1点(土瓶)、鉄製品1点(釘)のほか、瓦片1点も出土している。土器類の総重量は、土師質土器49.6g、瓦質土器1211.7g、陶器795.9gである。159-161は覆土上層から出土している。ほかの土器類は細片で、覆土中からまんべんなく出土している。

所見 本跡の本来の性格は不明であるが、廃絶後に廃棄場として利用され、埋め戻されている。時期は、出土した陶磁器から、19世紀前半に比定できる。



第17図 第8号廃棄土坑・出土遺物実測図

第8号廃棄土坑出土遺物観察表 (第17図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	胎土色	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
159	瓦質土器	焙烙	(32.8)	4.2	(31.8)	長石・石英	黄灰	普通	普通	耳部擦痕	覆土上層	60%
160	陶器	鉢	(17.3)	11.2	(8.4)	細砂	灰白	にぶい黄橙	普通	内・外面灰釉 高台附取軸	覆土上層	瀬戸・美濃系 50% PL9
161	陶器	土瓶	-	(5.4)	(8.8)	細砂	浅黄	浅黄	普通	外面鉄釉 鮫肌	覆土上層	大塚・相馬系 30% PL5

第9号廃棄土坑 (第18・19図)

位置 調査区西部のE5a2区、標高12.6mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第11号掘立柱建物跡、第68号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.30m、短軸2.40mの隅丸長方形である。長軸方向はN-48°-Eである。確認面からの深さは35cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

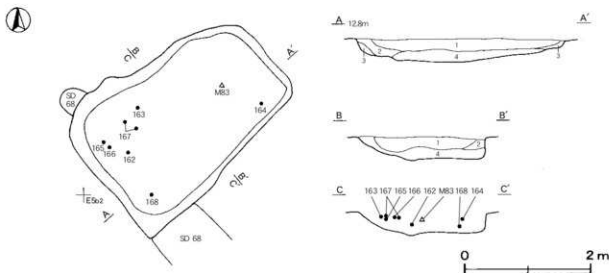
覆土 4層に分層できる。ロームブロックや炭化物を多量に含んでいることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 炭化物多量、ロームブロック中量、砂粒少量      3 褐色 ロームブロック中量、炭化物少量  
2 褐色 炭化物中量、ロームブロック少量                  4 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量

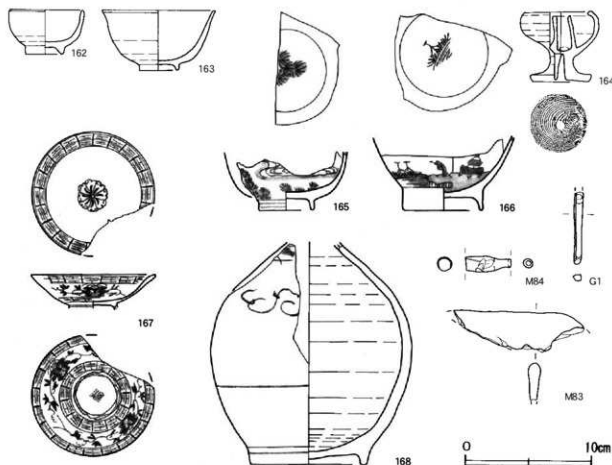
遺物出土状況 土師質土器片50点(焙烙49、不明1)、瓦質土器片5点(焙烙)、瀬戸・美濃系陶器片13点(碗4、皿1、灯明皿2、乗燗1、鉢1、搦鉢1、瓶2、甕1)、明石・堺系陶器片1点(搦鉢)、産地不明陶器片8点(碗)、肥前系磁器片12点(碗10、皿1、瓶1)、瀬戸・美濃系磁器片4点(碗2、皿1、蓋1)、産地不明磁器片4点(碗類)、石製品3点(砥石)、ガラス製品1点(簪)、鉄製品67点(包丁1、釘38、不明鉄製品28)、銅製品1点(煙管)、軽石2点のほか、縄文土器片5点、瓦片4点、ガラス片2点、細砂12点も出土している。土器などの総重量は、土師質土器片724.0g、瓦質土器片159.0g、陶器片793.7g、磁器片1055.2gである。163～167・M83は覆土上層、162・168は覆土中層、M84・G1は覆土中から出土している。覆土下層からも出土しているが、細片のため図示できない。

所見 本跡の本来の性格は不明であるが、廃絶後に廃棄場として利用され、埋め戻されている。時期は、重複関係や出土した陶磁器から、19世紀前半に比定できる。



第18図 第9号廃棄土坑実測図





第19図 第9号廃棄土坑出土遺物実測図

第9号廃棄土坑出土遺物観察表 (第19図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	胎土色	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
162	陶器	小碗	5.8	3.5	2.9	細砂	灰白	にぶい黄橙	普通	灰軸 高台際無軸	覆土中層	瀬戸・美濃系 90%
163	陶器	小碗	8.9	4.7	3.0	細砂	灰白	にぶい黄橙	普通	灰軸 端反碗	覆土上層	瀬戸・美濃系 90% PL7
164	陶器	薬壺	5.3	5.6	4.6	緻密	灰白	灰白	普通	鉄軸 台付たんころ形 底部に転み切り	覆土上層	瀬戸・美濃系 100% PL7
165	磁器	中碗	-	(4.5)	(4.2)	緻密	灰白	灰白	良好	外周若松文 高台二重内 見込みに一重内内松文	覆土上層	瀬戸・美濃系 30%
166	磁器	中碗	-	(5.8)	6.1	緻密	灰白	灰白	良好	広車轆 外周風葉 見込みに一重内内松文	覆土上層	肥前系 30%
167	磁器	小皿	9.8	(2.7)	-	緻密	灰白	灰白	良好	内面口縁部幾何学文 見込みに着在文 外面幾何学文吹草花文 灰白内襷	覆土上層	瀬戸・美濃系 80% PL8
168	磁器	瓶	-	(17.5)	9.2	緻密	灰白	灰白	良好	外側胴部1本線と唐草文	覆土中層	肥前系 50% PL9

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M83	包丁	(10.4)	(3.1)	1.1	(53.0)	鉄	先端部および柄部欠損	覆土上層	PL6
M84	煙管	3.1	0.7	1.1	5.8	銅	吸口部 葉の模様	覆土中	
G1	簪	(5.6)	0.6	0.5	(4.5)	ガラス	上のみ欠損	覆土中	PL6

表4 近世 廃棄土坑一覽表

番号	位置	長軸(径)方向	平面形	規模(m) 深さ(cm)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長軸(径)×短軸(径)	深さ					
5	D 5 7	-	不定形	256×(184)	32~44	縦斜	有段	人為	土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器、土製品、鉄製品、陶器、自然遺物	本跡→SD66
6	D 5 3	N-72°-E	楕円形	225×1.87	24	外傾	平坦	人為	土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器、石製品、鉄製品、銅製品、軽石、燧石	
7	E 5 a1	N-60°-E	方形	210×2.10	72	直立	平坦	人為	土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器、土製品、石製品、鉄製品、銅製品、軽石、燧石	SB11・SX6→本跡→PG13

番号	位置	長軸(径)方向	平面形	規模 (m) 深さ (cm)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長軸(径)×短軸(径)	深さ					
8	D 6 c2	N-41°-W	長方形	1.70×1.50	36-50	外傾	平坦	人為	土師質土器、瓦質土器、陶器、鉄製品、瓦	本跡→SK517
9	E 5 a2	N-48°-E	長方形	3.30×2.40	35	外傾	平坦	人為	土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器、石製品、鉄製品、銅製品、雜石	SB11・SD68→本跡

#### (6) 土坑 (第20～24図)

近世の土坑は17基確認されている。ここでは、特徴ある1基について記述し、その他については、一覧表と実測図および土層解説を、遺物については、実測図と観察表を記載するにとどめる。

#### 第571号土坑 (第20図)

**位置** 調査区中央部のD4h9区、標高12.6mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 長軸2.03m、短軸0.64mの長方形で、長軸方向はN-40°-Wである。確認面からの深さは42cmで、底面は凹凸がある。壁は外傾して立ち上がっている。

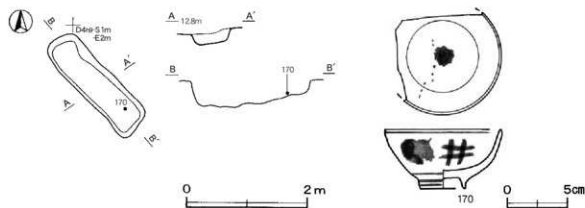
**覆土** 単一層である。ロームブロックを多量に含んでいることから、埋め戻されている。

#### 土層解説

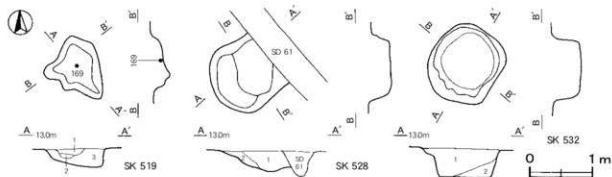
1 暗褐色 ロームブロック中量、炭化物微量

**遺物出土状況** 土師質土器片11点(焙烙)、瀬戸・美濃系陶器片2点(瓶)、肥前系磁器片1点(碗)、鉄製品1点(釘)が出土している。170は南東部の覆土下層から出土している。

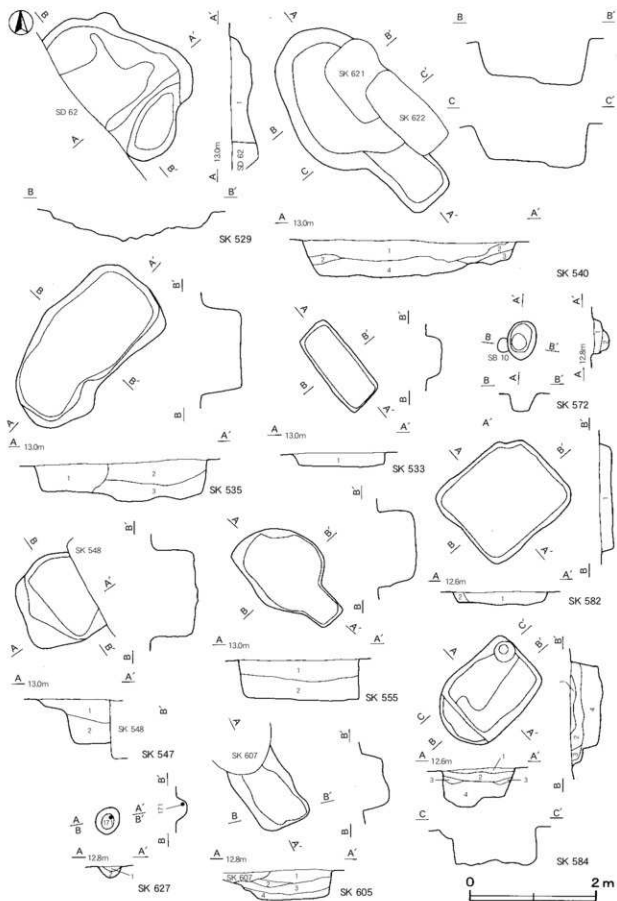
**所見** 時期は、出土した陶磁器から18世紀後半に比定できる。



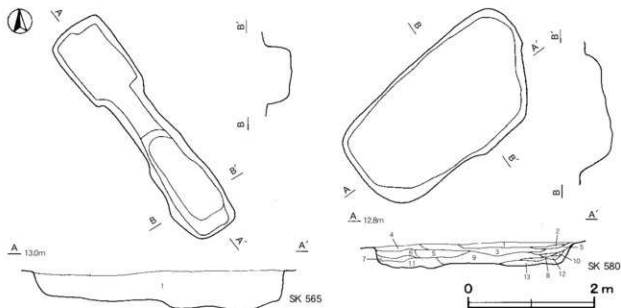
第20図 第571号土坑・出土遺物実測図



第21図 土坑実測図(1)



第22図 土坑実測図(2)



第23図 土坑実測図(3)

**第519号土坑土層解説**

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 砂粒多量、ロームブロック微量
- 3 褐色 ロームブロック中量

**第528号土坑土層解説**

- 1 暗褐色 ロームブロック多量、炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック多量

**第529号土坑土層解説**

- 1 暗褐色 粘土粒子多量、ロームブロック中量

**第532号土坑土層解説**

- 1 暗褐色 粘土粒子中量、ロームブロック、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、粘土粒子微量

**第533号土坑土層解説**

- 1 暗褐色 ロームブロック、炭化粒子、粘土粒子微量

**第535号土坑土層解説**

- 1 暗褐色 ロームブロック中量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量

**第540号土坑土層解説**

- 1 濃い黄褐色 ロームブロック、砂粒少量、炭化物、粘土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量

**第547号土坑土層解説**

- 1 暗褐色 ロームブロック中量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量

**第555号土坑土層解説**

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

**第565号土坑土層解説**

- 1 暗褐色 ロームブロック多量、砂粒中量

**第572号土坑土層解説**

- 1 暗褐色 ロームブロック中量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量

**第580号土坑土層解説**

- 1 褐色 ロームブロック、粘土ブロック中量
- 2 暗褐色 ロームブロック多量、粘土ブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック多量、粘土粒子、砂粒微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量、粘土ブロック、炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック中量、粘土ブロック、砂粒微量
- 6 暗褐色 ロームブロック中量、粘土粒子、砂粒微量
- 7 暗褐色 粘土ブロック少量、ロームブロック微量
- 8 褐色 ロームブロック多量、粘土粒子微量
- 9 極暗褐色 ロームブロック中量、炭化物、粘土ブロック少量
- 10 極暗褐色 ロームブロック少量
- 11 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子、炭化粒子、粘土粒子微量
- 12 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 13 暗褐色 ロームブロック少量、粘土粒子微量

**第582号土坑土層解説**

- 1 暗褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量

**第584号土坑土層解説**

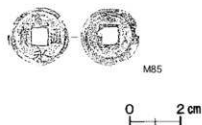
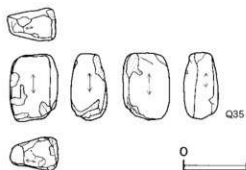
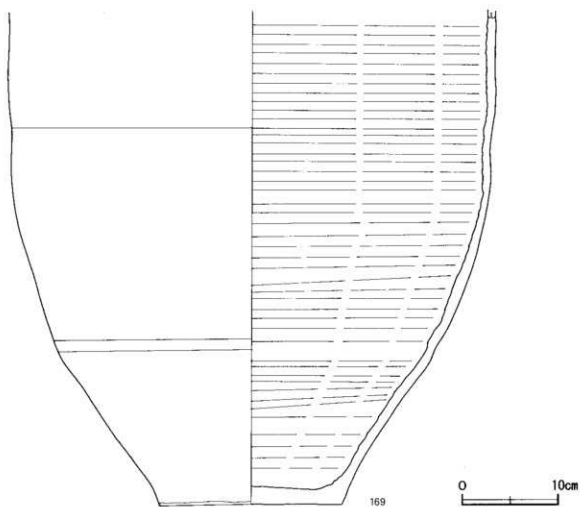
- 1 暗褐色 ロームブロック中量、炭化物少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量

**第605号土坑土層解説**

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、粘土ブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量、粘土ブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック、粘土ブロック少量、炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子、炭化粒子微量

**第627号土坑土層解説**

- 1 極暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量、炭化粒子微量



第24図 土坑出土遺物実測図

土坑出土遺物観察表 (第20・24図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	胎土色	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
169	陶器	壺	-	(51.7)	190	細砂	灰白	橙	普通	内面磨蝕	覆土下層	SK519 40% SK517・赤土系
170	磁器	中瓶	(98)	4.9	3.6	緻密	灰白	明緑灰	良好	外面2本線内に紫と井見込みに一重内花	覆土下層	SK571 70% SK572 PL.7
171	土師質土器	火鉢	(280)	11.8	(23.7)	長石・石英・赤色粘土		橙	普通	内面窪付着	覆土下層	SK627 60%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q35	紙石	5.2	3.9	2.7	71.8	凝灰岩	紙面6面	覆土中	SK535

番号	銭名	径	孔幅	重量	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
M85	寛永通寶	2.38	0.68	2.20	1697	銅	新寛永 無背	覆土中	SK584

表5 近世 土坑一覽表

番号	位置	長軸(往)方向	平面形	規模(m) 深さ(cm)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長軸(往)×短軸(往)	深さ					
519	D 5 c5	N-42°-W	不定形	0.98×0.88	30	外傾	圓状	人為	土師質土器	
528	D 5 d9	N-48°-W	隅丸長方形	(1.12)×1.02	34	外傾	平坦	人為	磁器	本跡→SD61
529	D 5 c6	N-40°-W	不整楕円形	2.55×(1.67)	17~46	外傾	凹凸	人為	土師質土器	本跡→SD62
532	D 5 g4	N-30°-E	隅丸長方形	1.26×1.10	44	外傾	平坦	自然	土師質土器、陶器、磁器	
533	D 5 g3	N-39°-W	隅丸長方形	1.46×0.62	22	垂直	平坦	人為	陶器、磁器、不明鉄製品	
535	D 5 h7	N-31°-E	隅丸長方形	2.76×1.45	62	垂直	平坦	人為	土師質土器、陶器、磁器、鉄製品、石製品、鉄滓	
540	D 5 f7	-	不定形	3.43×(1.60)	57	外傾	平坦	人為	土師質土器、陶器、磁器、鉄製品、銅製品、鉄滓	本跡→SK621・622
547	D 5 h8	N-35°-W	不整楕円形	1.47×(1.20)	69	垂直	平坦	人為	土師質土器、陶器、磁器、鉄滓	本跡→SK548
555	D 5 f3	-	不定形	1.90×1.21	62	外傾	平坦	自然	土師質土器、陶器、磁器、石製品	
565	D 5 g7	N-37°-W	不整長方形	3.99× $\frac{0.58}{0.94}$	40~62	外傾	平坦	人為	土師質土器、陶器、磁器、鉄製品、鉄滓、鏝	
571	D 4 h9	N-40°-W	長方形	2.03×0.64	42	外傾	凹凸	人為	土師質土器、陶器、磁器、鉄製品	
572	D 4 h9	N-67°-E	不整楕円形	0.64×0.47	27	外傾	圓状	人為	土師質土器、磁器	SB10→本跡
580	E 4 a9	N-53°-E	不整楕円形	3.35×1.67	50	外傾	凹凸	人為	土師質土器、陶器、磁器、鉄製品	
582	E 4 b0	N-50°-E	隅丸長方形	1.72×1.50	20	外傾	平坦	人為	土師質土器、陶器、磁器	
584	E 4 b0	N-48°-E	不定形	1.68×1.20	60	垂直	凹凸	人為	土師質土器、陶器、磁器、銅製品、鏝	
605	E 5 a5	-	不定形	(1.19)×0.83	32~43	外傾	圓状	人為	土師質土器、陶器、鉄製品	本跡→SK607
627	D 5 h5	-	円形	0.46×0.40	18	緩斜	圓状	人為	土師質土器	

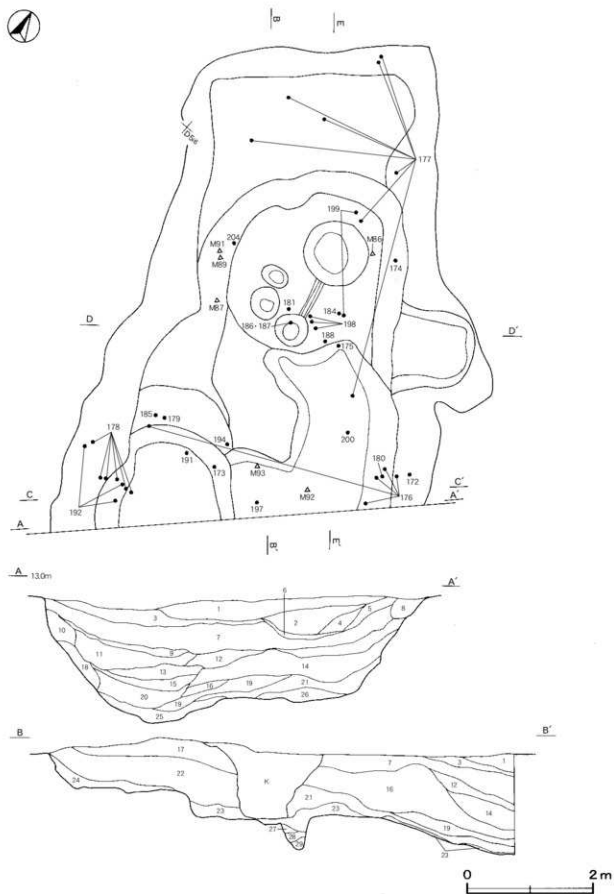
(7) 不明遺構

## 第5号不明遺構 (第25~31図)

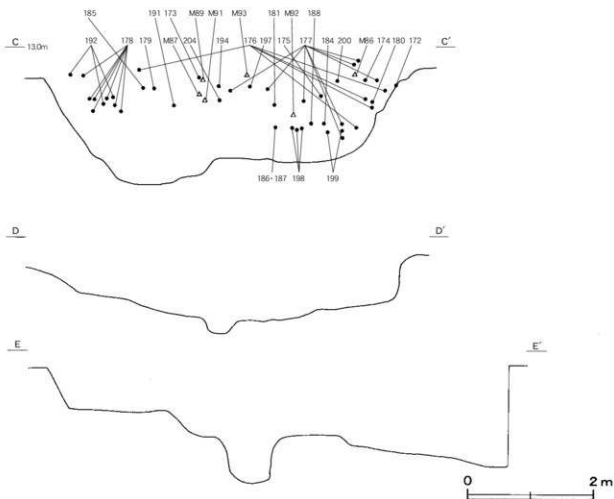
位置 調査区南部のD5 h6区、標高12.8mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 南部が調査区域外へ延びており、中央部が擾乱を受けている。確認できた長軸は7.48mで、短軸5.64mの不定形と推定され、長軸方向は(N-45°-W)である。北部に長軸3.1m、短軸1.5mの長方形の平場があり、中央部にも長径2.5m、短径2.4mの円形の平場がある。さらに東部には、軸が1.3mの張り出し部がある。2つの平場と張り出し部には、踏み固められた痕跡がみられない。確認できた底面は、確認面から170cmまで階段状に落ち込んでいるが、調査区域外へ延びているため、全容は明らかでない。

**覆土** 29層に分層できる。ロームブロックを多量に含んだ土で下層からレンズ状に埋め戻している。



第25図 第5号不明遺構実測図(1)



第26図 第5号不明遺構実測図(2)

土層解説

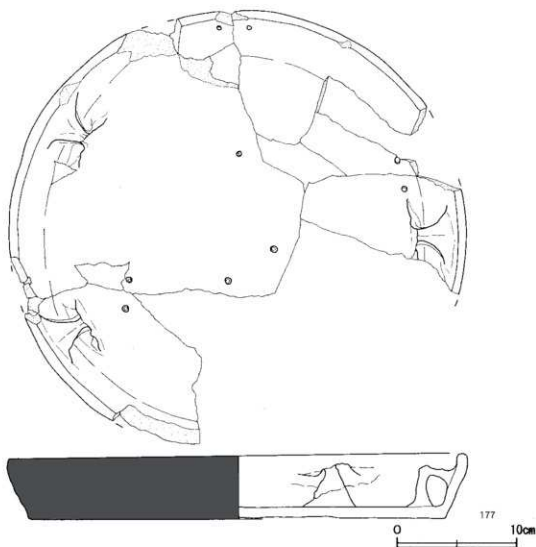
1 黒暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子・粘土粒子微量	16 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子・粘土粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック・粘土粒子中量、炭化粒子微量	17 明褐色	ローム粒子多量、鉄分微量
3 暗褐色	ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量	18 暗褐色	ローム粒子多量
4 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子・粘土粒子微量	19 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子・粘土粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子・粘土粒子微量	20 黒褐色	ロームブロック・粘土粒子少量、炭化材・砂粒微量
6 灰褐色	灰多量、ロームブロック・炭化物微量	21 灰褐色	粘土粒子少量、ロームブロック・炭化材・砂粒微量
7 黒褐色	炭化材中量、ロームブロック・粘土粒子微量	22 橙褐色	ロームブロック多量
8 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子・粘土粒子微量	23 黒暗褐色	ロームブロック・鉄分多量、炭化粒子少量
9 黒褐色	焼土ブロック多量、炭化物少量、ローム粒子・粘土粒子微量	24 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子微量
10 黒褐色	ロームブロック中量、炭化材微量	25 黒褐色	炭化物・粘土粒子・砂粒少量、ロームブロック・鉄分微量
11 黒褐色	炭化物中量、粘土粒子少量、ロームブロック・砂粒微量	26 褐色	ロームブロック・鉄分多量、炭化粒子微量
12 暗褐色	ロームブロック多量、炭化材・粘土粒子微量	27 暗褐色	ロームブロック中量、砂粒微量
13 暗褐色	ロームブロック中量、炭化物・粘土粒子微量	28 黒暗褐色	ロームブロック少量、砂粒微量
14 暗褐色	ロームブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量	29 暗褐色	ロームブロック中量
15 黒暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・鉄分微量		

遺物出土状況 土師質土器片238点(皿類13, 焙烙208, 鉢類1, 火鉢5, 風炉2, 不明9), 瓦質土器片49点(焙烙46, 鉢3), 瀬戸・美濃系陶器片125点(碗類37, 仏飯器2, 灯明皿6, 皿類21, 鉢4, 蓋2, 片口1, 播鉢13, 甕2, 壺2, 瓶9, 德利12, 水注1, 不明13), 肥前系陶器2点(皿類), 唐津系陶器片4点(皿類), 大塚・相馬系陶器片3点(瓶1, 行平鍋2), 備前系陶器片2点(德利), 明石・堺系陶器片11点(播鉢), 産地不明陶器片5点(碗1, 鉢類4), 肥前系磁器片19点(碗類12, 皿1, 猪口2, 不明4), 産地不明磁器片144点

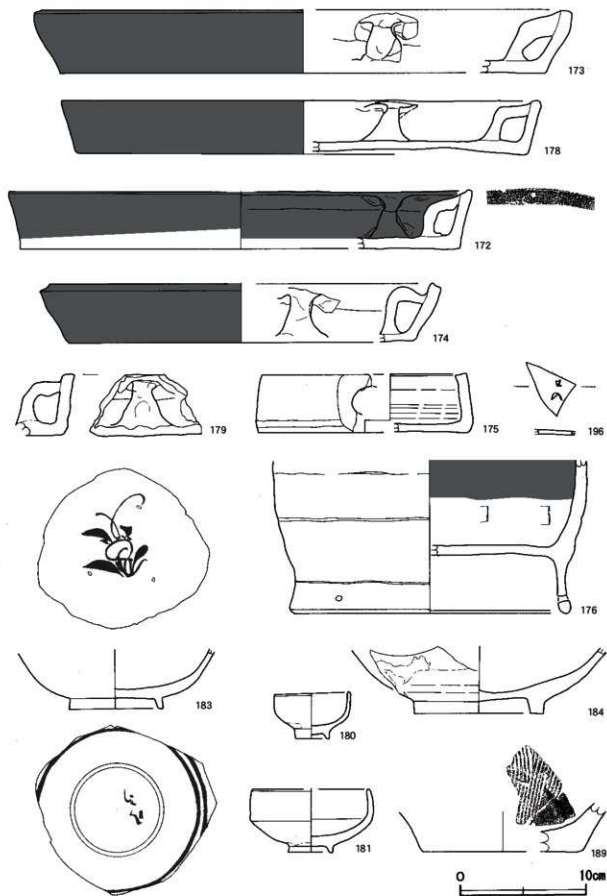


(碗類108, 青磁碗2, 色絵9, 皿類12, 猪口3, 香炉1, 瓶6, 急須1, 不明2), 土製品4点(羽口1, 不明3), 鉄製品261点(釘164, 鍵1, 軸5, 錠4, 不明87), 碗状滓5点, 銅製品19点(古銭5, 銅輪1, 不明13), 銀貨1点(一分銀), 石器22点(砥石12, 火打ち石10), 石製品5点(硯), ガラス製品1点(簪), 瓦片211点のほか, 混入したガラス片54点, 煉瓦34点も出土している。出土土器・陶磁器の総重量は, 土師質土器片5428.0g, 瓦質土器片929.0g, 陶器片8405.5g, 磁器片3298.7gである。第6号不明遺構と同様に覆土中・下層のレベルに集中しているが, 176や177のように覆土上から下層にかけての破片がそれぞれ接合関係にあることから, 短期間に埋め戻されたものと推測される。また, 203は覆土中からの出土であるが, 第6号不明遺構の覆土中の破片と接合している。

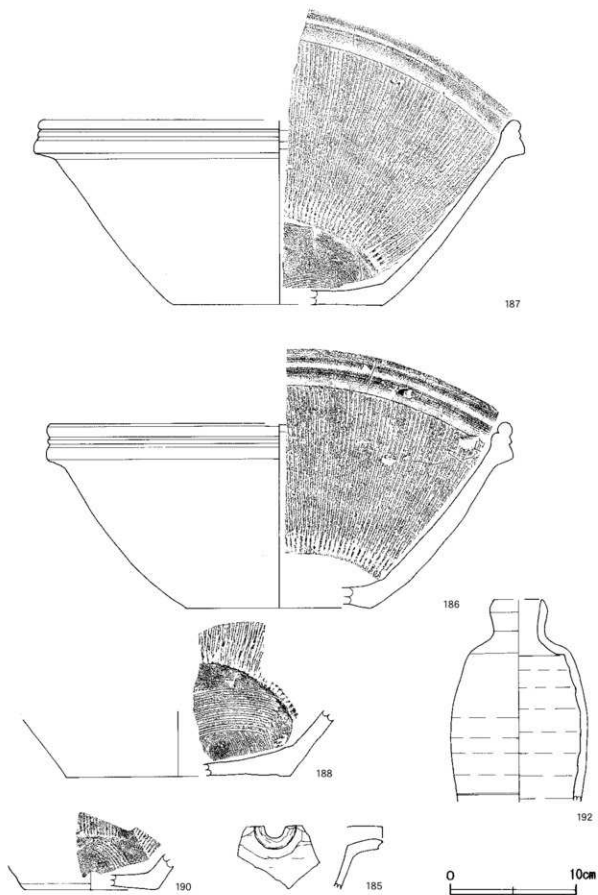
**所見** 張り出し部や平場を持つ形状は, 『同所新田1』で報告された第10号井戸跡と類似しているが, 調査区域外に延びているため, 全容は明らかでない。本跡は, 当遺跡の中でも大形で, 深い堀り込みを持っていることから, 何らかの地下式遺構とみられるが, 性格は不明である。本来の機能を終えた後は, 陶磁器の出土状況から廃棄場に転用されている。出土遺物が18世紀後半と19世紀前半のものが混在していることから, 廃棄場に転用された時期は, 19世紀前半に比定できる。



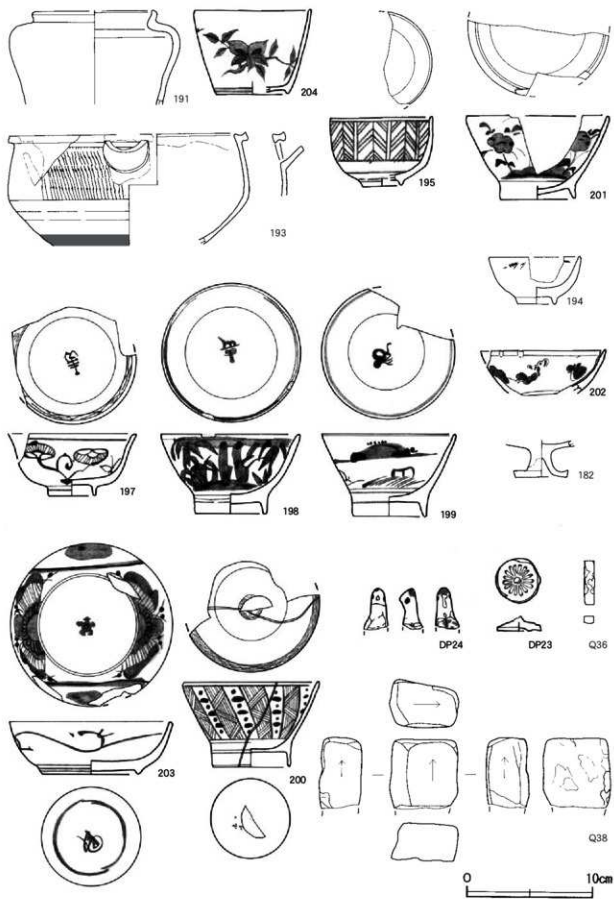
第27図 第5号不明遺構出土遺物実測図(1)



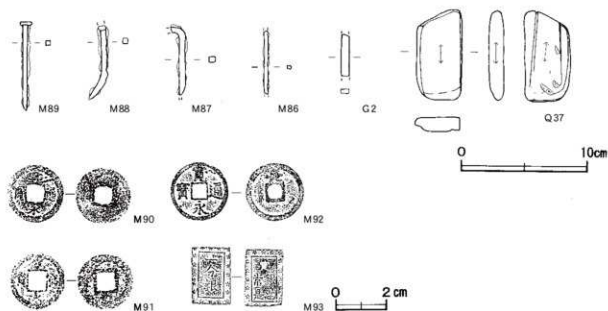
第28图 第5号不明遺構出土遺物実測図(2)



第29図 第5号不明遺構出土遺物実測図(3)



第30图 第5号不明遺構出土遺物実測図(4)



第31図 第5号不明遺構出土遺物実測図(5)

第5号不明遺構出土遺物観察表(第27～31図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・胎土色	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
172	土師質土器	焙烙	(36.5)	4.7	(35.0)	長石・雲母	にぶい黄褐色	普通	内・外面煤付着 耳部擦痕 口縁部部に付型の刺突痕	覆土上層	20%
173	土師質土器	焙烙	(41.0)	5.0	(38.5)	長石・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	外面煤付着 耳部擦痕	覆土上層	5%
174	土師質土器	焙烙	(30.4)	4.6	(27.3)	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	外面煤付着	覆土上層	5%
175	土師質土器	火入	(16.2)	4.6	(16.7)	長石・石英・赤色粒子	明赤褐色	普通	体部外面下縁へラ削り	覆土中層	40%
176	土師質土器	火鉢	-	(12.0)	(21.6)	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	外面体部及び高台に平行沈凹 内面煤付着 高台削り付け 高台に1本の穿孔	覆土上層 一下層	30% PL5
177	土師質土器	焙烙	38.2	5.5	34.4	長石・石英・赤色粒子	灰黄褐色	普通	外面煤付着 修繕孔9か所	覆土上層 一下層	80% PL5
178	瓦質土器	焙烙	38.0	4.3	(36.0)	長石・石英	灰	普通	外面煤付着 耳部擦痕	覆土上層 一下層	60%
179	瓦質土器	焙烙	-	4.9	-	雲母・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	耳部摩耗	覆土上層	5%
180	陶器	小碗	6.0	3.7	2.6	細砂 灰白	灰白	良好	灰釉	覆土中層	麻戸・美濃系 50% PL7
181	陶器	中碗	(9.1)	5.0	3.5	細砂 灰白	灰白	良好	灰釉 腰折痕	覆土中層	麻戸・美濃系 50%
182	陶器	仏飯器	-	(2.9)	4.0	細砂 灰白	灰白	普通	灰釉 台部無釉	覆土中	麻戸・美濃系 50%
183	陶器	中皿	-	(4.6)	7.4	細砂 灰白	灰白	良好	灰釉 見込み草花 外面二重帯輪 高台内面溝「八」	覆土中層	麻戸・美濃系 50% PL8
184	陶器	中皿	-	(5.3)	10.3	緻密 灰白	オリブ黄	良好	鉄釉・白泥 胡毛目	覆土中層	皆津系 30%
185	陶器	片口	-	(5.0)	-	細砂 にぶい黄褐色	浅黄	良好	船輪 注口部貼り付け	覆土上層	麻戸・美濃系 5%
186	陶器	擂鉢	(36.4)	14.5	(14.7)	長石・石英	赤褐色	普通	内面擂目11条1単位。	覆土下層	明石・堺系 30% PL5
187	陶器	擂鉢	(37.5)	14.6	(16.5)	長石	赤	普通	内面擂目9条1単位	覆土下層	明石・堺系 30%
188	陶器	擂鉢	-	(5.2)	(17.7)	長石・石英	赤褐色	普通	内面9条の擂目クロス状	覆土中層	明石・堺系 5%
189	陶器	擂鉢	-	(3.8)	(12.5)	細砂 にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	普通	1単位5条以上の擂目	覆土中	麻戸・美濃系 5%
190	陶器	擂鉢	-	(2.8)	(10.4)	細砂 灰白	黒	普通	1単位8条以上の擂目	覆土中	麻戸・美濃系 5%
191	陶器	壺	(9.2)	(7.4)	-	細砂 浅黄	浅黄	良好	外面船輪	覆土上層	麻戸・美濃系 10% PL9
192	陶器	徳利	(3.8)	(16.1)	-	細砂 浅黄	暗黄褐色	良好	船輪 体部に磨道具の滑着痕 高台彫刻	覆土上層	麻戸・美濃系 40%
193	陶器	行平鍋	(18.6)	(8.8)	-	細砂 灰白	暗褐色	普通	注口部・内面鉄輪 外面上端型押文・下縁煤付着	覆土中	大塚・相馬系 20%
194	磁器	小碗	7.1	3.8	2.9	緻密 灰白	灰白	良好	白磁 外面笹文	覆土上層	肥前系 40%
195	磁器	小碗	8.0	5.4	3.0	緻密 灰白	灰白	良好	外面矢羽模文 見込一重円	覆土中	肥前系 40%
196	磁器	碗	-	-	-	緻密 灰白	灰白	良好	底部墨書「口」	覆土中	5%
197	磁器	中碗	(10.2)	5.0	3.6	緻密 灰白	灰白	良好	外面彫刻・草花文 見込一重円内に海淵反刺	覆土上層	麻戸・美濃系 70% PL7

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	胎土色	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
198	磁器	中碗	109	6.4	5.6	緻密	灰白	灰白	良好	外面蓮文 見込一重円内に寿広東画	覆土下層	肥前承 100% PL7
199	磁器	中碗	106	6.6	5.6	緻密	灰白	灰白	良好	外面山水文 見込一重円内に鳥文広東画	覆土下層	肥前承 80% PL8
200	磁器	中碗	(106)	6.7	6.0	緻密	灰白	灰白	良好	外面幾何学文 見込一重円内に羊頭文 地画蓮 広東画	覆土上層	瀬戸・美濃承 60% PL8
201	磁器	中碗	(112)	6.6	(5.8)	緻密	灰白	灰白	良好	外面草花文 見込一重円内に寿広東画	覆土中	肥前承 45%
202	磁器	中碗	(98)	(3.4)	-	緻密	灰白	灰白	良好	色絵 外面蝶・意文	覆土中	肥前承 30%
203	磁器	小皿	130	4.1	7.8	緻密	灰白	灰白	良好	内面草花文 見込二重円内に五弁花 外面草文	覆土中	肥前承 90% PL8
204	磁器	楕円	(91)	6.6	(5.6)	緻密	灰白	灰白	良好	外面草花文 高台内一重円	覆土中層	肥前承 50% PL8
DP23	-	蓋	34	(1.2)	-	-	-	橙	普通	陶製ミニチュア 天井部菊花状	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP24	ミニチュア	(3.3)	1.9	(1.8)	(4.2)	-	陶製ミニチュア鳥形笛。胴部欠損	覆土中	
Q36	箸置き	3.5	0.8	0.5	4.3	石製	全面施釉 石材不明	覆土中	
Q37	砥石	7.1	3.6	1.2	46.7	凝灰岩	砥面5面 裏面は中央部のみ砥面	覆土中	PL6
Q38	砥石	(5.5)	5.4	3.1	(158.6)	凝灰岩	砥面4面	覆土中	
M86	釘	(5.1)	0.3	0.3	(1.7)	鉄	断面方形 頭部および先端部欠損	覆土上層	PL6
M87	釘	(5.5)	0.5	0.4	(6.2)	鉄	断面方形 頭部および先端部欠損	覆土中層	PL6
M88	釘	(5.8)	0.4	0.4	(4.9)	鉄	断面方形 頭部欠損	覆土中	PL6
M89	釘	7.0	0.9	0.4	6.1	鉄	断面方形	覆土上層	
G2	簪	(3.3)	0.6	0.5	(2.0)	ガラス	両端欠損	覆土中	PL6
M93	一分銀	2.33	1.56	0.26	8.35	銀	背面定銀座常是 1837年	覆土上層	

番号	銭名	径	孔幅	重量	初铸年	材質	特徴	出土位置	備考
M90	寛永通寶	2.30	0.70	1.68	1697	銅	新寛永 無背	覆土中	
M91	寛永通寶	2.29	0.71	2.04	1697	銅	新寛永 無背	覆土中層	
M92	寛永通寶	2.34	0.58	2.04	1741	銅	新寛永 背文元	覆土中層	

## 第6号不明遺構 (第32~37図)

位置 調査区西部のD4j0区、標高12.6mの台地平坦部に位置している。

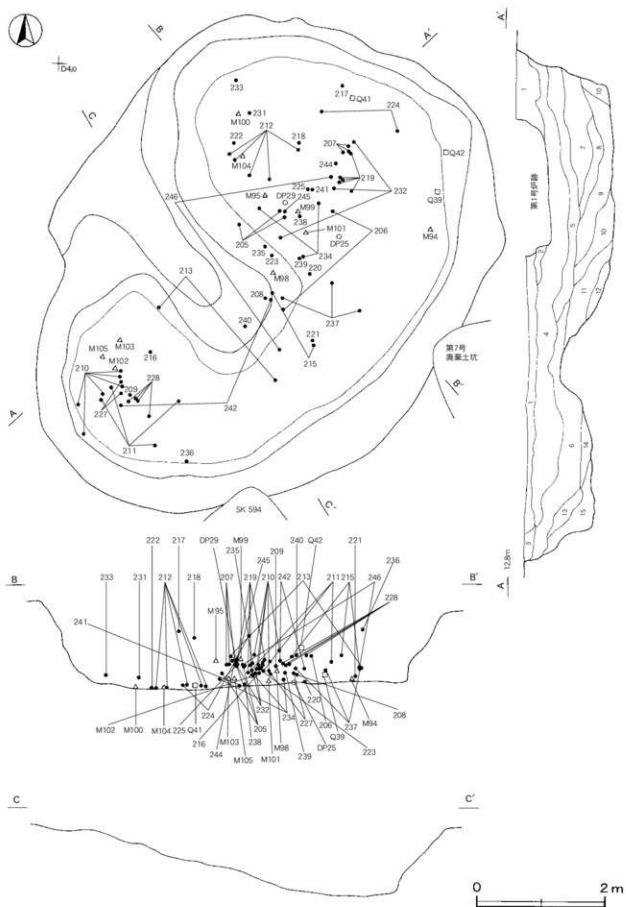
重複関係 第7号廃棄土坑、第594土坑、第1号炉に掘り込まれている。

規模と形状 長径8.20m、短径6.40mの楕円形で、長径方向はN-33°-Eである。確認面からの深さは130cm、底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。西側の確認面から底面中央部にかけて緩やかに傾斜したスロープがある。そのスロープは地山を掘り残して構築しており、上幅80cm、下幅200cmで、断面形は台形を呈している。

覆土 15層に分層できる。ロームブロックや炭化物、砂粒を含む土でレンズ状に埋め戻されている。

### 土層解説

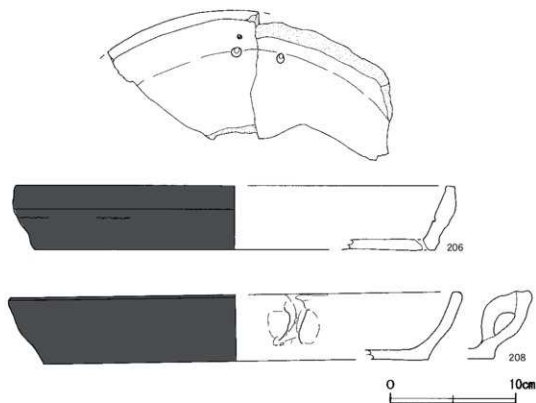
1	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子中量	10	暗褐色	ロームブロック・砂粒中量、炭化物少量
2	暗褐色	ロームブロック・砂粒中量、炭化粒子微量			焼土粒子微量
3	褐色	ロームブロック多量	11	黒褐色	ロームブロック中量、砂粒少量、炭化物微量
4	暗褐色	焼土粒子・炭化粒子少量、ロームブロック微量	12	暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子・砂粒微量
5	暗褐色	ロームブロック・砂粒中量、炭化粒子少量	13	極暗褐色	ロームブロック中量、炭化物少量
6	暗褐色	ロームブロック中量、砂粒少量、炭化物微量	14	暗褐色	ロームブロック多量
7	暗褐色	ロームブロック中量、粘土粒子・砂粒微量	15	褐色	ロームブロック多量
8	灰褐色	砂粒多量、ロームブロック中量			
9	褐色	ロームブロック中量、炭化物・粘土粒子・砂粒少量			



第32図 第6号不明遺構実測図

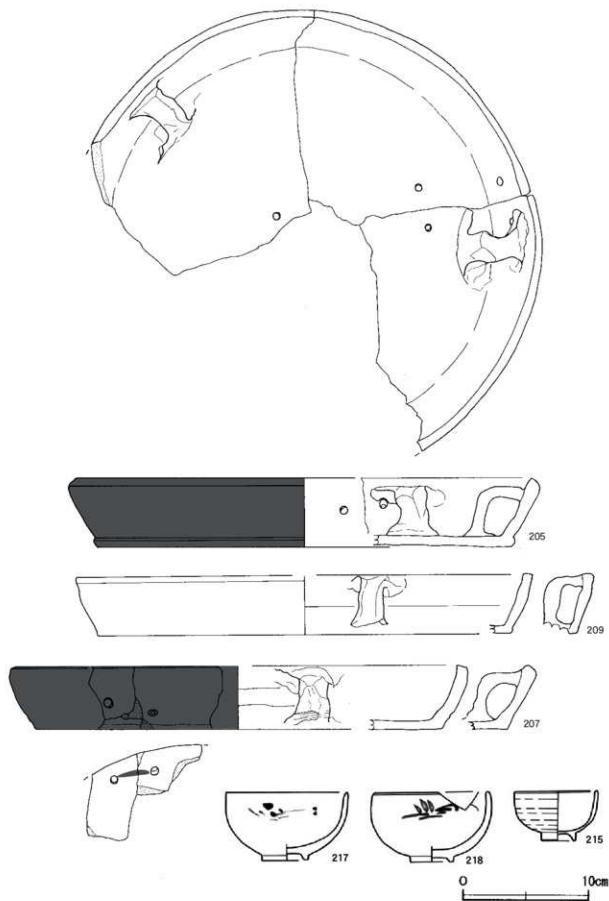
**遺物出土状況** 土師質土器片210点(焙烙164, 皿23, 甕1, 鉢類10, 埴炉5, 不明7), 瓦質土器片49点(焙烙38, 火鉢1, 埴炉2, 七厘4, 不明4), 瀬戸・美濃系陶器片137点(碗類48, 仏飯器1, 灯明皿6, 緑軸皿4, 皿類30, 鉢類18, 片口1, 搦鉢10, 香炉6, 蓋2, 徳利10, 水注1), 唐津系陶器片4点(皿類), 備前系陶器片4点(徳利), 明石・堺系陶器片5点(搦鉢), 丹波系陶器片1点(搦鉢), 瀬戸・美濃系磁器片2点(碗類), 肥前系磁器片160点(碗類124, 紅猪口1, 薄手酒杯1, 仏飯器1, 色絵碗1, 皿類14, 猪口4, 香炉4, 蓋1, 色絵蓋1, 瓶類2, 髪油壺1, 不明5), 土製品9点(羽口5, ミニチュア人形4), 石器16点(台石1, 砥石15), 鉄製品68点(釘48, 包丁1, 鉄洋付着釘1, 不明18), 椀状洋10点, 鉄洋2点, 銅製品9点(煙管2, 不明7), 瓦16点, 軽石17点のほか, 混入したガラス片2点, 細礫17点も出土している。出土遺物の総重量は, 土師質土器片8231.0g, 瓦質土器片2439.0g, 陶器片5847.5g, 磁器片3049.0g, 鉄8714.2g, 銅69.0gである。217・236以外に覆土上層から出土している遺物は少なく, ほとんどが覆土中層から下層にかけて出土しており, 廃棄物を下層に投棄した後, 埋め戻したものと推測される。M100・104・DP25など製鉄関連遺物も陶磁器と同様に覆土下層から底面にかけて出土している。また, 本跡の覆土中から出土した破片が, 第5号不明遺構で図示した203に接合している。

**所見** 上面に構築されている第1号炉跡の下部構造と考えることもできるが, 両遺構の出土遺物に時期差があることや, 炉跡から製鉄関連遺物が出土していないことなどから, 両者は別遺構と判断した。底面が平坦で, 出入り口と推定されるスロープを持っていることから, 半地下式の遺構と考えられるが, 性格は不明である。陶磁器のほかに, 羽口や椀状洋も出土していることから, 本来の機能を終えた後に, 製鉄関連の廃棄物を含めた日常雑物の廃棄場として転用されている。出土遺物が18世紀後半と19世紀前半のものが混在していることから, 廃棄場に転用された時期は, 19世紀前半に比定できる。

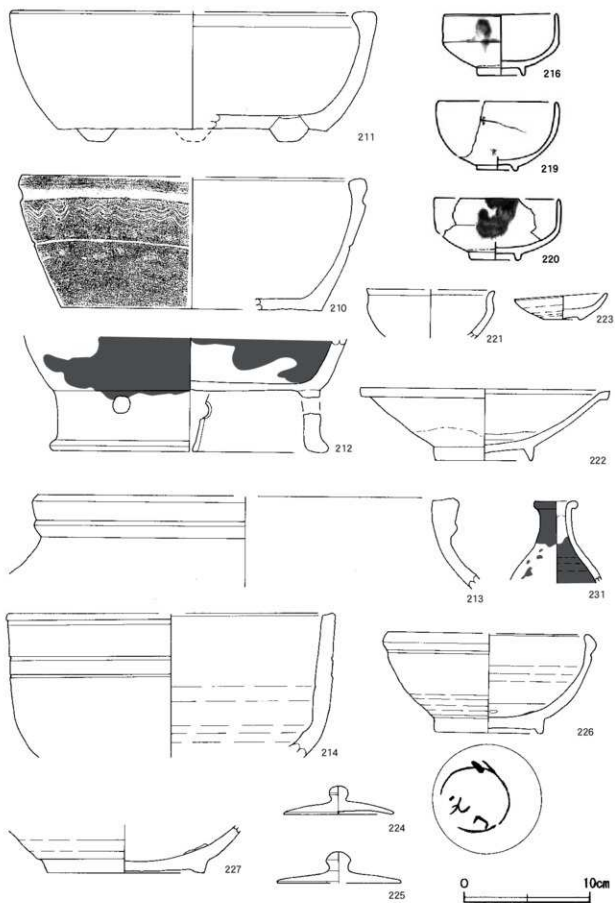


第33図 第6号不明遺構出土遺物実測図(1)

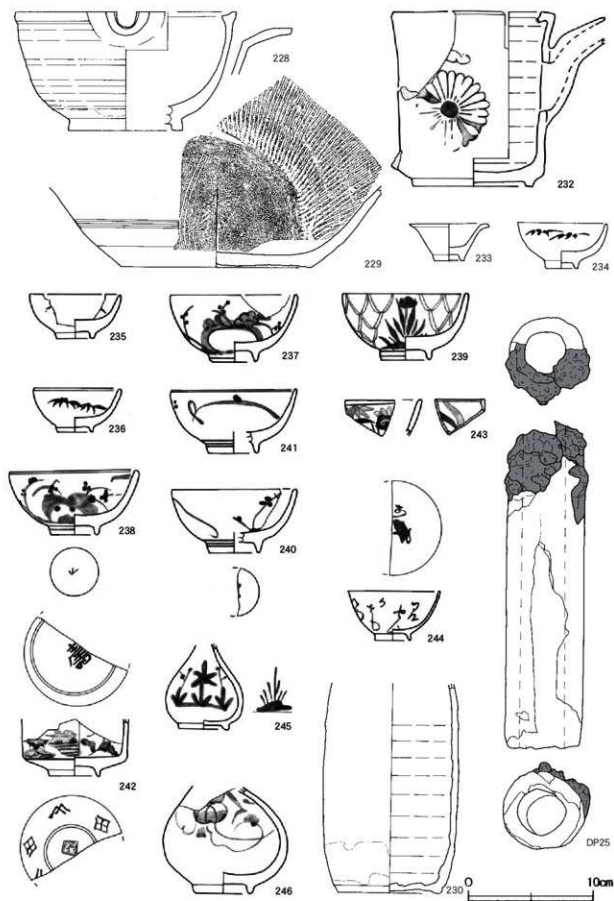




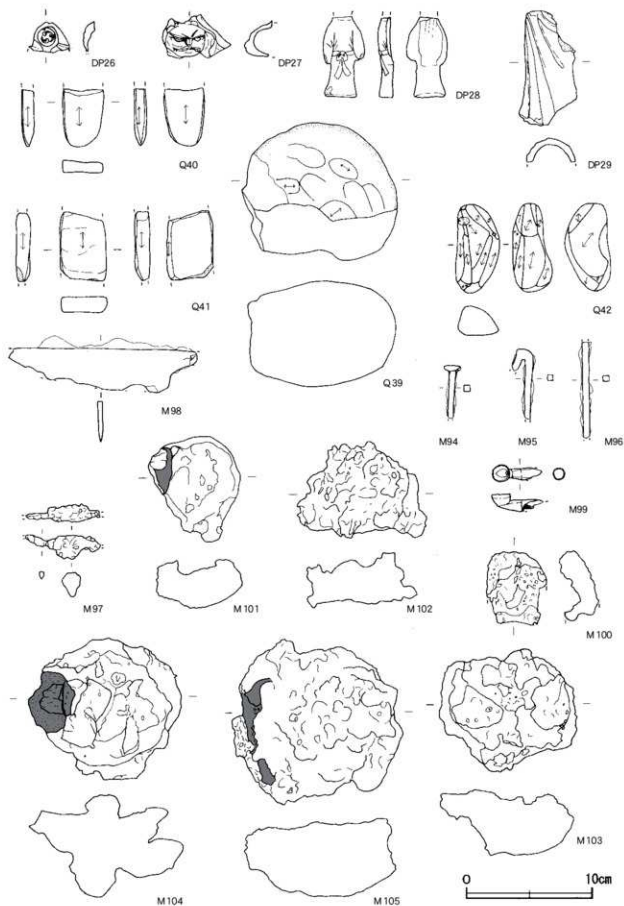
第34図 第6号不明遺構出土遺物実測図(2)



第35图 第6号不明遺構出土遺物実測図(3)



第36図 第6号不明遺構出土遺物実測図(4)



第37图 第6号不明遺構出土遺物実測図(5)

第6号不明遺構出土遺物観察表(第33~37図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	胎土色	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
205	土師質土器	焙烙	360	5.5	(328)	長石・石英・赤色粒子		明赤褐	普通	内面底面・外面煤付着 耳部擦痕 縁部5カ所	覆土下層	60% PL5
206	土師質土器	焙烙	(348)	5.0	(318)	長石・石英・赤色粒子		にぶい黄褐	普通	外面煤付着 縁部孔3カ所	覆土中層	20%
207	土師質土器	焙烙	(347)	5.1	(322)	長石・石英・赤色粒子		にぶい橙	普通	外面煤付着 縁部孔4カ所	覆土下層	5%
208	土師質土器	焙烙	(354)	5.3	(306)	長石・石英・赤色粒子		にぶい橙	普通	外面煤付着 耳部擦痕	覆土下層	10%
209	土師質土器	焙烙	(362)	4.7	(328)	長石・石英・赤色粒子		にぶい黄褐	普通	耳部擦痕	覆土下層	10%
210	土師質土器	火鉢	(272)	10.5	(206)	長石・石英・赤色粒子		橙	普通	工具による沈陥 縁部凹凸文	覆土中層	60% PL5
211	土師質土器	火鉢	(284)	10.3	(167)	長石・石英・赤色粒子		橙	普通	底部3足跡り付け	覆土下層	20%
212	土師質土器	火鉢	-	(91)	(220)	長石・石英・赤色粒子		橙	普通	底部内・外面煤付着 高台部2カ所 穿孔	底面	30%
213	土師質土器	釜	(330)	(72)	-	長石・石英・赤色粒子		赤褐	普通	内・外面ナデ	覆土下層	5%
214	瓦質土器	火鉢	(257)	(114)	-	長石・赤色粒子		褐灰	普通	外面型押文(輪縁)	覆土中	10%
215	陶器	小碗	6.4	4.0	26	細砂	灰白	灰白	良好	灰輪 無文 腰張形	覆土下層	
216	陶器	小碗	8.8	4.9	38	細砂	灰白	浅黄	普通	灰輪 腰折痕	覆土中層	覆土・美濃系 90% PL7
217	陶器	中碗	9.5	3.7	5.5	細砂	灰黄	灰オリーブ	良好	灰輪 外面草文	覆土上層	覆土・美濃系 95% PL7
218	陶器	小碗	8.8	5.5	34	細砂	灰黄	灰オリーブ	普通	灰輪 外面草文	覆土中層	覆土・美濃系 90% PL7
219	陶器	中碗	9.3	5.5	3.2	細砂	灰白	灰白	普通	灰輪 桜間山水文	覆土下層	覆土・美濃系 90%
220	陶器	中碗	(98)	4.9	34	細砂	灰白	浅黄	普通	灰輪 腰折痕	底面	覆土・美濃系 70%
221	陶器	碗	(100)	(3.8)	-	細砂	灰黄褐	泥濁、灰黄褐	普通	内・外面鉄輪 天目碗	覆土下層	覆土・美濃系 5%
222	陶器	中皿	19.7	5.5	7.6	細砂	灰白	灰白	普通	灰輪 総の目輪ハギ 高台内無輪	底面	覆土・美濃系 60% PL8
223	陶器	灯明皿	7.4	2.2	2.8	細砂	灰白	灰白	普通	灰輪 底部クリ底	覆土下層	覆土・美濃系 100% PL7
224	陶器	蓋	8.6	2.2	-	細砂	灰白	灰白	普通	外面灰輪 水注蓋	覆土中層	覆土・美濃系 80% PL7
225	陶器	蓋	(98)	2.5	-	細砂	灰白	灰白	普通	外面灰輪 水注蓋	覆土下層	覆土・美濃系 30%
226	陶器	鉢	(156)	7.9	8.5	細砂	にぶい黄褐	灰	普通	灰輪 見込に胎土目録ム トナシ痕 高台内患部「モロ」 鉢縁	覆土中	覆土・美濃系 60% PL9
227	陶器	鉢	-	(3.8)	(124)	細砂	灰オリーブ	灰オリーブ	良好	灰輪 トナシ痕	覆土下層	覆土・美濃系 20%
228	陶器	片口	(174)	9.4	(90)	細砂	灰白	にぶい黄褐	普通	灰輪 口縁切込注口 平形	覆土下層	覆土・美濃系 40%
229	陶器	楕鉢	-	(6.6)	(150)	長石	にぶい赤褐	にぶい赤褐	普通	内面環目 見込環目クロス状 押り痕	覆土中	明石・柳系 15%
230	陶器	徳利	-	(16.6)	8.2	細砂	灰白	灰オリーブ	良好	灰輪 高台徳利	覆土中	覆土・美濃系 40%
231	陶器	徳利	3.0	(6.5)	-	細砂	にぶい黄褐	灰黄褐	良好	灰輪 内面二次焼成による煤付着	覆土下層	覆土・美濃系 20%
232	陶器	水注	(130)	13.8	9.4	細砂	灰白	灰白	良好	灰輪 胴部菊花文 注口部跡り付け	覆土下層	覆土・美濃系 60% PL9
233	磁器	小坏	6.3	3.0	2.2	緻密	灰白	灰白	良好	白泥 籠反形	覆土下層	肥前系 100% PL7
234	磁器	小碗	7.0	3.6	2.5	緻密	灰白	灰白	良好	外面篋文	覆土下層	肥前系 100% PL7
235	磁器	小碗	7.1	3.5	3.0	緻密	灰白	灰白	良好	外面篋文	覆土下層	肥前系 90%
236	磁器	小碗	(6.8)	3.1	2.8	緻密	灰白	灰白	良好	外面篋文	覆土上層	肥前系 60% PL7
237	磁器	中碗	9.9	5.3	3.4	緻密	灰白	灰白	良好	外面雪輪梅樹文	覆土下層	肥前系 90% PL7
238	磁器	中碗	10.0	5.2	3.8	緻密	灰白	灰白	良好	外面雪輪梅樹文 高台二重門	底面	肥前系 90% PL7
239	磁器	中碗	9.8	5.2	3.8	緻密	灰白	灰白	良好	外面二重門内面に草花文 高台二重門	覆土下層	肥前系 90% PL7
240	磁器	中碗	(9.8)	5.1	(3.8)	緻密	灰白	灰白	良好	外面雪輪梅樹文 高台二重門	覆土中層	肥前系 50%
241	磁器	中碗	(9.8)	5.1	(3.8)	緻密	灰白	灰白	良好	外面雪輪梅樹文 高台一重門	底面	肥前系 40%
242	磁器	小碗	-	(4.5)	4.0	緻密	灰白	灰白	良好	外面山水文 見込二重門内面 高台輪不 明鉄輪 高台内二重方彫飾し 縁部 鉄影	覆土下層	肥前系 40% PL8
243	磁器	碗	-	(2.9)	-	緻密	灰白	灰白	良好	色絵 草文	覆土中	5%
244	磁器	紅緒口	(7.3)	3.9	(2.8)	緻密	灰白	灰白	良好	外面・見込に赤絵による文字	覆土下層	肥前系 50% PL7
245	磁器	小瓶	-	6.6	3.8	緻密	灰白	灰白	良好	外面松梅・草文	覆土下層	肥前系 80% PL9
246	磁器	雙湯壺	-	(8.4)	4.4	緻密	灰白	灰白	良好	外面草文文 内面塗付着	覆土下層	肥前系 60%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP25	羽口	(25.9)	6.7	7.0	(647.0)	粘土・スサ	口縁約3.3cm 先端部黄褐色で火熱によって溶解されており、消着材付着	床面	PL5
DP26	人形	(2.5)	(3.2)	0.1~0.8	(4.5)	土師質	前後組み合わせ	覆土中	
DP27	人形	(3.5)	(5.4)	0.2~0.8	(12.6)	土師質	前後組み合わせ 獅子	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP28	人形	(64)	3.3	1.2	(140)	土師質	前後組み合わせ	覆土中	
DP29	人形	(45)	(9.2)	-	(306)	土師質	前後組み合わせ	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q39	台石	(10.5)	12.3	8.3	(1400)	凝灰岩	長径2.5cmほどの楕円形状の掘り痕	覆土下層	PL6
Q40	砥石	(4.5)	3.2	1.0	(205)	凝灰岩	砥面4面	覆土中	
Q41	砥石	(5.5)	3.7	1.3	(41.7)	凝灰岩	砥面4面	覆土下層	PL6
Q42	砥石	7.0	3.5	2.4	38.7	軽石	10面以上の砥面 多角度で砥面として使用	覆土中層	PL6
M94	釘	(4.2)	0.5	0.5	(4.5)	鉄	断面方形 先端部欠損	覆土下層	
M95	釘	(5.2)	0.6	0.4	(6.5)	鉄	断面方形 先端部欠損	覆土下層	PL6
M96	釘	(7.6)	0.5	0.4	(8.0)	鉄	断面方形 頭部および先端部欠損	覆土中	
M97	不明鉄製品	(5.9)	2.0	1.5	(9.1)	鉄	両端欠損	覆土中	
M98	包丁	(15.0)	3.5	0.4	(60.6)	鉄	先端部及び柄欠損	覆土下層	PL6
M99	煙管	(4.0)	0.9	-	(2.8)	銅	雁首部 内面に木質付着 火口径13mm	覆土下層	
M100	碗状洋	(5.9)	(4.7)	3.1	(59.5)	鉄	3面切削されている。表面は暗青灰色で多くの気孔。裏面は青灰色で粘土粒が付着	底面	
M101	碗状洋	8.4	7.2	3.7	254	鉄	表面は暗青灰色で滑着材が付着した窪みが残る。裏面の中央部は暗青灰色で細粒が付着	底面	
M102	碗状洋	7.8	10.3	4.3	344	鉄	全面が黒褐色。表面は滑らか。裏面は多くの顆粒状突起および気孔。2つの気孔状突起が併発したものの	覆土下層	
M103	碗状洋	9.8	10.9	5.2	462	鉄	表面黒しい凹み。側面金木炭塊す。裏面暗青灰色左欠損。碗状部は多くの気孔	覆土下層	PL6
M104	碗状洋	11.2	12.1	8.1	992	鉄	表面は黒褐色で滑着材が付着した窪みが残る。裏面の中央部は暗青灰色で粘土粒が付着	底面	PL6
M105	碗状洋	13.1	13.6	6.1	1270	鉄	表面は黒褐色で滑着材が付着した窪みが残る。裏面の中央部は暗青灰色で細粒が付着	覆土下層	PL6

表6 近世 不明遺構一覧表

番号	位置	長軸(径)方向	平面形	規模(m) 深さ(cm)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長軸(径)×短軸(径)	深さ					
5	D 5 b6 (N-45°-W)	不定形		(7.48)×5.64	64-170	外傾	不明	人為	土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器、土製品、鉄製品、碗状洋、銅製品、銀貨、石器、石製品、ガラス製品、瓦	
6	D 4 j0 (N-33°-E)	楕円形		8.20×6.40	42-130	外傾	平坦	人為	土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器、土製品、石器、鉄製品、碗状洋、鉄洋、銅製品、瓦、軽石	本誌→第7号庭園土坑・SK594・第1号炉跡

## 2 その他の時代の遺構と遺物

遺物が出土していないことなどから時期を決定できない遺構として、炉跡1か所、欄柵1列、溝跡9条、土坑91基、ピット群5か所が確認された。以下、炉跡1か所、欄柵1列については記述し、溝跡については実測図と土層解説及び一覧表を、土坑については実測図と一覧表を掲載するにとどめる。

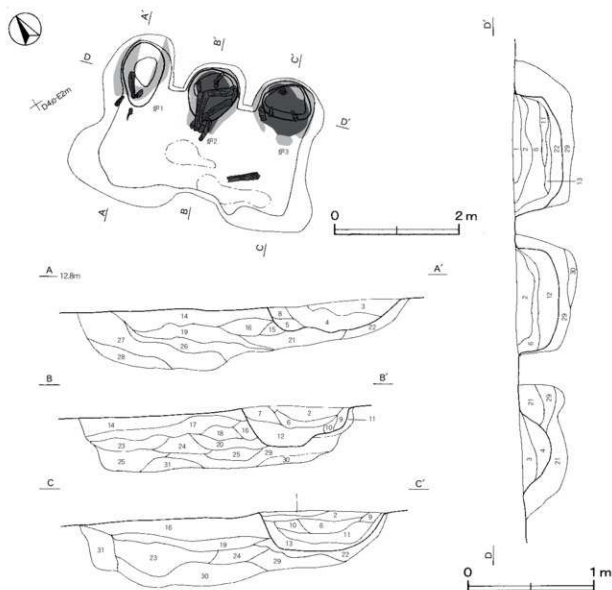
### (1) 炉跡

#### 第1号炉跡(第38図)

位置 調査区西部のD4j0区、標高12.6mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第6号不明遺構を掘り込んでいる。

規模と形状 長方形の掘方の北東壁付近に3基の円形の掘方を有する炉が設けられている。3基の炉は30cmほどの間隔で並列しており、長軸3.6m、短軸1.7mの長方形の掘り方と同時に構築していることから、一連のものと考えた。



第38図 第1号炉跡実測図

**炉** いずれの炉も長径方向は、 $N-50^{\circ}-E$ である。北側に構築されている炉1は、長径105cm、短径85cmの楕円形である。確認面からの深さは23cmで、炉床には長さ20~80cmの炭化材が多量に出土している。中央に構築されている炉2は、長径90cm、短径85cmの円形である。確認面からの深さは34cmで、炉床には長さ15~40cmの炭化材が少量出土している。南側に構築されている炉3は、長径105cm、短径100cmの円形である。確認面からの深さは43cmで、炉床には20cmほどの炭化材が少量出土している。いずれの炉も多量の焼土で赤変しており、炉壁の一部が硬化しているもの、炉床には硬化面が遺存していない。覆土は31層に分類できる。第1~13層は炉の覆土、第14~31層は掘方への埋土である。掘方への埋土は、底面に暗褐色土を充填し、さらにその上面に炭化材を多量に含んだ土を充填している。

## 伊土層解説 (第14~31層は埋土)

- |       |                                 |       |                            |
|-------|---------------------------------|-------|----------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・粘土粒子中量、焼土粒子少量<br>炭化粒子微量   | 4 黒褐色 | 粘土ブロック・焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量           | 5 暗褐色 | 粘土ブロック・焼土粒子中量、炭化物・ローム粒子微量  |
| 3 暗褐色 | 粘土ブロック・焼土粒子中量、ローム粒子少量<br>炭化粒子微量 |       |                            |

6	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、炭化物微量	18	暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量
7	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量	19	極暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子微量
8	暗褐色	粘土ブロック中量、ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量	20	極暗褐色	炭化物・砂粒多量、焼土粒子中量、ローム粒子少量
9	暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子中量	21	黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子中量
10	黒褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック少量	22	暗褐色	焼土粒子・炭化粒子中量、ローム粒子少量
11	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量	23	暗褐色	ロームブロック中量、炭化物微量
12	暗褐色	ロームブロック中量、炭化物少量	24	黒褐色	炭化物・ローム粒子・焼土粒子少量
13	黒褐色	炭化物・焼土粒子中量、ローム粒子少量、砂粒微量	25	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
14	黒褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック少量	26	極暗褐色	ロームブロック・炭化物少量
15	暗褐色	粘土ブロック中量、ローム粒子少量、焼土ブロック微量	27	極暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量
16	暗褐色	炭化粒子中量、焼土粒子・粘土粒子少量、ローム粒子微量	28	極暗褐色	ロームブロック多量
17	褐色	ローム粒子多量、焼土粒子微量	29	暗褐色	炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量
			30	暗褐色	焼土粒子・炭化粒子少量、ロームブロック微量
			31	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量

踏み固められた範囲は、中央の炉2の手前2か所で確認された。その周囲から炉に関わるような遺物が出土していないため明確でないが、何らかの作業の痕跡とみられる。

**遺物出土状況** 土師質土器片3点(焙烙)、産地不明陶器片2点(不明)、産地不明磁器片1点(碗)、鉄製品2点(釘)、軽石1点が炉覆土中および確認面から出土している。炭化材は、それぞれの炉から出土している。

**所見** 構築状況から、3基の炉は同時に機能していたものとみられる。第6号不明遺構を埋め戻した後に構築した炭焼き遺構と推測され、製鉄関連遺構とも想定できるが、その痕跡からは明らかでない。時期は、重複関係から19世紀前半以降に比定できる。

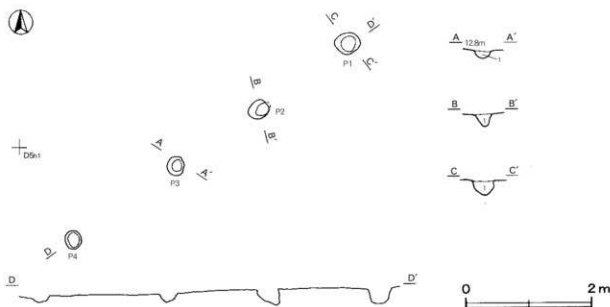
## (2) 柵跡

### 第6号柵跡(第39図)

**位置** 調査区西部のD5h1区、標高12.6mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 5.68mの間に4か所のピットが確認された。方向はN-55°-Eで、柱間寸法は1.60~2.06mである。

**柱穴** 4か所。平面形は長径31~41cm、短径10~24cmの楕円形である。断面はU字状で、深さは10~24cmである。覆土は単一層で、柱抜き取り後の覆土である。



第39図 第6号柵跡実測図

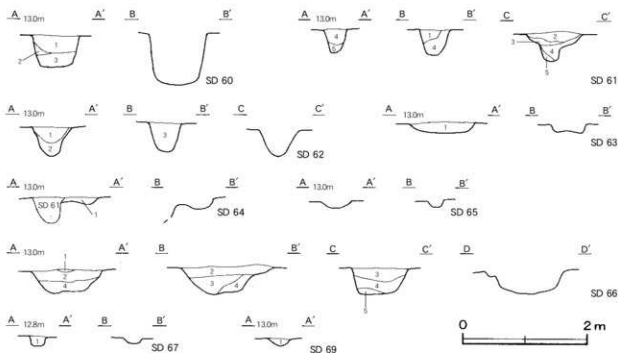


## 土層解説 (各柱穴共通)

1 暗 褐色 ロームブロック中量

所見 時期は、本跡と関連する遺構が周囲に無く、出土遺物もないことから不明である。

## (3) 溝跡 (第40・55図)



第40図 溝跡断面実測図

## 第60号溝跡土層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・粘土粒子微量
- 2 暗 褐色 ロームブロック多量
- 3 暗 褐色 ロームブロック少量、粘土粒子微量

## 第61号溝跡土層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック多量
- 2 暗 褐色 ロームブロック中量、粘土粒子微量
- 3 暗 褐色 ロームブロック微量
- 4 暗 褐色 ロームブロック少量、粘土粒子微量
- 5 暗 褐色 ロームブロック多量、粘土粒子微量

## 第62号溝跡土層解説

- 1 暗 褐色 粘土粒子中量、ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗 褐色 ロームブロック・粘土粒子微量
- 3 暗 褐色 ロームブロック・粘土粒子少量

## 第63号溝跡土層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子多量、粘土粒子少量

## 第64号溝跡土層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック中量、粘土粒子少量

## 第66号溝跡土層解説

- 1 暗 褐色 粘土粒子多量、ローム粒子中量
- 2 暗 褐色 ロームブロック中量、粘土粒子少量
- 3 暗 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
- 4 暗 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 5 暗 褐色 ローム粒子多量

## 第67号溝跡土層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量

## 第69号溝跡土層解説

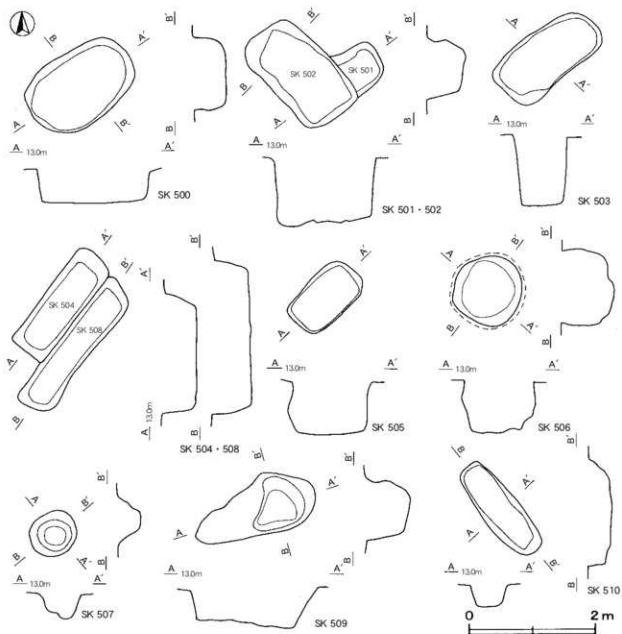
- 1 暗 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

表7 その他の溝跡一覧表

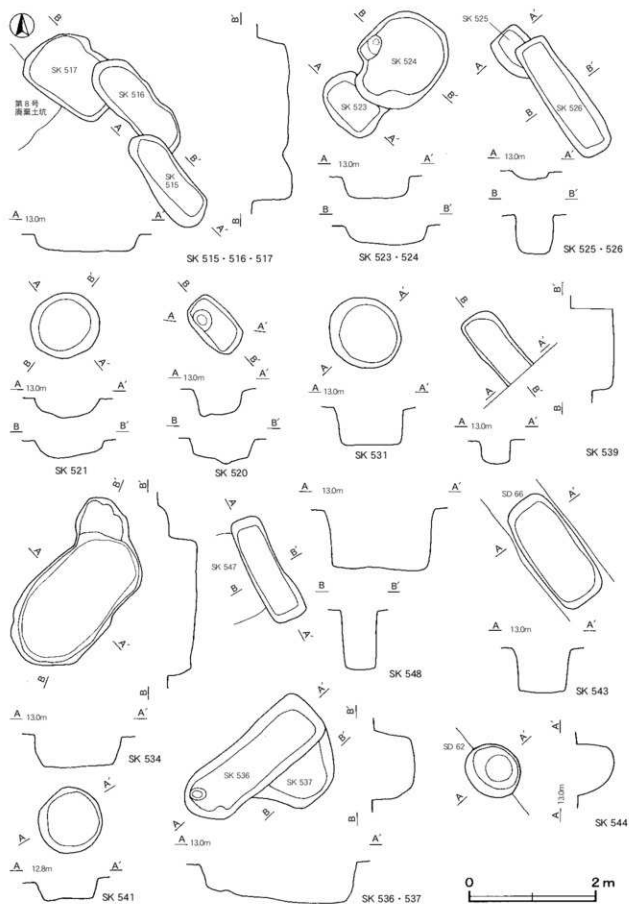
番号	位置	方向	形状	規模 (m) 深さ (cm)				断面形	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係 (古→新)
				確認長	上幅	下幅	深さ						
60	C 5.88 - D 6.62	N-140°-E	直線	25.90	0.60-1.00	0.40-0.55	40-82	U字状	外相	直状	人為	土製品、鉄製品、瓦	SD65→本跡
61	D 5.55 - D 5.60	N-142°-E	直線	25.70	0.42-0.60	0.09-0.25	34-45	U字状	外相	直状	人為	鉄製品、銅製品、瓦、 礎瓦、ガラス、土	SK28・SD61→本跡→SD65

番号	位置	方向	形状	規模 (m) 深さ (cm)			断面形	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係 (古→新)	
				確認長	上幅	下幅							深さ
62	D 5 b5 - D 5 g9	N - 140° - E	直線	25.91	0.48 - 0.75	0.15 - 0.20	42 - 52	U字状	外傾	皿状	人為	鉄製品、銅製品、瓦、煉瓦、ガラス	SK529→本誌→SK544・SD66
63	D 5 c5 - D 5 d6	N - 140° - E	直線	6.69	0.49 - 1.10	0.29 - 0.68	16	浅U字状	縦斜	皿状	自然	鉄製品、銅製品、瓦、煉瓦、ガラス	
64	D 5 c6 - D 5 d7	N - 140° - E	直線	5.97	0.47 - 0.79	0.32 - 0.67	5 - 16	浅U字状	縦斜	皿状	人為	鉄製品、瓦、煉瓦	本誌→SD61
65	D 5 d2 - D 5 g8	N - 128° - W	直線	17.43	0.18 - 0.70	0.05 - 0.37	12	浅U字状	縦斜	皿状	-	瓦	SD61・図・66→本誌→SD60
66	D 5 a6 - D 5 g9	N - 141° - E	直線	16.81	0.92 - 1.15	0.45 - 0.62	36 - 42	進合形状	外傾	平坦	人為	土製品、石製品、鉄製品、瓦、煉瓦、ガラス	第5号砲臺土坑→本誌→SK543・SE65
67	D 4 a0 - D 4 g8	N - 132° - W	直線	11.35	0.20 - 0.34	0.12 - 0.18	14	進合形状	外傾	平坦	人為		
69	C 5 f7 - D 5 f0	N - 140° - E	直線	[16.20]	0.22 - 0.32	0.12 - 0.19	10	U字状	外傾	皿状	人為		本誌→PG16

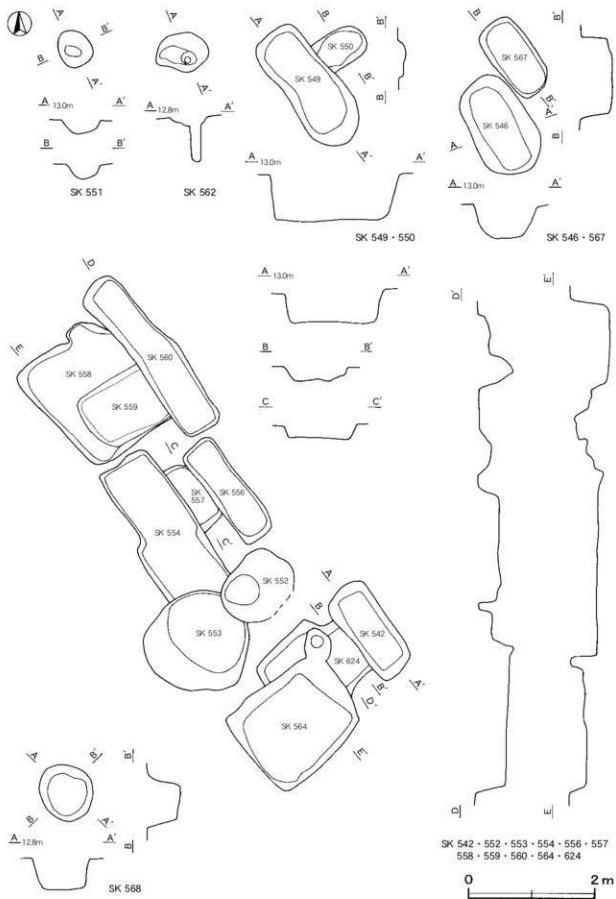
(4) 土坑 (第41~46図)



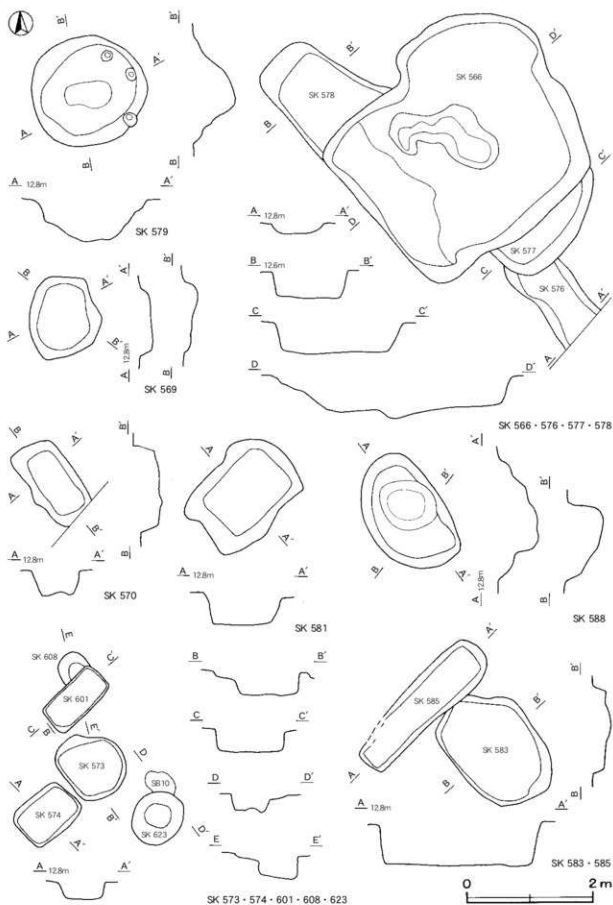
第41図 土坑実測図 (1)



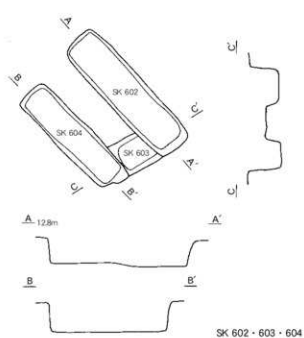
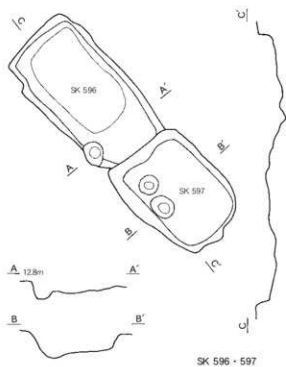
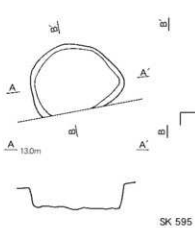
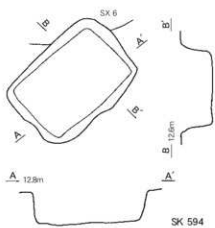
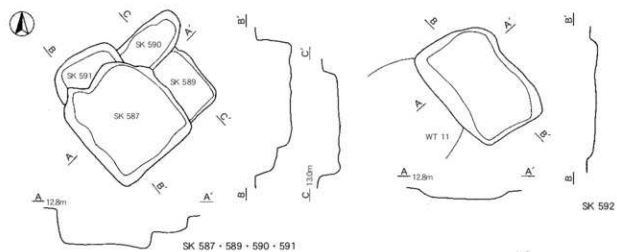
第42図 土坑実測図(2)



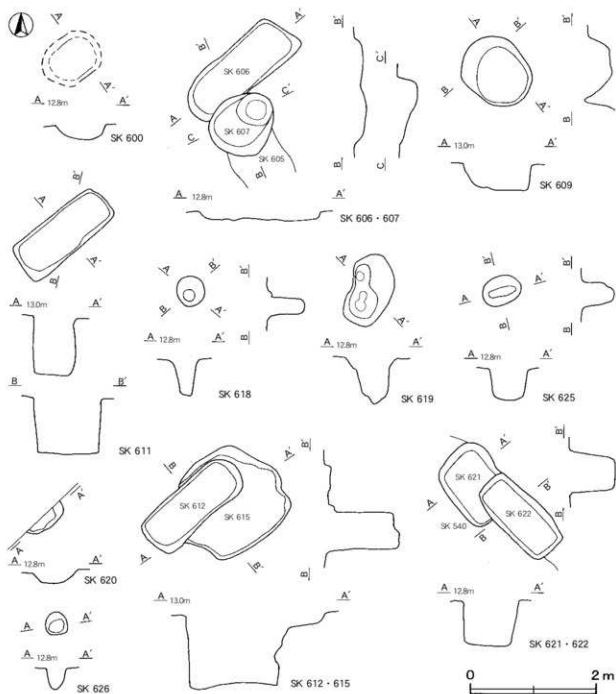
第43图 土坑实测图(3)



第44図 土坑実測図(4)



第45图 土坑实测图(5)



第46図 土坑実測図(6)

表8 その他の土坑一覽表

番号	位置	長軸(径)方向	平面形	規模 (m) 深さ (cm) 長軸(径)×短軸(径) 深さ	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
500	D 6 b3	N-53°-E	隅丸長方形	1.81×1.18	50	外傾 直立	凹凸 自然	鉄製品	
501	D 6 b3	N-53°-E	[長方形]	(0.62)×0.72	107	直立	凹凸 自然	磁器、礫	本跡→SK502
502	D 6 b3	N-47°-W	隅丸長方形	1.84×1.02	58	外傾	直立 自然	陶器、鉄製品	SK501→本跡
503	D 6 b2	N-48°-E	隅丸長方形	1.86×0.86	109	外傾	平坦 自然	土師質土器	
504	D 5 b7	N-37°-E	長方形	1.88×0.66	54	外傾	平坦	人為 縄文土器	SK508→本跡
505	D 5 d0	N-44°-E	長方形	1.24×0.72	84	直立	平坦	人為	
506	D 5 d0	-	円形	1.10×1.10	80	内傾	直立	人為 鉄製品、瓦、ガラス	

番号	位置	長軸(径)方向	平面形	規模 (m) 深さ (cm) 長軸(径)×短軸(径) 深さ	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
507	D 5 c 4	N - 51° - E	楕円形	0.78×0.68	38	外傾	皿状	人為	
508	D 5 c 7	N - 37° - E	楕丸長方形	2.42×0.56	62	外傾	平坦	自然	縄文土器
509	D 5 a 7	N - 72° - E	不定形	200×0.96	68	外傾	皿状	人為	
510	D 5 e 4	N - 40° - E	楕丸長方形	1.72×0.62	34	外傾	皿状	人為	
515	D 6 c 3	N - 45° - W	楕円形	1.72×0.63	38-32	外傾	平坦	人為	SK516 → 本跡
516	D 6 e 2	N - 45° - W	楕円形	1.84×0.66	53	外傾	平坦	人為	SK517 → 本跡 → SK515
517	D 6 c 2	N - 45° - W	[長方形]	(1.50)×1.12	40-42	直立	凹凸	人為	第8号遺棄土坑→本跡→SK516
520	D 5 d 5	N - 43° - W	長方形	1.00×0.60	44	外傾	皿状	自然	土師質土器
521	D 5 e 6	-	円形	1.08×1.06	30	外傾	皿状	自然	縄文土器, 土師質土器
523	D 5 e 3	N - 46° - W	楕丸長方形	1.04×(0.70)	37	外傾	平坦	人為	陶器, 磁器, 瓦
524	D 5 e 3	N - 34° - E	楕円形	1.64×1.28	30	外傾	平坦	人為	陶器, 礫
525	D 5 e 3	N - 38° - W	[長方形]	(0.78)×0.60	12	外傾	皿状	自然	陶器, 瓦
526	D 5 f 3	N - 38° - W	長方形	2.10×0.63	60	外傾	皿状	自然	縄文土器
531	D 5 f 4	-	円形	1.16×1.10	58	外傾	平坦	自然	
534	D 5 h 4	N - 20° - E	不定形	2.71×1.38	50	外傾	平坦	人為	鉄製品
536	D 5 h 7	N - 47° - E	楕丸長方形	2.50×0.88	47-45	外傾	平坦	人為	土師質土器, 陶器, 磁器, 鉄製品, 石製品, 鉄片
537	D 5 h 8	-	不定形	1.37×(0.65)	65	外傾	平坦	人為	陶器, 磁器, 瓦
539	D 6 d 3	N - 39° - W	[楕丸長方形]	(1.16)×0.60	36	直立	皿状	人為	
541	D 5 g 8	-	円形	1.03×0.98	35-40	外傾	凹凸	自然	瓦質土器, 土製品, 瓦
542	D 5 g 4	N - 35° - W	楕丸長方形	1.63×0.68	50	外傾	平坦	人為	土師質土器, 磁器
543	D 5 h 8	N - 37° - W	楕丸長方形	1.91×0.86	70	外傾	皿状	人為	陶器, 鉄片
544	D 5 f 8	-	円形	0.88×0.81	38-34	外傾	皿状	人為	
546	D 5 h 8	N - 21° - W	楕丸長方形	1.68×1.00	52	外傾 磁斜	平坦	人為	陶器, 磁器, 鉄製品, 瓦, ガラス 礫瓦, 鉄片
548	D 5 h 8	N - 32° - W	楕丸長方形	1.77×0.54	96	直立	平坦	人為	土師質土器, 瓦, 礫
549	D 5 g 4	N - 39° - W	楕円形	2.10×0.80	71	直立 外傾	平坦	自然	土師質土器, 陶器, 瓦
550	D 5 g 4	N - 48° - E	[楕円形]	(0.80)×0.54	16-20	磁斜	平坦	自然	
551	D 5 f 2	-	円形	0.59×0.52	23	磁斜	皿状	自然	
552	D 5 g 4	N - 61° - E	楕円形	1.24×0.98	20	磁斜	皿状	人為	
553	D 5 g 3	-	[円形]	1.68×(1.48)	22-46	外傾	凹凸	人為	陶器, 磁器, 不明鉄製品
554	D 5 g 3	N - 34° - W	[楕丸長方形]	(2.58)×0.91	41	直立	平坦	人為	土師質土器, 陶器, 不明鉄製品 不明陶製品, 礫
556	D 5 g 4	N - 33° - W	楕丸長方形	1.80×0.59	34	直立 外傾	平坦	人為	土師質土器, 陶器, 磁器
557	D 5 g 3	N - 38° - W	[長方形]	1.13×(0.38)	19-24	外傾	平坦	人為	ガラス
558	D 5 f 3	N - 40° - W	[長方形]	200×(1.66)	26	外傾	平坦	人為	土師質土器, 陶器, 磁器, 礫
559	D 5 f 3	N - 60° - E	[楕丸長方形]	(1.20)×(1.00)	22	外傾	平坦	人為	陶器
560	D 5 f 3	N - 38° - W	長方形	2.94×0.67	46	外傾	平坦	人為	
562	D 4 h 0	N - 68° - E	楕円形	0.85×0.63	11-72	直立 磁斜	皿状	人為	
564	D 5 h 4	N - 43° - E	長方形	1.87×1.55	63	外傾	平坦	人為	土師質土器, 陶器, 磁器, 銅製品 礫
566	E 5 b 3	N - 47° - E	不定形	3.85×3.47	10-75	外傾 磁斜	凹凸	人為	土師質土器
567	D 5 g 8	N - 38° - W	楕丸長方形	1.29×0.70	52	直立 外傾	平坦	人為	
568	E 5 a 3	-	円形	0.90×0.82	52	外傾	平坦	自然	
569	D 5 j 5	N - 19° - E	楕円形	1.34×1.14	25	外傾 磁斜	平坦	人為	
570	E 5 a 5	N - 41° - W	[楕丸長方形]	(1.42)×0.73	40	外傾	平坦	自然	不明鉄製品
573	D 4 i 8	N - 43° - W	不定形	1.10×0.97	35	外傾	平坦	人為	
574	D 4 i 8	N - 48° - E	楕丸長方形	0.96×0.73	26	外傾	平坦	自然	土師質土器
576	E 5 b 4	N - 46° - W	[長方形]	(1.13)×0.75	21	外傾	平坦	自然	
577	E 5 b 4	-	不定形	2.05×(0.57)	50	外傾	皿状	人為	SK576 → 本跡 → SK566
578	E 5 a 3	N - 42° - W	[長方形]	(1.52)×1.15	11-47	外傾	平坦	人為	本跡 → SK566



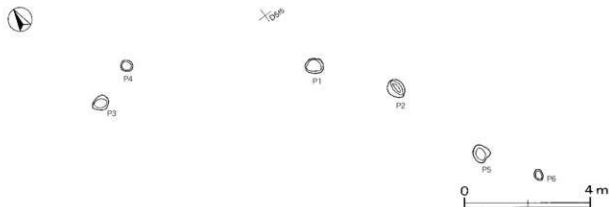
番号	位置	長軸(径)方向	平面形	規模 (m) 深さ (cm) 長軸(径)×短軸(径) 深さ	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
579	E 5 d1	-	円形	1.83×1.72	65 外傾	皿状	自然		
581	E 4 a9	N-45°-E	隅丸長方形	1.73×1.24	48 高立外傾	平坦	人為	鉄製品	
583	D 4 j8	N-43°-W	[不整形円形]	(1.90)×1.37	17-27 外傾	平坦	人為	磁器	
585	D 4 j8	N-44°-E	隅丸長方形	2.55×0.68	60-80 直立	平坦	人為	陶器、磁器、不明鉄製品、礎	本跡→SK585
587	D 5 h4	N-45°-W	不定形	1.70×1.56	56 外傾	平坦	人為	土師質土器、陶器、磁器、土製品、不明鉄製品	SK589・590・591→本跡
588	E 5 c3	N-37°-E	楕円形	1.93×1.16	18-6 緩斜	皿状	人為		
589	D 5 h5	N-44°-W	[長方形]	(1.02)×(0.54)	26 外傾	平坦	人為	瓦質土器、不明鉄製品、銅製品	本跡→SK587・590
590	D 5 h4	N-49°-E	[長方形]	(1.08)×0.60	30 外傾	平坦	人為		SK589→本跡→SK387・591
591	D 5 h4	N-45°-W	[長方形]	1.12×(0.50)	36 外傾	平坦	人為	陶器、ガラス	SK590→本跡→SK587
592	D 4 j9	N-39°-W	隅丸長方形	1.85×1.28	13 外傾	平坦	人為	土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器、銅製品、不明鉄製品、瓦、礎瓦、礎	WT11→本跡
594	E 4 a0	N-46°-E	隅丸長方形	1.91×1.36	50 外傾	平坦	人為	土師質土器、陶器	SX6→本跡
595	E 4 b0	N-82°-E	楕円形	1.48×(1.05)	45 外傾	平坦	人為		
596	D 5 i5	N-42°-W	隅丸長方形	(2.48)×1.37	18-30 外傾	平坦	人為	土師質土器、陶器、磁器、不明鉄製品、瓦、礎瓦、礎、ガラス	本跡→SK597
597	D 5 i5	N-42°-W	隅丸長方形	1.90×1.37	30 外傾	平坦	人為	土師質土器、陶器、磁器、鉄製品、不明鉄製品、瓦、礎瓦	SK596→本跡
598	D 4 i8	N-51°-W	方形	1.32×1.28	42 直立	平坦	人為	土師質土器	SK599→本跡
599	D 4 i8	N-43°-W	隅丸長方形	1.15×(0.30)	26-30 直立	平坦	人為		本跡→SK598
600	E 4 a8	-	[楕円形]	(0.96)×0.74	27 外傾緩斜	皿状	人為	土師質土器、陶器、磁器、瓦、礎瓦、鉄滓	
601	D 4 h8	N-44°-E	隅丸長方形	1.08×0.52	37 直立	平坦	人為		SK608→本跡
602	E 4 a8	N-41°-W	隅丸長方形	2.33×0.65	44 直立	平坦	人為	土師質土器、陶器、磁器、鉄製品、瓦、礎瓦、礎、ガラス	SK603→本跡
603	E 4 a8	N-58°-W	[長方形]	(0.63)×0.59	31 外傾	平坦	不明	不明鉄製品	本跡→SK602・604
604	E 4 a8	N-45°-W	隅丸長方形	1.98×0.52	51 直立	平坦	人為	土師質土器	SK603→本跡
606	E 5 a5	N-50°-E	隅丸長方形	1.97×0.70	16 外傾	凹凸	自然		本跡→SK607
607	E 5 a5	N-56°-E	楕円形	1.11×0.94	8-21 外傾緩斜	皿状	人為		SK605・606→本跡
608	D 4 h8	N-40°-W	[楕円形]	(0.40)×0.50	9 緩斜	皿状	人為		本跡→SK601
609	D 6 c1	N-42°-W	楕円形	1.17×0.97	35 外傾	平坦	自然		
611	D 5 e9	N-47°-E	長方形	1.68×0.66	90 直立	平坦	人為	陶器、磁器、不明鉄製品	
612	D 5 e9	N-48°-E	隅丸長方形	1.80×0.70	68 直立	凹凸	人為	陶器、不明鉄製品、鉄滓	SK615→本跡
615	D 5 e9	N-48°-E	不定形	1.78×1.60	20 緩斜	平坦	人為		本跡→SK612
618	D 4 i0	-	円形	0.46×0.44	56 外傾	皿状	人為		
619	D 5 i1	N-72°-W	楕円形	1.14×0.64	62-80 外傾	凹凸	人為	瓦質土器、不明鉄製品	
620	D 4 h9	-	[楕円形]	0.72×(0.22)	18 外傾	凹凸	自然		
621	D 5 f7	N-38°-W	隅丸長方形	1.15×0.86	72 直立	平坦	人為	不明鉄製品	SK540→本跡→SK622
622	D 5 g8	N-42°-W	隅丸長方形	1.47×0.69	70 直立	平坦	人為	鉄製品	SK540・621→本跡
623	D 4 i9	-	円形	0.88×0.79	6 緩斜	皿状	自然		SB10→本跡
624	D 5 h4	-	不定形	(1.34)×(1.30)	20-31 外傾	凹凸	人為		本跡→SK542・564
625	D 5 i4	N-11°-W	楕円形	0.64×0.44	49 外傾	平坦	人為		
626	D 5 h5	-	円形	0.36×0.34	30 外傾	皿状	人為		

## (5) ビット群

ビット群は、今回の調査で中央部、西部、北東部および南西部に5か所確認された。いずれも建物跡を想定できるような配置ではなく、時期も不明である。ここでは、ビット群ごとに平面図と一覧表を記載する。

## 第10号ビット群 (第47図)

調査区中央部のD5e3～D5h6区にかけての東西12m、南北10mの範囲から、柱穴状のビット6か所が確認された。平面形は長径36～63cmの楕円形で、深さは14～64cmである。覆土中から近世の陶器や磁器片が出土しているが、柱穴の分布状況から建物は想定できない。時期、性格ともに不明である。



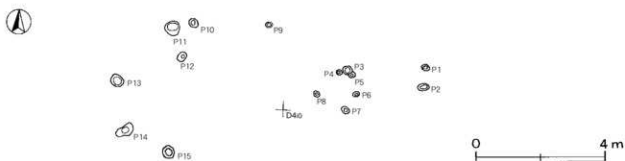
第47図 第10号ビット群実測図

表9 第10号ビット群 ビット一覧表

番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ				長径	短径	深さ
1	D 5 d5	楕円形	57	47	64	4	D 5 e3	楕円形	38	35	14
2	D 5 g5	楕円形	63	52	34	5	D 5 g5	楕円形	60	50	24
3	D 5 e3	楕円形	52	48	24	6	D 5 b6	楕円形	36	28	43

第12号ビット群 (第48図)

調査区西部のD4 h8～D5 h1区にかけての東西10m、南北4.5mの範囲から、柱穴状のビット15か所が確認された。平面形は長径20～59cmの円形または楕円形で、深さは8～16cmである。本ビット群は、重複関係から第10号掘立柱建物跡より新しいものである。第10号掘立柱建物跡内で確認されたビットもあり、第10号掘立柱建物跡に伴う可能性はあるが、柱穴の分布状況からは明確でない。時期、性格ともに不明である。



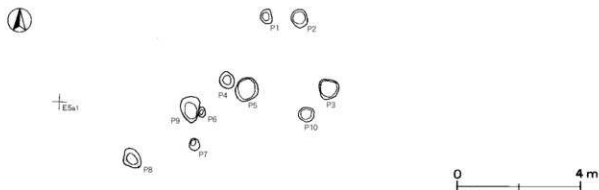
第48図 第12号ビット群実測図

表10 第12号ビット群 ビット一覧表

番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ				長径	短径	深さ
1	D 5 h1	円形	22	22	12	9	D 4 h9	楕円形	24	18	8
2	D 5 h1	楕円形	30	28	12	10	D 4 h9	楕円形	30	28	16
3	D 4 h0	楕円形	32	28	12	11	D 4 h9	楕円形	48	38	14
4	D 4 h0	楕円形	30	16	12	12	D 4 h9	円形	26	24	12
5	D 4 h0	楕円形	24	16	12	13	D 4 h8	円形	39	35	9
6	D 4 h0	楕円形	30	16	12	14	D 4 h8	楕円形	59	31	13
7	D 4 h0	楕円形	24	20	12	15	D 4 h9	円形	40	36	8
8	D 4 h0	楕円形	30	16	12						

## 第13号ビット群（第49図）

調査区南西部のD5j2～E5a1区にかけての東西7m、南北5mの範囲から、柱穴状のビット10か所が確認された。平面形は長径20～86cmの円形または楕円形で、深さは10～79cmである。本ビット群は、重複関係から第11号掘立柱建物跡より新しいものである。第11号掘立柱建物跡内で確認されたビットもあり、建て替えを想定したが、柱穴の分布状況からは明確でない。時期、性格ともに不明である。



第49図 第13号ビット群実測図

表11 第13号ビット群 ビット一覧表

番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ				長径	短径	深さ
1	D5j2	楕円形	47	42	18	6	E5a2	楕円形	27	14	79
2	D5j2	円形	59	54	19	7	E5a2	楕円形	20	17	45
3	D5j3	楕円形	67	57	12	8	E5a1	楕円形	62	50	32
4	D5j2	楕円形	55	45	13	9	D5j2	楕円形	86	61	64
5	D5j2	楕円形	77	68	15	10	E5a3	円形	50	46	10

## 第16号ビット群（第50図）

調査区北東部のD5b0～D6j1区にかけての東西6m、南北14mの範囲から、柱穴状のビット8か所が確認



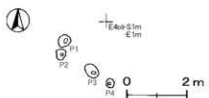
第50図 第16号ビット群実測図

された。平面形は長径20～45cmの円形または楕円形で、深さは12～89cmである。出土遺物はなく、また柱穴の分布状況から建物は想定できない。時期、性格ともに不明である。

表12 第16号ピット群 ピット一覧表

番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ				長径	短径	深さ
1	D 5 c9	円形	25	24	12	5	D 5 e0	円形	20	20	12
2	D 5 b0	円形	24	24	12	6	D 5 e0	楕円形	45	39	36
3	D 5 e0	円形	21	20	12	7	D 6 f1	円形	40	38	89
4	D 5 e9	円形	22	20	12	8	D 5 c0	円形	26	25	12

第18号ピット群 (第51図)



調査区南西部のE 4 b8～E 4 b9区にかけての東西2m、南北2mの範囲から、柱穴状のピット4か所が確認された。平面形は長径30～52cmの円形または楕円形で、深さは42～52cmである。出土遺物はなく、柱穴の分布状況から建物は想定できない。時期、性格ともに不明である。

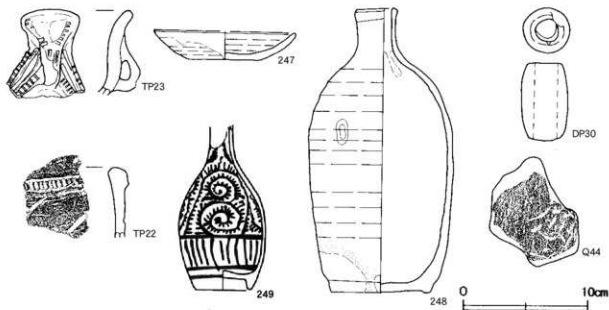
第51図 第18号ピット群実測図

表13 第18号ピット群 ピット一覧表

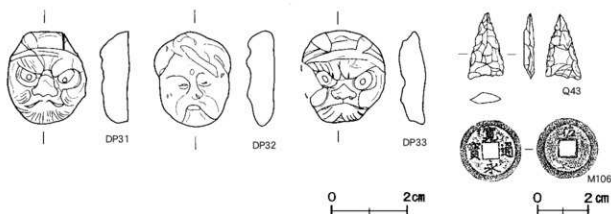
番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ				長径	短径	深さ
1	E 4 b8	楕円形	52	37	42	3	E 4 b9	楕円形	50	38	52
2	E 4 b8	楕円形	41	34	50	4	E 4 b9	円形	30	28	49

(6) 遺構外出土遺物

今回の調査で出土した遺物のうち、遺構に伴わない特徴的なものを実測図(第52・53図)と観察表で記載する。



第52図 遺構外出土遺物実測図(1)



第53図 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表(第52・53図)

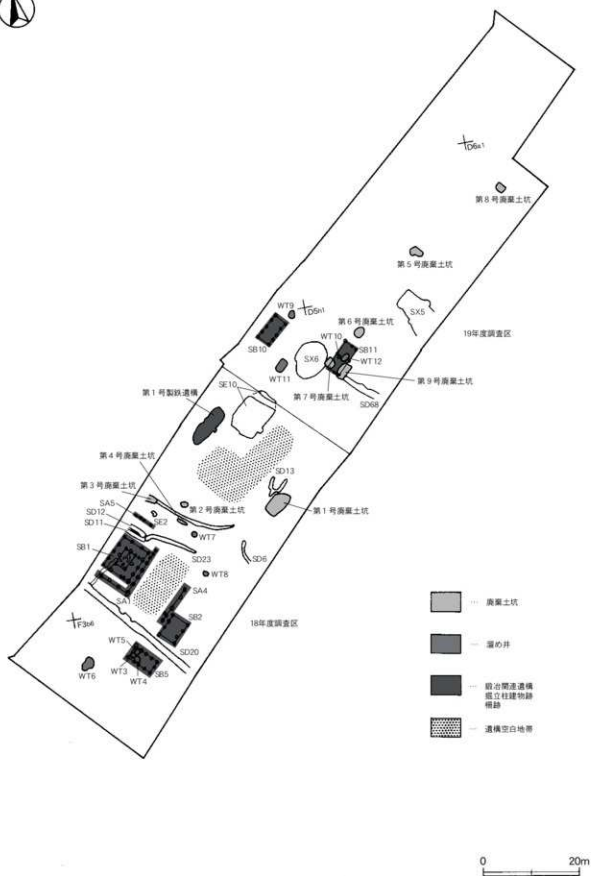
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	胎土色	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
247	陶器	灯明皿	(11.1)	2.2	(5.6)	細砂にぶい黄褐色	にぶい赤褐色	良好	良好	箱輪 口縁端部・外面油層付着	SB41 覆土上層	瀬戸・美濃系 50%
248	陶器	徳利	3.4	22.5	7.9	細砂にぶい黄褐色	灰オリーブ	良好	良好	箱輪 ロケ口成形	表土	瀬戸・美濃系 90% PL9
249	磁器	小瓶	-	(12.8)	4.4	緻密	灰白	灰白	良好	箱唐草文 箱	表土	肥前系 95% PL9
TP22	縄文土器	深鉢	-	(5.5)	-	長石・石英・雲母	赤色粒子	橙	普通	口縁部は二本の比線調に刺突文 頸部は斜方向の比線	SK6 覆土中	後期後半 5% PL5
TP23	縄文土器	深鉢	-	(6.6)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	普通	口縁部隆帯上に刻み	SK534 覆土中	後期後半 5% PL5
番号	器種	径	長さ	孔径	重量	材質	手法・文様の特徴			出土位置	備考	
DP30	管状土器	3.7	6.1	1.8	55.7	粘土	ナデ 一方からの穿孔			SK5 覆土上層		
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	手法・文様の特徴			出土位置	備考	
DP31	泥面子	2.4	(2.1)	0.8	(2.9)	粘土	円盤状 人面			SK587 覆土中	PL6	
DP32	泥面子	2.5	2.1	0.8	2.9	粘土	円盤状 人面			SK466 覆土中	PL6	
DP33	泥面子	2.4	2.2	0.7	(2.7)	粘土	円盤状 人面			表土	PL6	
Q43	石鏃	2.6	1.4	0.4	1.36	チャート	押圧剥離による調整			第6号 燧石土坑		
Q44	板碑	(8.5)	(7.2)	(1.2)	(112.0)	緑泥片岩	武藏型板碑 梵字			第7号 燧石土坑		
番号	銭名	径	孔幅	重量	初铸年	材質	特徴			出土位置	備考	
M106	寛永通寶	2.49	0.65	2.64	1714	銅	新寛永 晋文佐			表土		

## 第4節 まとめ

同所新田遺跡は、平成18年度の調査(以下、「前回の調査」)で明らかにされたように古墳時代から近世にかけての複合遺跡であり、中でも18世紀後半から19世紀前半に比定される製鉄関連遺構が主体となる遺跡であることが判明した。ここでは、今回の調査で確認された掘立柱建物跡2棟、溝跡1条、溜め井跡4基、廃棄土坑5基、不明遺構2基を加え、2年次にわたる調査で確認された製鉄関連遺構について概観し、まとめとする。

### 1 近世の製鉄関連遺構について

掘立柱建物跡は、調査区中央部付近に第10・11号掘立柱建物跡が確認されている。機能していた時期は、出土遺物がなく明確でないものの、第1・2号掘立柱建物跡とは同軸であることから関連が想定され、製鉄関



第54図 製鉄関連遺構配置図

池遺構とみられるものである。2棟の建物跡は、周辺に柵を付設した痕跡が見当たらない。また内部にはやや時期差がある遺構が構築されており、その覆土中には椀状滓や鉄滓など掘立柱建物の内部に鍛冶炉があったことを想起させるものも見当たらない。さらに2棟の建物跡は、第1号掘立柱建物跡と比較すると、柱穴の径が小さく、柱間寸法も不揃いであることから、簡素な倉庫と想定できる。また第11号掘立柱建物跡の内部に2基の溜め井跡があることは、第5号掘立柱建物跡と類似しているが、2基の溜め井跡の規模が異なることや、第12号溜め井跡が掘立柱建物跡の中心からずれていることから、第11号掘立柱建物跡が溜め井跡の上屋とは異なるものであり、やや時期差があるものとみられる。

溜め井跡は、前回の調査において貯水機能をもつものと述べられているものである。今回の調査でも4基確認されており、いずれも壁面及び底面にロームや粘土が含まれた土を充填して硬化面を構築しているのが特徴で、水を浸透しにくくするための工法とみられる。これらの施設の廃絶後には、日常雑器とともに椀状滓や鉄滓、砂鉄などを廃棄している状況から、鍛冶に関わる工人が使用したものと推測できる。溜め井跡の配置をみると、掘立柱建物跡や溝跡の周辺に位置しているものが多い。前回の調査では、溜め井跡を鉄製品の仕上げ場として掘立柱建物跡や溝との関連をもつものと想定している。今回の調査でも、それら遺構の配置から関連をもつものと想定できるが、仕上げ場としての痕跡は見い出せず、詳細は明らかでない。また、第10・11号溜め井跡の壁面及び底面に非常に薄い木片を確認した。この2基の掘方の埋土は、ほかの溜め井跡と構築方法が同じであるが、2基の溜め井跡から木片が出土したのかは、不明である。当遺跡では、肥料などの厩に関連する用具は出土していないが、木片の出土状況や遺構の形状からは、第10号溜め井跡が「埋桶式便槽」、第11号溜め井跡が「埋槽式便槽」といわれる厩にも類似しており、その可能性も推測される。

土坑は、生活雑器とともに羽口や椀状滓のほか、釘や不明鉄製品など鉄が廃棄されているものが多く確認されている。これらは、長軸が2～3mほどの長方形の土坑と、ある機能を終えて廃絶後に転用された大形の土坑に大別することができる。小林謙一氏によると、廃棄物処理のための遺構には「日常的または一時的に廃棄物を廃棄する規格的規模の小さい遺構」と「継続的に使用された廃棄遺構で、長期間使用しているうちに巨大な廃棄遺構となったものや地下室などの地下施設が廃棄された後、廃棄遺構として再利用された遺構」に区分できる<sup>9)</sup>とし、当遺跡で確認された廃棄土坑は、小林氏の述べている分類にあてはめることができる。また、本文で述べた9基の廃棄土坑には、遺構内の破片同士が程度接合はするものの、接合が確認できない細片が多く含まれていることや、ほかの遺構の破片と接合している特徴がある。第1号廃棄土坑と第2・3号溝や第1号井戸跡の遺構間接合のほか、約20m離れた第5号不明遺構と第6号不明遺構の遺構間接合などから、廃棄物の移動があったものと推測される。それは不要品を単に廃棄場へ廃棄しただけでなく、後に別の場所へ廃棄物が移動したという二次的な廃棄があったものとみることができ、江戸時代における廃棄の一端をうかがうことができる。また、18世紀後半から19世紀前半と時期差のある遺物が同じ遺構から混在して出土している。中には何か所も修繕痕がある焙烙や、焼継痕がある広東碗なども含まれており、その様相は村落で出土するいわゆる庶民向けに大量生産されたものとみられる。

3基の炉体が検出された第1号炉跡は、多量の木炭が出土していることから、炭焼き遺構の可能性あることは本文でも述べた。本跡の上部構造は確認できていないが、下部構造は掘方への埋土が何層にもわたって充填されていることが判明しており、その構築状況は特異である。炉内には、砂粒が少量含まれているものの、鉄滓や砂鉄などは含まれていないため、近世後半の製鉄炉とは推測しにくい。第6号不明遺構を掘り込んで構築されていることから、防湿及び防湿対策として意図的に第6号不明遺構の上部へ構築したことが想定でき、第6号不明遺構が埋め戻された19世紀前半と時期差がほとんどない頃に構築された可能性も考えられる。

## 2 製鉄関連遺構の配置

製鉄関連遺物の詳細な分析結果については、付章として巻末で報告したが、概況は前回の分析結果と同様の鍛錬鍛冶跡であること。また、第6号不明遺構の覆土中に含まれていた砂鉄も前回の分析結果と同質のものであることが判明しており、前回の調査と今回の調査の遺構群が関連をもつことが解明できた。遺構の配置を概観すると、第1号製鉄遺構及び第10号井戸跡付近が中心とみられ、その周囲には第1号掘立柱建物付近と同様に、遺構の空白地帯が存在する。この遺構群の中核となるものは、第1号製鉄遺構と鍛錬鍛冶遺構である第1号掘立柱建物跡とみられ、これらの周囲に存在する掘立柱建物跡や溜め井跡、溝などが付随していたものと推測できる。遺構の時期については約半世紀と大別したため、製鉄関連遺構の構築時期の詳細は明確でないが、18世紀後半から19世紀前半にかけて構築と廃絶を繰り返してきたものと推測できる。調査区域外へ延びている遺構もあることから部分的な調査の成果ではあるが、この調査区域の中にある溜め井跡や廃棄土坑は、第1号製鉄遺構を境として対照的に配置されているようである。意図的に距離を置いてそれらの遺構を配置したと仮定すれば、鍛冶の作業工程が北東、南西部で分業されていた可能性も推測される。

以上、若干ではあるが製鉄関連遺構について触れてきた。前回の調査では多量に出土した釘と当時の社会情勢に関連づけて、当遺跡を釘の供給の場と想定しているが、今回の調査では製鉄遺構や鉄の生産を窺わせるような未製品が検出されていないため、釘生産の究明には至っていない。「茨城県の地名」<sup>1)</sup>によると、19世紀前半の当遺跡が所在する小福田地区には、古鉄紙屑買商を営む者が存在していたと記されている。2年次にわたる調査で確認できた多量の釘に加えて、板状の用途不明な鉄片も多量に出土したことに注目すれば、鉄製品の補修や廃材を収集して再加工するなどの工人集団の存在も浮かび上がらせることができる。

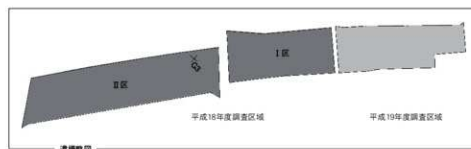
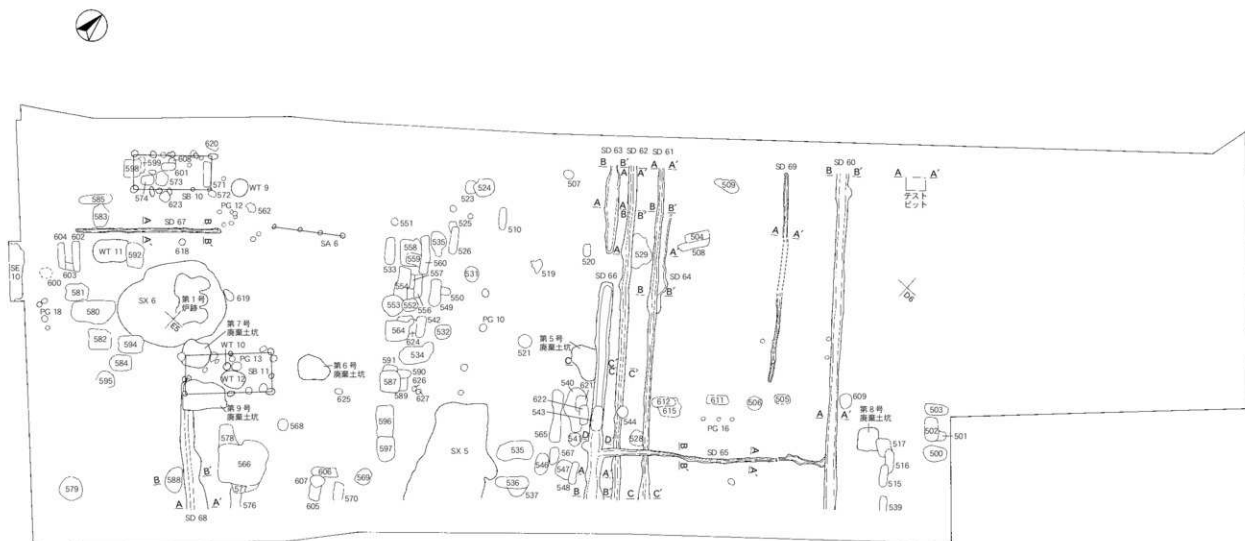
### 註)

- 1) 小林謙一「江戸遺跡における廃棄研究－廃棄遺構・廃棄場の検討－」『遺跡から出た江戸のゴミ』江戸遺跡研究会第16回大会発表要旨 江戸遺跡研究会 2003年2月
- 2) 下中邦彦編集「茨城県の地名」『日本歴史大系』第8巻 平凡社 1982年11月 P. 776  
天保9(1838)年の葛飾郡五拾四ヶ村組合諸商渡世向取書上帳(松本好司文書)に、家数63のうち61軒が農業専門、2軒が農問商・諸職人で、煮炭渡世と古鉄紙屑買と記述されている。文書については実際に拝見できていない。

### 参考文献

- ・桑村裕「清水遺跡 同所新田遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第290集 2008年3月
- ・江戸遺跡研究会「国説 江戸考古学研究辞典」2001年4月
- ・五霞町教育委員会「五霞町の村絵図(5) -明治18年筑前郡五霞村全国-」『五霞町の歴史資料』9 2004年3月





第55図 同所新田遺跡遺構全体図

## 第4章 瀬沼遺跡

### 第1節 遺跡の概要

瀬沼遺跡は、五葎町南部の中川左岸、標高約9～10mの台地平坦部に立地している。調査前の現況は畑地及び田地であり、調査面積は1,727㎡である。平成18年度に第一次調査が行われ、縄文時代と古墳時代の堅穴住居跡が確認されたことは、『茨城県教育財団文化財調査報告第289集』（2008年3月）で報告されている（以下、「前回の調査」）。

今回の調査区は、前回の調査区の北部にあたり、縄文時代の堅穴住居跡1軒、土坑3基、中世の墓坑11基、火葬土坑41基、近世の墓坑1基、土坑1基、運河跡1条、時期不明の溝跡6条、土坑128基、井戸跡5基、ピット群8か所を新たに確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に50箱出土している。主な出土遺物は、縄文土器（深鉢）、土師質土器（小皿、焙烙）、瓦質土器（焙烙、火鉢、火入）、陶器（碗、皿、灯明皿、灯明受台、徳利、瓶、播鉢）、磁器（碗、皿、水滴）、土製品（土玉）、石器（石鏃、砥石）、石製品（硯）、金属製品（釘、古銭）、木製品（漆器碗、漆器蓋、下駄）である。

### 第2節 基本層序

調査区中央部南側のC5・9区にテストピットを設定し、基本土層の観察を行った。地表面の標高は10.2mで、地表面から2mほど掘り下げた。通常最上層で確認される表土は攪乱によって確認できなかったため、以下の土層を7層に分層した。観察結果は以下のとおりである。

第1層は現代の遺物を含んだ水田の客土である。表土層は確認できない。

第2層は黒褐色の水田の最下層土で、中世・近世の遺物を含んでいる。層厚は12～20cmである。

第3層は暗褐色のロームへの漸移層で、縄文土器を含んでいる。層厚は14～22cmである。

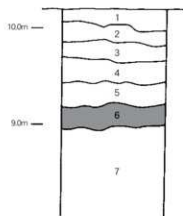
第4層は暗褐色のハードローム層で、締まりが強く、層厚は20～28cmである。

第5層は暗褐色のハードローム層で、第4層よりやや締まりが弱いので分層した。層厚は20～22cmである。

第6層は暗褐色で、粘性、締まりともに強く、層厚は22～28cmである。第4・5層より色調が暗いことから、第Ⅱ黒色帯と考えられる。

第7層は褐色の粘土層で、粘性、締まりともに非常に強い。下部は湧水のため未掘であり、層厚は不明である。

なお、第3層上面から中世の遺構、第4層上面から縄文時代の遺構が確認されている。



第56図 基本土層図



第57図 瀬沼遺跡調査区設定図

## 第3節 遺構と遺物

## 1 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は、竪穴住居跡1軒と土坑3基が確認された。以下、確認された遺構及び遺物について記述する。

## (1) 竪穴住居跡

## 第3号住居跡 (第58~60図)

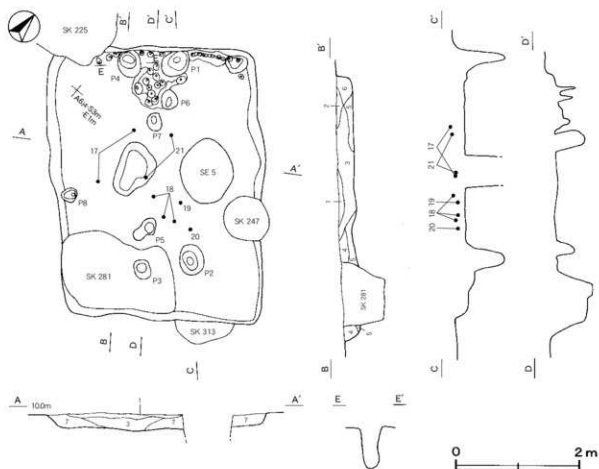
**位置** 調査区南部のA64区、標高9.8mの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第313号土坑を掘り込み、第5号井戸、第225・247・281号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸4.40m、短軸3.50mの長方形で、主軸方向はN-37°-Wである。壁高は16~24cmで、外傾して立ち上がっている。

**床** ほは平坦で、踏み固められた痕跡は見当たらない。中央部には長径が90cm、短径が40cm、深さ5cmの楕円形の落ち込みが確認されているが、赤変した面もなく、炉か否かは不明である。

**ピット** 8か所。P1・4がやや壁に偏っているが、P1~4の深さは28~72cmほどで、配置から主柱穴とみられる。床の中央付近に深さが30cmほどのP5が確認されており、主柱穴との位置関係からは補助柱穴と想定される。ほかに、北西壁際に径、深さともに10cmほどの壁柱穴が検出されている。P1とP4の間に確認さ



第58図 第3号住居跡実測図

れた12か所の小ピットは、性格不明である。

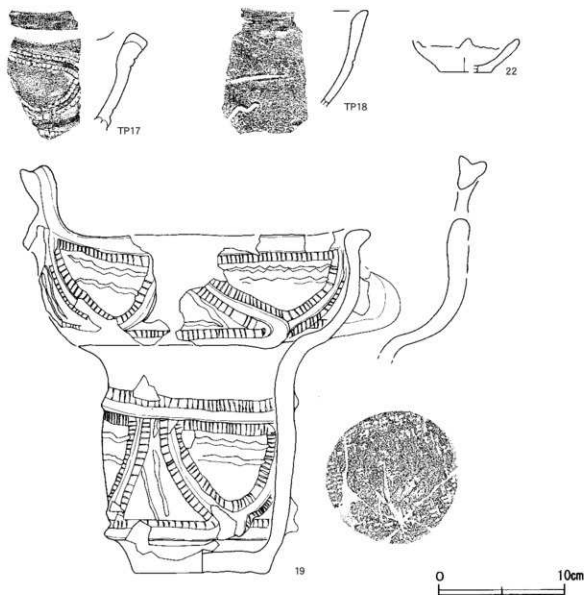
**覆土** 7層に分層できる。ブロック状に堆積していることから、埋め戻されている。

**土層解説**

- |        |                       |        |                     |
|--------|-----------------------|--------|---------------------|
| 1 黒褐色  | 粘土ブロック少量、ロームブロック微量    | 5 暗褐色  | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 極暗褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 6 暗褐色  | 粘土粒子少量、ロームブロック微量    |
| 3 暗褐色  | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 極暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 極暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量   |        |                     |

**遺物出土状況** 縄文土器片374点（深鉢373、ミニチュア浅鉢1）、石器7点（打製石斧1、磨製石斧6）、剥片19点、礎7点が出土している。17～21は、中央付近の覆土上層および東部覆土中から出土した破片が接合しており、その出土位置や覆土の様相から埋め戻しの際に投棄されたとみられる。ほかに図示した土器は、すべて覆土中から出土している。剥片の石材は安山岩6点、チャート3点、黒曜石10点で、破片も数点みられるが、台石などの石器製作を想起させる遺物が出土していないことから、埋め戻しの際に混入したものとみられる。

**所見** 時期は、出土土器から中期中葉に比定できる。



第59図 第3号住居跡出土遺物実測図(1)



第60図 第3号住居跡出土遺物実測図(2)

第3号住居跡出土遺物観察表 (第59・60図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
17	縄文土器	深鉢	(126)	152	76	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部に一段の縦線状把手 口縁部下に柳江を伴う隆帯	覆土上層	80% PL14
18	縄文土器	深鉢	180	202	80	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口唇部に隆帯 口縁部下にV字状の隆帯	覆土上層	90% PL14
19	縄文土器	深鉢	(282)	330	105	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	隆帯に沿う爪形文 頸部無文帯	覆土上層	80% PL14
20	縄文土器	深鉢	244	339	100	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	2条一組の角押文施文	覆土上層	90% PL14
21	縄文土器	深鉢	-	(197)	87	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	施文はLR単節施文に縦位の結節文隆帯による懸垂文施文	覆土上層	50%
22	ミナミアツ土器	浅鉢	(82)	26	(41)	長石・石英・陶質・赤色粒子	橙	普通	波状口縁	覆土中	30%
TP17	縄文土器	深鉢	-	(78)	-	長石・雲母	にぶい黄褐	普通	隆帯に沿って2条一組の角押文施文	覆土中	
TP18	縄文土器	深鉢	-	(78)	-	長石・雲母	にぶい黄褐	普通	高線状と山形状の沈線による文様を施文	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q6	割片	30	18	0.4	1.82	チャート	縦長割片 背面に同一方向からの割離痕 単削	覆土中	
Q7	打製石斧	8.4	5.5	2.2	96.6	安山岩	両面調整	覆土中	PL15

(2) 土坑

第281号土坑 (第61・62図)

位置 調査区南部のB6a4区、標高9.8mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第3号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.80m、短径1.24mの不整形円形で、長径方向はN-36°-Eである。確認面からの深さは46cmで、底面は平坦である。北東壁は段差がみられ、緩やかに立ち上がっている。

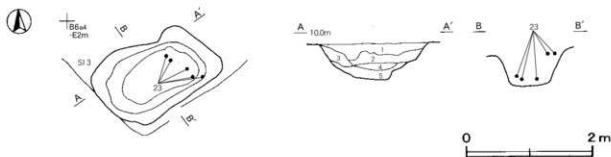
覆土 5層に分層できる。不自然な堆積状況であることから、埋め戻されている。

土層解説

- |        |                       |       |                     |
|--------|-----------------------|-------|---------------------|
| 1 極暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 極暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量      | 5 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量        |
| 3 暗褐色  | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |       |                     |

遺物出土状況 縄文土器片115点(深鉢)のほか、礫7点が出土している。23は、覆土上層から下層にかけて出土した破片が接合しており、埋め戻しの際に投棄されたものとみられる。

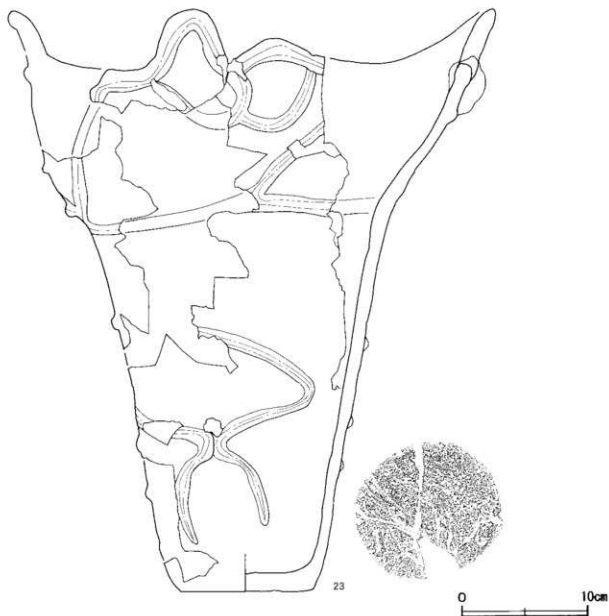
所見 時期は、出土土器から中期中葉に比定できる。



第61図 第281号土坑実測図

第281号土坑出土遺物観察表 (第62図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
23	縄文土器	深鉢	(382)	462	105	長石・石英	にぶい褐	普通	胴部はX字状の隆帯による懸垂文	覆土上層 ~下層	60% PL14



第62図 第281号土坑出土遺物実測図

## 第298号土坑 (第63図)

**位置** 調査区北部のA6d8区、標高9.8mの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第6号火葬土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 確認できた長径は3.30mで、短径1.98mの楕円形と推測され、長径方向はN-46°-Eである。

確認面からの深さは42cmで、底面は皿状である。壁は緩やかに立ち上がっている。

**覆土** 3層に分層できる。ブロック状に堆積していることから、埋め戻されている。

## 土層解説

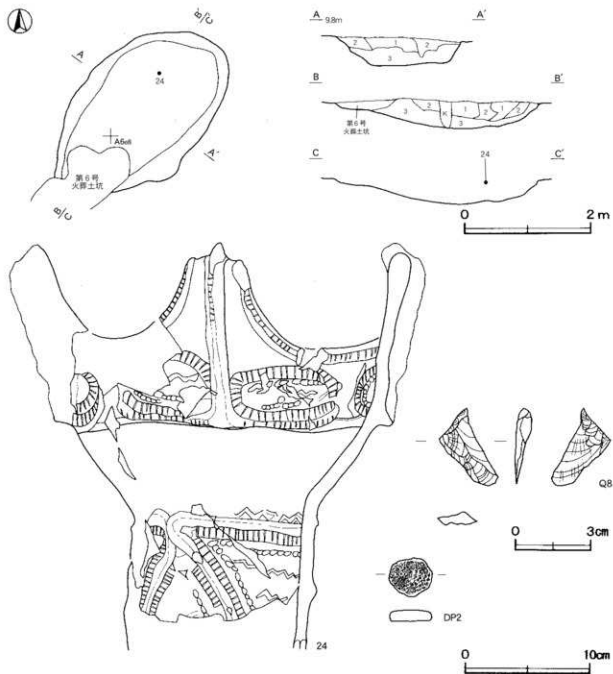
- |       |                |       |         |
|-------|----------------|-------|---------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 | 3 明褐色 | ローム粒子多量 |
| 2 黒褐色 | 炭化粒子少量、ローム粒子微量 |       |         |

**遺物出土状況** 縄文土器片217点(深鉢)、土製品1点(土器片円盤)、剥片1点のほか、礫3点が出土している。

24は底部が欠損し、覆土上層から横位で出土している。DP2は覆土中からの出土である。

**所見** 時期は、出土土器から中期中葉に比定できる。





第63図 第298号土坑・出土遺物実測図

第 298 号土坑出土遺物観察表 (第 63 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
24	縄文土器	深鉢	(282)	(322)	-	長石・石英・ 雲母	明赤褐	普通	種帯に沿う爪形文と波状沈線による 文様	覆土上層	70%
番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	胎土	特 徴		出土位置	備考	
DP2	土器片円盤	3.1	3.4	0.9	10.0	長石・石英・ 雲母	周縁部研磨		覆土中		
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴		出土位置	備考	
Q8	割片	3.1	2.3	0.6	1.46	黒曜石	縦長割片 背面は同一方向からの割離面 打面は単面磨打面		覆土中		

## 第313号土坑（第64図）

**位置** 調査区南部のB6a5区、標高9.6mほどの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第3号住居跡に北部を掘り込まれている。

**規模と形状** 長径0.95m、短径0.80mの楕円形で、長径方向はN-55°-Eである。確認面からの深さは36-43cmで、底面は皿状である。壁は外傾して立ち上がっている。

**覆土** 3層に分層できる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積である。

## 土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量  
2 暗褐色 ロームブロック微量  
3 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

**所見** 本跡は、重複関係から第3号住居構築以前のものである。遺物が出土していないため、詳細な時期は明確ではないが、中期中葉から大きく遡ることはないと推測される。



第64図 第313号土坑実測図

表14 縄文時代土坑一覧表

番号	位置	長軸(径)方向	平面形	規模 (m) 深さ (cm)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長軸径×短軸径	深さ					
281	B6a4	N-36°-E	不整形円形	1.80×1.24	46	緩斜	平坦	人為	縄文土器、礫	SI3→本跡
298	A6d8	N-46°-E	楕円形	3.30×1.98	42	緩斜	皿状	人為	縄文土器、土製品、割片、礫	本跡→第6号火葬土坑
313	B6a5	N-55°-E	楕円形	0.95×0.80	36-43	外傾	皿状	自然		本跡→SI3

## 2 中世の遺構と遺物

中世の遺構は、墓坑11基、火葬土坑41基が確認されている。なお、墓坑と火葬土坑は、平面形や火葬の状況を示す覆土の様相、壁面や底面の状況から区分した。ここでは墓坑11基と特徴ある火葬土坑8基について記述し、その他の火葬土坑については、一覧表と実測図および土層解説を、遺物については、実測図と観察表を記載する。

## (1) 墓坑

## 第1号墓坑（第65図）

**位置** 調査区南部のA6j7区、標高9.8mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 長径1.02m、短径0.71mの楕円形で、主軸方向はN-2°-Eである。確認面からの深さは20cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

**覆土** 3層に分層できる。ロームブロックを含んだ土で埋め戻されている。

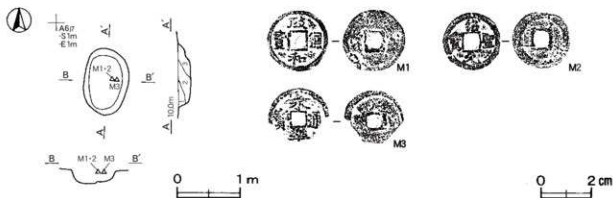
**土層解説**

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量  
 2 黒褐色 ロームブロック中量、炭化物微量

- 3 暗褐色 ロームブロック中量

**遺物出土状況** 古銭6点（紹聖元寶1，政和通寶1，永樂通寶2，不明2）のほか、混入した縄文土器5点が出土している。古銭は細片で図示できないものもあるが、すべて東壁寄りの覆土上層からまともに出ており、六道銭とみられる。骨片や骨粉は検出されていない。

**所見** 時期は、出土した古銭から中世後半に比定できる。



第65図 第1号墓坑・出土遺物実測図

**第1号墓坑出土遺物観察表（第65図）**

番号	銭名	径	孔径	重量	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
M1	政和通寶	248	062	2.48	1111	銅	北宋銭 無背	覆土上層	PL15
M2	紹聖元寶	235	068	2.74	1094	銅	北宋銭 無背	覆土上層	
M3	永樂通寶	-	062	(1.76)	1408	銅	明銭 無背	覆土上層	

**第2号墓坑（第66図）**

**位置** 調査区南部のB6a6区、標高9.8mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 南東部が攪乱を受けており、確認できた長軸は0.8mで、短軸0.80mの隅丸長方形と推測され、長軸方向はN-45°-Wである。確認面からの深さは28cmで、底面は平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。

**覆土** 3層に分層できる。ロームブロックを含んだ土で埋め戻されている。

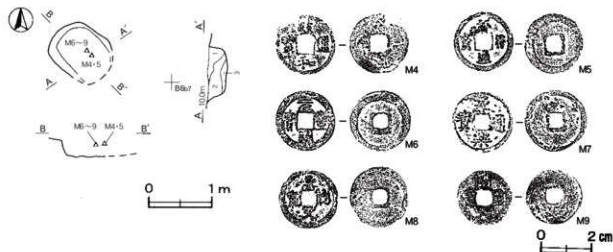
**土層解説**

- 1 灰褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック少量  
 2 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量

- 3 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量

**遺物出土状況** 古銭6点（元豊通寶1，政和通寶1，永樂通寶1，□□通寶1，景德元寶1，□□寶1）のほか、混入した縄文土器2点が出土している。古銭はすべて中央部の覆土上層からまともに出ており、六道銭とみられる。骨片や骨粉は検出されていない。

**所見** 時期は、出土した古銭から中世後半に比定できる。



第66図 第2号墓坑・出土遺物実測図

第2号墓坑出土遺物観察表 (第66図)

番号	銭名	径	孔幅	重量	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
M4	政和通寶	241	0.69	(250)	1111	銅	北宋銭 無背	覆土上層	
M5	□□通寶	242	0.63	276	-	銅	摩滅により不明	覆土上層	
M6	元豊通寶	243	0.60	350	1078	銅	北宋銭 無背	覆土上層	
M7	永楽通寶	247	0.58	224	1408	銅	明銭 無背	覆土上層	
M8	崇徳元寶	245	0.60	(284)	1004	銅	北宋銭 無背	覆土上層	
M9	□□□寶	230	0.64	(146)	-	銅	開元通寶あるいは周通元寶。	覆土上層	

第3号墓坑 (第67図)

位置 調査区南部のA67区、標高9.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第320号土坑、第18号溝に掘り込まれている。

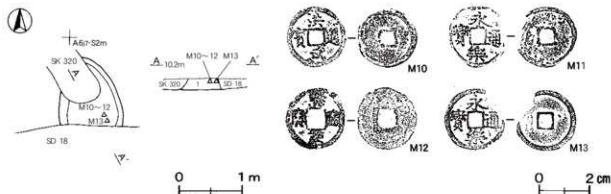
規模と形状 確認できた長径は1.20mで、短径0.88mの不整楕円形と推測され、長径方向はN-25°-Wである。確認面からの深さは20cmで、底面は平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 単一層である。ロームブロックを含んだ土で埋め戻されている。

## 土層解説

1 極暗褐色 ロームブロック中量、粘土ブロック少量、骨片

遺物出土状況 土師質土器片1点(不明)、古銭6点(熙寧通寶2、洪武通寶1、永楽通寶3)が出土し、骨片



第67図 第3号墓坑・出土遺物実測図

が覆土中から検出されている。古銭は細片で図示できないものもあるが、すべて南東部の覆土上層からまともに出ており、六道銭とみられる。

所見 時期は、出土した古銭から中世後半に比定できる。

### 第3号墓坑出土遺物観察表(第67図)

番号	銭名	径	孔幅	重量	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
M10	洪武通寶	244	053	3.56	1368	銅	明銭 無背	覆土上層	
M11	水滸通寶	248	055	(3.68)	1408	銅	明銭 無背	覆土上層	
M12	熙寧通寶	245	071	(1.86)	1068	銅	北宋銭 無背	覆土上層	
M13	水滸通寶	248	056	(1.82)	1408	銅	明銭 無背	覆土上層	

### 第4号墓坑(第68図)

位置 調査区南部のA6j7区、標高9.8mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸1.40m、短軸1.19mの不定形で、長軸方向はN-6°-Wである。確認面からの深さは37cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

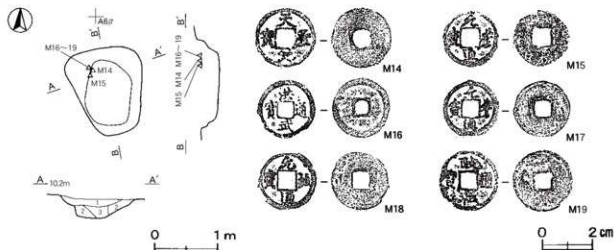
覆土 3層に分層できる。ロームブロックを含んだ土で埋められている。

#### 土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック少量、粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂粒・骨粉微量  
 2 暗褐色 ロームブロック少量、粘土ブロック・炭化粒子微量  
 3 黒褐色 ロームブロック少量、粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 古銭6点(天聖元寶1、元豊通寶2、元祐通寶1、政和通寶1、洪武通寶1)が出土し、骨片が覆土中から検出されている。古銭はすべて北西部の覆土上層からまともに出ており、六道銭とみられる。ほかに縄文土器14点も出土している。

所見 時期は、出土した古銭から中世に比定できる。



第68図 第4号墓坑・出土遺物実測図

### 第4号墓坑出土遺物観察表(第68図)

番号	銭名	径	孔幅	重量	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
M14	天聖元寶	244	075	2.58	1023	銅	北宋銭 無背	覆土上層	
M15	元豊通寶	228	075	(1.56)	1078	銅	北宋銭 無背	覆土上層	
M16	洪武通寶	238	057	3.70	1368	銅	明銭 無背	覆土上層	

番号	銭名	径	孔幅	重量	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
M17	元豊通寶	232	0.66	226	1078	銅	北宋銭 無背	覆土上層	PL15
M18	元祐通寶	241	0.62	(276)	1086	銅	北宋銭 無背	覆土上層	
M19	政和通寶	241	0.62	(210)	1111	銅	北宋銭 無背	覆土上層	

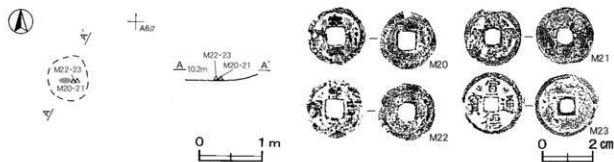
### 第5号墓坑 (第69図)

**位置** 調査区南部のA6j6区、標高10.0mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 確認面で径0.7mほどの円形の範囲に骨片及び古銭が検出された。土坑状の掘り込みを想定して断り割り調査を行ったが、掘り込みは確認できなかったことから、平坦な底面が露出した状況と推定される。

**遺物出土状況** 六道銭とみられる古銭6点(熙寧元寶、元祐通寶、政和通寶、宣徳通寶、□符□寶、□平元□)が出土し、骨片が確認面から検出されている。ほかに縄文土器2点も出土している。

**所見** 平面形は不明であるが、骨片や古銭の検出状況から、墓坑とみられる。時期は、出土した古銭から中世後半に比定できる。



第69図 第5号墓坑・出土遺物実測図

### 第5号墓坑出土遺物観察表 (第69図)

番号	銭名	径	孔幅	重量	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
M20	□符□寶	232	0.74	(198)	1008	銅	北宋銭 無背	確認面	
M21	□平元□	236	0.57	(248)	-	銅	摩滅により不明	確認面	
M22	熙寧元寶	235	0.71	(258)	1068	銅	北宋銭 無背	確認面	
M23	宣徳通寶	249	0.53	(232)	1433	銅	明銭 無背	確認面	PL15

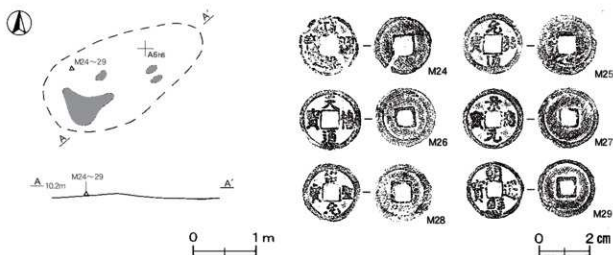
### 第6号墓坑 (第70図)

**位置** 調査区中央部のA6h7区、標高10.0mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 確認面で長径2.75m、短径1.38mの楕円形の範囲に骨片及び古銭が検出された。土坑状の掘り込みを想定して断り割り調査を行ったが、掘り込みは確認できなかったことから、平坦な底面が露出した状況と推定される。

**遺物出土状況** 六道銭とみられる古銭6点(景德元寶、天禧通寶、元祐通寶、紹聖元寶、政和通寶、朝鮮通寶)が出土し、骨片が検出されている。ほかに縄文土器36点、剥片3点、礫2点も出土している。

**所見** 時期は、出土した古銭から中世後半に比定できる。



第70図 第6号墓坑・出土遺物実測図

第6号墓坑出土遺物観察表(第70図)

番号	銭名	径	孔径	重量	初铸年	材質	特徴	出土位置	備考
M24	政和元寶	243	0.79	(1.46)	1111	銅	北宋銭 無背	確認面	
M25	元祐通寶	242	0.70	(3.00)	1086	銅	北宋銭 無背	確認面	
M26	天禧通寶	248	0.64	254	1017	銅	北宋銭 無背	確認面	
M27	景德元寶	245	0.58	300	1004	銅	北宋銭 無背	確認面	PL15
M28	紹聖元寶	241	0.68	312	1094	銅	北宋銭 無背	確認面	
M29	朝鮮通寶	234	0.56	316	1423	銅	朝鮮銭 無背	確認面	PL15

### 第7号墓坑(第71図)

位置 調査区中央部のA6g5区、標高9.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第41号火葬土坑を掘り込んでいる。

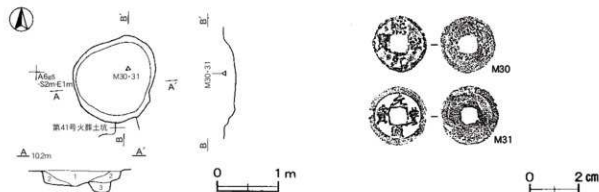
規模と形状 長径1.40m、短径1.24mの不整形である。確認面からの深さは15~35cmで、底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 3層に分層できる。ロームブロックを含んだ土で埋め戻されている。

#### 土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック少量、炭化物微量 3 黒褐色 ローム粒子微量  
2 黒褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 古銭2点(熙寧通寶、元豊通寶)が出土し、骨片が覆土中から検出されている。中央部の覆土



第71図 第7号墓坑・出土遺物実測図

上層で出土した M30・31は、六道銭を意識したものと思われる。ほかに混入した縄文土器7点も出土している。

所見 時期は、出土した古銭から中世に比定できる。

#### 第7号墓坑出土遺物観察表 (第71図)

番号	銭名	径	孔幅	重量	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
M30	熊掌通寶	232	0.80	(180)	1068	銅	北宋銭 無背	覆土上層	
M31	元豊通寶	245	0.66	(288)	1078	銅	北宋銭 無背	覆土上層	

#### 第8号墓坑 (第72図)

位置 調査区中央部の A 6 i5区、標高9.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第151号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南東部が掘り込まれているため、確認できた長径0.60m、短径0.52mの楕円形と推定され、長径方向は N-38°-W である。確認面からの深さは15cmで、底面は平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。

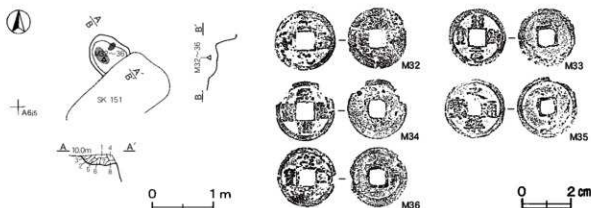
覆土 8層に分層できる。ロームブロックを含んだ土で埋め戻されている。

##### 土層解説

1 暗赤褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・骨粉少量	6 褐色	炭化粒子・骨片多量、ロームブロック・焼土粒子中量
2 褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量 骨粉微量	7 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 骨片
3 暗赤褐色	焼土粒子中量、ロームブロック・炭化物・骨粉少量	8 暗赤褐色	ロームブロック多量、焼土ブロック・炭化粒子中量、砂粒・骨粉少量
4 灰黄褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・骨粉少量		
5 暗赤褐色	ロームブロック・焼土粒子中量、炭化粒子・骨粉少量		

遺物出土状況 古銭6点(天聖元寶2、紹聖元寶1、永樂通寶1、元口通寶1、不明1)が出土し、骨片が覆土中から多量に検出されている。古銭は図示できないものもあるが、すべて中央部の覆土上層からまともに出ており、六道銭とみられる。ほかに混入した縄文土器1点も出土している。

所見 時期は、出土した古銭から中世後半に比定できる。



第72図 第8号墓坑・出土遺物実測図

#### 第8号墓坑出土遺物観察表 (第72図)

番号	銭名	径	孔幅	重量	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
M32	天聖元寶	240	0.72	214	1023	銅	北宋銭 無背	覆土上層	
M33	紹聖元寶	240	0.68	272	1094	銅	北宋銭 無背	覆土上層	



番号	銭名	径	孔幅	重量	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
M34	天聖元寶	247	0.73	(3.12)	1023	銅	北宋銭 無背	覆土上層	
M35	永樂通寶	251	0.57	(2.84)	1408	銅	明銭 無背	覆土上層	
M36	元〇通寶	248	0.66	(2.52)	-	銅	無背 元豊通寶	覆土上層	

### 第9号墓坑 (第73図)

**位置** 調査区中央部のA6h6区、標高9.8mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 長径1.20m、短径0.64mの長楕円形で、長径方向はN-17°-Wである。確認面からの深さは22cmで、底面は皿状である。壁は外傾して立ち上がっている。

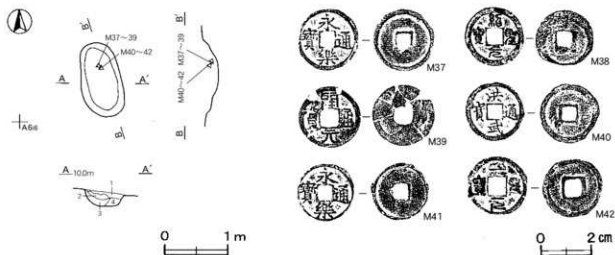
**覆土** 4層に分層できる。ロームブロックを含んだ土で埋め戻されている。

#### 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 3 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量  
 2 暗褐色 ロームブロック多量、炭化粒子微量 4 暗褐色 ロームブロック中量

**遺物出土状況** 古銭6点(開元通寶1、天聖元寶1、紹聖元寶1、洪武通寶1、永樂通寶2)が出土し、骨片が覆土中から検出されている。古銭は中央部の覆土中層からまとまって出土しており、六道銭とみられる。ほかに混入した縄文土器1点も出土している。

**所見** 時期は、出土した古銭から中世後半に比定できる。



第73図 第9号墓坑・出土遺物実測図

### 第9号墓坑出土遺物観察表 (第73図)

番号	銭名	径	孔幅	重量	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
M37	永樂通寶	247	0.59	(1.98)	1408	銅	明銭 無背	覆土中層	
M38	紹聖通寶	235	0.61	(3.50)	1094	銅	北宋銭 無背	覆土中層	
M39	開元通寶	247	0.71	(1.28)	621	銅	唐銭 無背	覆土中層	
M40	洪武通寶	239	0.58	3.00	1368	銅	明銭 無背	覆土中層	
M41	永樂通寶	239	0.64	2.80	1408	銅	明銭 無背	覆土中層	
M42	天聖元寶	246	0.72	2.28	1023	銅	北宋銭 無背	覆土中層	

## 第10号墓坑 (第74図)

位置 調査区中央部の A 6 h7区、標高10.0mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第39号火葬土坑、第236号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 確認できた長径は0.78mで、短径0.53mの長方形と推測され、長径方向は N-17°-W である。確認面からの深さは22cmで、底面は皿状である。壁は外傾して立ち上がっている。

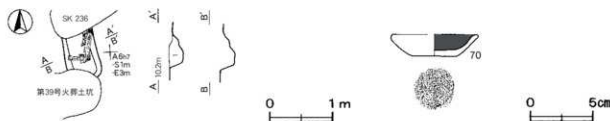
覆土 単一層である。ロームブロックを含んだ土で埋め戻されている。

## 土層解説

1 暗褐色 ロームブロック・炭化物中量、焼土粒子・骨粉少量

遺物出土状況 土師質土器 1点(小皿)が覆土中から出土し、骨片や炭化物も覆土中から検出されている。

所見 骨片の出土状況や覆土の様相から墓坑とみられる。時期は、出土土器から中世後半に比定できる。



第74図 第10号墓坑・出土遺物実測図

## 第10号墓坑出土遺物観察表 (第74図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
70	土師質土器	小皿	(6.6)	1.7	3.0	長石	にぶい黄橙	普通	口縁成形 内面採付者 底面回転糸切り	覆土中	60%

## 第11号墓坑 (第75図)

位置 調査区中央部の A 6 i5区、標高9.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第31号火葬土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.20m、短径1.08mの楕円形で、長径方向は N-60°-W である。確認面からの深さは22cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 5層に分層できる。ロームブロックを含んだ土で埋め戻されている。

## 土層解説

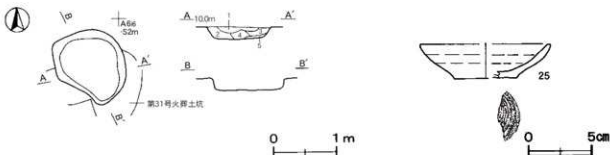
1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量

2 黒色 ロームブロック少量、焼土粒子中量

3 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子中量

4 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量

5 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量



第75図 第11号墓坑・出土遺物実測図

**遺物出土状況** 土師質土器1点(小皿)が覆土中から出土している。

**所見** 骨片や骨粉は検出されていないが、形状や覆土の様相から墓坑と推測される。時期は、出土土器から中世後半に比定できる。

第11号墓坑出土遺物観察表(第75図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
25	土師質土器	小皿	{102}	27	{50}	孫石・石丸・雲母	明褐色	普通	口タロ成形 底部回転糸切り	覆土中	20%

表15 中世墓坑一覧表

番号	位置	長軸(径)方向	平面形	規模(m) 深さ(cm)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	人骨有無	備考 重複関係(古→新)
				長軸(径)×短軸(径)	深さ						
1	A 6 j7	N-2°-E	楕円形	1.02 × 0.71	20	外傾	平坦	人為	古銭、縄文土器	無	
2	B 6 a6	N-45°-W	[隅丸長方形]	(0.80) × 0.80	28	緩斜	平坦	人為	古銭、縄文土器	無	
3	A 6 j7	N-25°-W	[不整形円形]	1.20 × 0.88	20	緩斜	平坦	人為	古銭	有	本跡→SD18, SK320
4	A 6 j7	N-6°-W	不定形	1.40 × 1.19	37	外傾	平坦	人為	古銭、縄文土器	有	
5	A 6 j6	-	不明	(0.7) × (0.7)	-	-	平坦	不明	古銭、縄文土器	有	
6	A 6 h7	-	不明	(2.75) × (1.38)	-	-	平坦	不明	古銭、縄文土器	有	
7	A 6 g5	-	不整形円形	1.40 × 1.24	15~35	外傾	平坦	人為	古銭、縄文土器	有	第41号火葬土坑→本跡
8	A 6 i5	N-38°-W	楕円形	0.60 × 0.52	15	緩斜	平坦	人為	古銭、縄文土器	有	本跡→SK151
9	A 6 h6	N-17°-W	長楕円形	1.20 × 0.64	22	外傾	皿状	人為	古銭、縄文土器	有	
10	A 6 h7	N-17°-W	[長方形]	0.78 × 0.53	22	外傾	皿状	人為	土師質土器	有	本跡→第39号火葬土坑 SK236
11	A 6 i5	N-60°-W	楕円形	1.20 × 1.08	22	外傾	平坦	人為	土師質土器	無	第31号火葬土坑→本跡

## (2) 火葬土坑

火葬土坑の構造は、遺体を火葬した坑を「燃焼部」、空気を取り込む坑を「開口部」ととらえ記述した。なお、後世の遺構の掘り込みによって残存が不良で構造が明らかでないものは、燃焼部に記述した。主軸方向は燃焼部の長軸(径)方向としている。確認された41基のうち、8基については解説し、その他の火葬土坑については、一覧表と実測図を掲載するにとどめる。

### 第1号火葬土坑(第76図)

**位置** 調査区中央部のA6f区、標高9.6mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** T字形である。燃焼部は長軸1.42m、短軸0.66mの長方形で、長軸方向はN-5°-Wである。確認面からの深さは16~34cmで、底面中央部にはビット状の凹みが2か所確認された。壁は外傾して立ち上がっている。開口部は長径0.38m、短径0.32mの楕円形である。確認面からの深さは12cmで、底面は燃焼部に向かって傾斜している。燃焼部及び開口部の底面には、赤変した範囲は確認できていない。

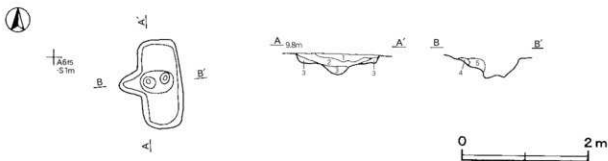
**覆土** 5層に分層できる。レンズ状であるが、焼土粒子や炭化粒子の堆積状況から、埋め戻されている。

#### 土層解説

- |       |                          |       |                          |
|-------|--------------------------|-------|--------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子・骨粉微量 | 3 黒褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量      |
| 2 暗褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量、ロームブロック・骨粉微量 | 4 黒褐色 | 焼土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子中量・骨粉微量 |
|       |                          | 5 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量      |

**遺物出土状況** 燃焼部の覆土中から骨粉が検出されている。ほかに混入した縄文土器片13点も出土している。

**所見** 時期は、遺構の形状から中世に比定できる。



第76図 第1号火葬土坑実測図

## 第3号火葬土坑 (第77図)

**位置** 調査区中央部のA67区、標高9.6mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** T字形である。燃焼部は長軸1.02m、短軸0.45mの長方形で、長軸方向はN-20°-Wである。確認面からの深さは24cmで、底面は凹凸がある。壁は外傾して立ち上がっている。開口部は長径0.54m、短径0.38mの楕円形である。確認面からの深さは12cmで、底面は平坦である。燃焼部及び開口部の底面には、赤変した範囲は確認できていない。

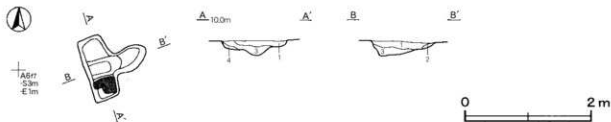
**覆土** 4層に分層できる。焼土粒子や炭化粒子の堆積状況から、埋め戻されている。

## 土層解説

- |       |                        |       |                       |
|-------|------------------------|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・骨粉少量 | 3 黒色  | 炭化粒子多量、骨粉中量、焼土粒子微量、骨片 |
| 2 褐色  | ロームブロック・焼土粒子少量         | 4 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子少量      |

**遺物出土状況** 開口部の覆土中から骨片及び骨粉が検出されている。また、燃焼部南部の覆土中層から炭化材が出土している。ほかに混入した縄文土器片2点も出土している。

**所見** 時期は、遺構の形状から中世に比定できる。



第77図 第3号火葬土坑実測図

## 第4号火葬土坑 (第78図)

**位置** 調査区中央部のA67区、標高9.6mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** T字形である。燃焼部は長軸1.16m、短軸0.42mの隅丸長方形で、長軸方向はN-40°-Eである。確認面からの深さは24cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。開口部は長軸0.34m、短軸0.30mの長方形である。確認面からの深さは10cmで、底面は燃焼部に向かって傾斜している。燃焼部及び開口部の底面には、赤変した範囲は確認できていない。

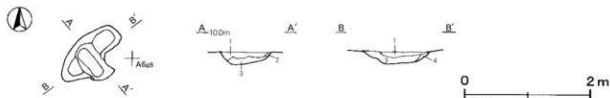
**覆土** 4層に分層できる。ロームブロックを多量に含んでいることから、埋め戻されている。

土層解説

- |        |                              |        |                         |
|--------|------------------------------|--------|-------------------------|
| 1 極暗褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量、骨粉微量 | 3 黒褐色  | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・骨粉少量  |
| 2 黒褐色  | ロームブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量      | 4 極暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子少量・焼土粒子微量 |

遺物出土状況 燃焼部の覆土中から骨粉が検出されている。ほかに混入した縄文土器片2点も出土している。

所見 時期は、遺構の形状から中世に比定できる。



第78図 第4号火葬土坑実測図

第5号火葬土坑 (第79図)

位置 調査区中央部のA6g8区、標高9.6mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第20号溝に掘り込まれている。

規模と形状 T字形である。燃焼部は長軸1.34m、短軸0.50mの隅丸長方形で、長軸方向はN-24°-Wである。確認面からの深さは24cmで、底面は凹凸がある。壁は外傾して立ち上がっている。開口部は長軸0.94m、短軸0.74mの隅丸長方形である。確認面からの深さは36cmで、底面は燃焼部に向かって傾斜している。燃焼部及び開口部の底面には、赤変した範囲は確認できていない。

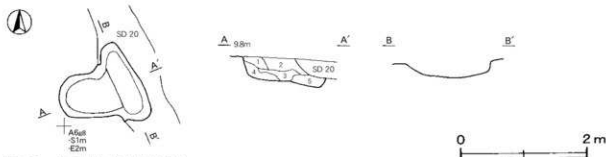
覆土 5層に分層できる。ブロック状に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

- |        |                             |       |                           |
|--------|-----------------------------|-------|---------------------------|
| 1 暗褐色  | ロームブロック中量、炭化物・焼土粒子少量        | 4 褐色  | ロームブロック中量、炭化物・焼土粒子少量      |
| 2 黒褐色  | ロームブロック中量、焼土ブロック・骨粉少量、炭化物微量 | 5 黒褐色 | 炭化物・焼土粒子中量、骨粉少量、ロームブロック微量 |
| 3 極暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物中量、骨粉少量   |       |                           |

遺物出土状況 燃焼部の覆土中から骨粉が検出されている。ほかに混入した縄文土器片9点も出土している。

所見 時期は、遺構の形状から中世に比定できる。



第79図 第5号火葬土坑実測図

第8号火葬土坑 (第80図)

位置 調査区中央部のA6f9区、標高9.6mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** T字形である。燃焼部は長軸1.10m、短軸0.50mの隅丸長方形で、長軸方向はN-42°-Wである。確認面からの深さは24cmで、底面はやや凹凸があり、中央付近が亦変硬化している。壁は外傾して立ち上がっている。開口部は長径0.70m、短径0.56mの楕円形である。確認面からの深さは16cmで、底面はほぼ平坦である。

**覆土** 3層に分層できる。開口部はロームブロックや炭化物を多量に含んでいることから、埋め戻されている。

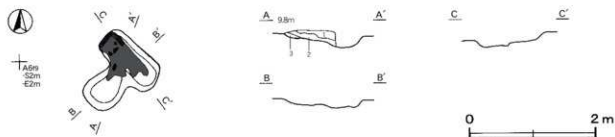
**土層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、炭化物少量  
2 極暗褐色 炭化物中量、ローム粒子・焼土粒子微量

3 褐色 ロームブロック中量

**遺物出土状況** 燃焼部の覆土中から骨粉が検出され、覆土下層から炭化物が多量に出土している。

**所見** 時期は、遺構の形状から中世に比定できる。



第80図 第8号火葬土坑実測図

**第9号火葬土坑 (第81図)**

**位置** 調査区中央部のA69区、標高9.6mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** T字形である。燃焼部は長軸0.82m、短軸0.36mの隅丸長方形で、長軸方向はN-80°-Eである。確認面からの深さは30cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。開口部は長軸0.48m、短軸0.36mの隅丸長方形である。確認面からの深さは14cmで、底面は平坦である。燃焼部及び開口部底面は、炭化粒子や焼土粒子の範囲が認められるものの、硬化はしていない。

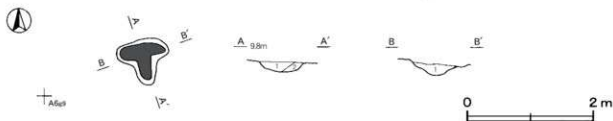
**覆土** 2層に分層できる。炭化物を多量に含んでいることから、埋め戻されている。

**土層解説**

- 1 黒色 炭化物多量、ロームブロック・骨粉少量  
2 黒褐色 炭化物・骨粉中量、ロームブロック・焼土ブロック少量

**遺物出土状況** 覆土中から骨粉が検出されている。

**所見** 時期は、遺構の形状から中世に比定できる。



第81図 第9号火葬土坑実測図

### 第12号火葬土坑（第82図）

**位置** 調査区中央部のA6h8区、標高10.0mの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第259号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** T字形である。燃焼部は長径1.58m、短径0.74mの楕円形で、長径方向はN-2°-Eである。確認面からの深さは28cmで、底面はほぼ平坦である。全体的に炭化粒子の範囲、燃焼部底面の開口部付近には焼土粒子の範囲が認められる。壁は外傾して立ち上がっている。開口部の確認できた長径は0.26m、短径は0.34mの楕円形である。確認面からの深さは32cmで、底面は傾斜している。

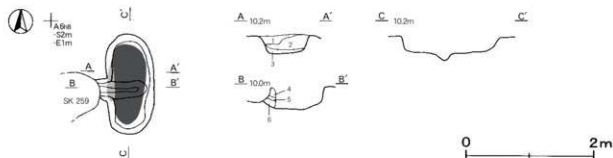
**覆土** 6層に分層できる。全容は明らかでないが、不自然な堆積状況から埋め戻されている。

**土層解説**

- |                                       |                               |
|---------------------------------------|-------------------------------|
| 1 極暗褐色 炭化物少量、ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子・骨粉微量 | 4 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック多量、骨粉微量                  | 5 極暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量    |
| 3 黒褐色 ロームブロック・炭化物・焼土粒子少量、骨粉微量         | 6 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子中量、炭化物微量    |

**遺物出土状況** 覆土中から骨粉が検出されている。ほかに混入した縄文土器片も18点出土している。

**所見** 時期は、遺構の形状から中世に比定できる。



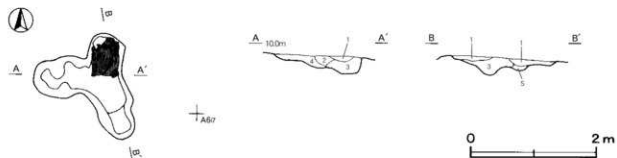
第82図 第12号火葬土坑実測図

### 第15号火葬土坑（第83図）

**位置** 調査区中央部のA6h6区、標高9.8mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** T字形である。燃焼部は長軸1.72m、短軸0.60mの隅丸長方形で、長軸方向はN-15°-Wである。確認面からの深さは24cmで、底面には凹凸がある。壁は外傾して立ち上がっている。開口部は長径0.80m、短径0.60mの楕円形である。確認面からの深さは8~20cmで、底面には凹凸がある。

**覆土** 5層に分層できる。遺構の様相から、使用後に埋め戻されたものとみられる。



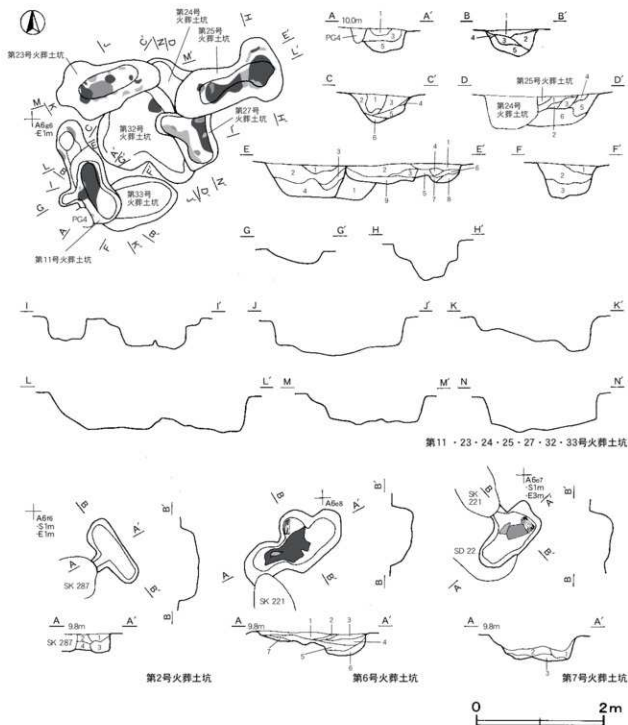
第83図 第15号火葬土坑実測図

土層解説

- |        |                    |       |                       |
|--------|--------------------|-------|-----------------------|
| 1 極暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子・骨粉中量  | 4 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化物少量       |
| 2 黒褐色  | 焼土ブロック・炭化粒子中量、骨粉少量 | 5 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 3 黒色   | 炭化物中量、焼土粒子・骨粉少量    |       |                       |

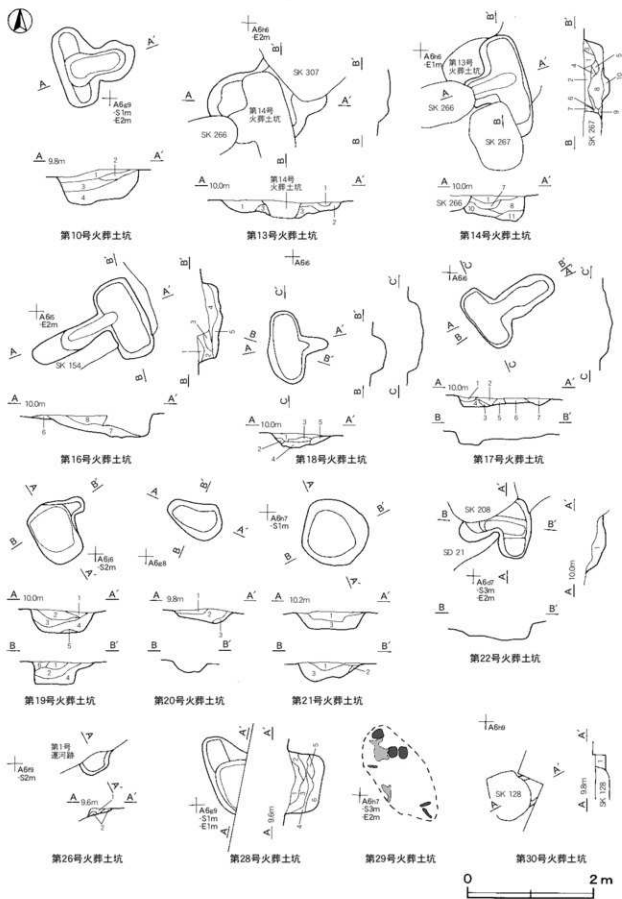
**遺物出土状況** 瓦質土器片1点(不明)が覆土中から出土している。また、燃烧部の覆土中から骨粉が検出されているほか、北部の底面から炭化材が多量に出土している。混入した縄文土器片6点も出土している。

**所見** 時期は、遺構の形状から中世に比定できる。

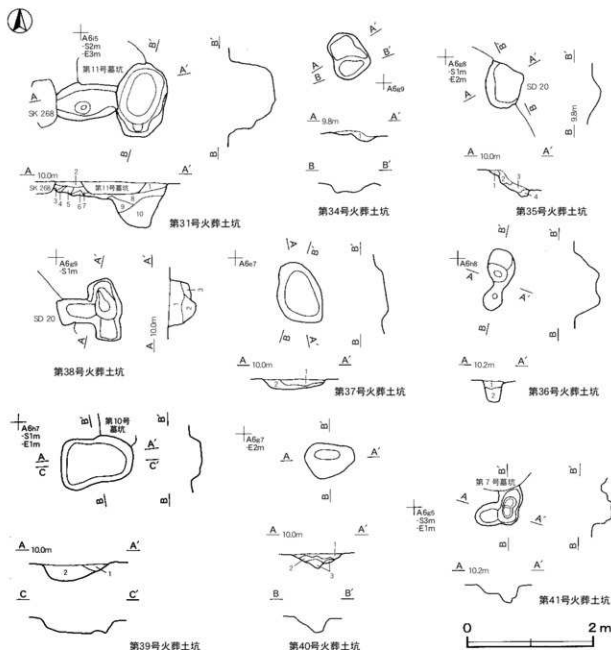


第84図 火葬土坑実測図(1)





第85图 火葬土坑实测图(2)



第86図 火葬土坑実測図(3)

第2号火葬土坑土層解説

- 1 黒 褐色 焼土粒子・骨片多量、炭化物中量
- 2 暗 褐色 炭化粒子中量、ロームブロック少量
- 3 黒 色 骨片多量、炭化粒子中量、ロームブロック少量
- 4 黒 色 炭化粒子中量、ロームブロック、焼土粒子少量

第6号火葬土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量
- 2 灰 褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック、炭化粒子少量
- 3 極 暗 褐色 ロームブロック微量、炭化粒子少量
- 4 黒 褐色 ロームブロック、焼土粒子少量
- 5 極 暗 褐色 ロームブロック、炭化粒子中量
- 6 黒 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量
- 7 暗 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子、炭化粒子少量

第7号火葬土坑土層解説

- 1 灰 褐色 ロームブロック、粘土ブロック、焼土粒子、炭化粒子微量、骨片
- 2 極 暗 褐色 炭化物中量、ロームブロック、焼土粒子、骨粉少量
- 3 暗 褐色 ローム粒子多量

第10号火葬土坑土層解説

- 1 灰 褐色 粘土粒子中量、炭化粒子微量
- 2 にぶい褐色 炭化物、焼土粒子、粘土粒子微量
- 3 暗 褐色 焼土粒子、炭化粒子微量、骨片
- 4 黒 色 炭化材中量、焼土ブロック微量

**第11号火葬土壌土層解説**

- 1 暗 褐 色 粘土粒子少量, ロームブロック, 炭化粒子微量
- 2 極暗褐色 ロームブロック, 焼土粒子, 炭化粒子微量  
骨片
- 3 暗 褐 色 ロームブロック多量
- 4 暗 褐 色 ロームブロック, 焼土ブロック多量, 炭化粒子,  
骨粉微量
- 5 極暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

**第13号火葬土壌土層解説**

- 1 暗 褐 色 ロームブロック中量, 炭化物, 焼土粒子少量
- 2 褐 色 ロームブロック中量, 焼土粒子, 炭化粒子,  
骨粉少量
- 3 黒 褐色 ロームブロック, 炭化粒子中量, 焼土粒子少量  
骨粉微量

**第14号火葬土壌土層解説**

- 1 黒 色 ロームブロック中量, 焼土粒子, 炭化粒子少量
- 2 黒 褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子, 炭化粒子少量
- 3 褐 色 ロームブロック中量, 焼土粒子少量
- 4 暗 褐色 ロームブロック少量
- 5 暗 褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子少量
- 6 黒 色 ロームブロック中量, 焼土ブロック,  
炭化粒子少量
- 7 黒 褐色 ロームブロック, 焼土粒子中量, 炭化粒子少量
- 8 黒 褐色 ロームブロック, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量
- 9 黒 褐色 ロームブロック多量, 焼土粒子, 炭化粒子中量
- 10 黒 褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子, 炭化粒子少量
- 11 黒 色 ロームブロック, 炭化粒子多量  
焼土ブロック少量

**第16号火葬土壌土層解説**

- 1 黒 褐色 焼土粒子中量, ロームブロック, 炭化粒子少量
- 2 黒 褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子, 炭化粒子微量
- 3 暗 褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子, 炭化粒子少量
- 4 褐 色 ロームブロック多量, 焼土粒子, 炭化粒子,  
骨粉少量
- 5 黒 褐色 ロームブロック, 焼土粒子中量, 炭化物少量
- 6 暗 褐色 ロームブロック, 焼土粒子, 炭化粒子少量
- 7 暗 褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子, 炭化粒子微量
- 8 黒 褐色 ロームブロック少量

**第17号火葬土壌土層解説**

- 1 暗 褐色 ロームブロック, 焼土ブロック, 炭化粒子少量
- 2 暗 褐色 ロームブロック, 炭化粒子少量
- 3 暗 褐色 焼土ブロック中量, ロームブロック,  
炭化粒子少量
- 4 黒 褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック, 炭化物少量
- 5 暗 褐色 ロームブロック, 焼土粒子, 炭化粒子少量
- 6 黒 褐色 ローム粒子多量
- 7 黒 褐色 ロームブロック中量

**第18号火葬土壌土層解説**

- 1 暗 褐色 ロームブロック, 炭化物, 焼土粒子少量
- 2 褐 色 ロームブロック中量, 炭化物, 焼土ブロック少量
- 3 黒 色 炭化物多量, 焼土ブロック中量  
ロームブロック少量
- 4 黒 色 炭化物多量, ロームブロック, 焼土ブロック少量
- 5 黒 褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子, 炭化粒子微量

**第19号火葬土壌土層解説**

- 1 極暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 黒 褐色 ロームブロック微量
- 3 黒 褐色 ロームブロック少量
- 4 極暗褐色 ロームブロック少量
- 5 暗 褐色 ロームブロック少量
- 6 暗 褐色 ロームブロック微量

**第20号火葬土壌土層解説**

- 1 黒 褐色 ロームブロック中量, 炭化物, 焼土粒子,  
骨粉少量
- 2 極暗褐色 ロームブロック, 炭化物中量, 焼土粒子,  
骨粉少量
- 3 暗 褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量  
焼土粒子微量

**第21号火葬土壌土層解説**

- 1 黒 褐色 炭化物中量, 焼土ブロック, ローム粒子少量
- 2 暗 褐色 ロームブロック, 焼土粒子, 炭化粒子少量
- 3 暗 褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子, 炭化粒子少量

**第22号火葬土壌土層解説**

- 1 極暗褐色 ローム粒子, 焼土粒子中量, 炭化粒子,  
骨粉少量

**第23号火葬土壌土層解説**

- 1 灰 褐色 ローム粒子, 焼土粒子, 炭化粒子微量
- 2 暗 褐色 ローム粒子多量, 粘土粒子少量, 焼土粒子,  
炭化粒子, 骨粉微量
- 3 暗 褐色 ローム粒子多量, 粘土粒子中量, 炭化粒子微量
- 4 暗 褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子少量
- 5 暗 褐色 ローム粒子, 焼土粒子多量, 骨粉少量  
炭化粒子微量
- 6 極暗褐色 焼土粒子多量, 炭化粒子, 骨粉少量  
ローム粒子, 粘土粒子微量

**第24号火葬土壌土層解説**

- 1 極暗褐色 ロームブロック少量, 骨片

**第25号火葬土壌土層解説**

- 1 黒 褐色 ロームブロック微量
- 2 黒 褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子, 炭化粒子微量
- 3 黒 褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子, 炭化粒子微量
- 4 黒 褐色 ロームブロック少量
- 5 暗 褐色 ロームブロック中量
- 6 極暗褐色 ロームブロック, 炭化粒子微量
- 7 黒 褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子, 炭化粒子微量
- 8 極暗褐色 焼土粒子多量, ロームブロック, 炭化粒子少量  
骨粉微量
- 9 暗 褐色 ロームブロック, 炭化粒子少量, 焼土粒子微量

**第26号火葬土壌土層解説**

- 1 黒 色 炭化物中量, 焼土粒子微量, 骨片
- 2 暗赤褐色 焼土ブロック, 炭化粒子微量

**第27号火葬土壌土層解説**

- 1 極暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子, 骨粉微量
- 2 極暗褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック,  
炭化粒子微量
- 3 暗 褐色 焼土ブロック多量, ロームブロック, 炭化粒子,  
骨粉微量
- 4 極暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子, 炭化粒子微量
- 5 極暗褐色 ロームブロック多量, 焼土ブロック,  
炭化粒子微量
- 6 黒 褐色 ロームブロック中量, 骨粉微量

**第28号火葬土壌土層解説**

- 1 黒 褐色 ロームブロック中量, 粘土ブロック少量  
焼土粒子, 炭化粒子微量
- 2 暗 褐色 ロームブロック, 焼土ブロック, 炭化粒子中量  
骨片
- 3 暗 褐色 炭化物, 焼土粒子中量, ロームブロック少量  
骨片
- 4 灰 褐色 ロームブロック, 焼土粒子, 炭化粒子少量  
骨片
- 5 黒 褐色 炭化物, ローム粒子, 焼土粒子少量, 骨片
- 6 黒 褐色 炭化物中量, ロームブロック, 焼土粒子少量

**第30号火葬土壌土層解説**

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック, ローム粒子少量

**第31号火葬土壌土層解説**

- 1 暗 褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子微量
- 2 黒 褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量
- 3 黒 褐色 ロームブロック中量
- 4 暗 褐色 ローム粒子中量
- 5 暗 褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子少量
- 6 黒 褐色 ロームブロック少量
- 7 暗 褐色 ロームブロック少量
- 8 暗 褐色 ロームブロック多量, 焼土粒子少量
- 9 黒 褐色 ロームブロック中量
- 10 暗 褐色 ロームブロック中量

## 第32号火葬土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 灰褐色 ローム粒子多量

## 第33号火葬土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量、粘土ブロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

## 第34号火葬土坑土層解説

- 1 黒褐色 炭化材中量、ローム粒子・焼土粒子・骨粉少量

## 第35号火葬土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子中量、焼土粒子・骨粉少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子・骨粉中量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量、骨粉中量、炭化粒子少量

## 第36号火葬土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子中量、焼土粒子・骨粉微量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量

## 第37号火葬土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・粘土粒子・骨粉微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量

## 第38号火葬土坑土層解説

- 1 緑褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化物・骨粉微量
- 2 黒褐色 炭化物・焼土粒子中量、ロームブロック・骨粉少量
- 3 黒褐色 炭化物・ローム粒子少量、焼土粒子・骨粉微量

## 第39号火葬土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量、炭化物少量

## 第40号火葬土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化物中量、焼土粒子少量、骨粉微量
- 2 黒褐色 炭化物中量、ロームブロック少量、焼土粒子・骨粉微量
- 3 暗褐色 ロームブロック多量、炭化粒子中量、焼土粒子微量

表 16 中世 火葬土坑一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	燃焼部規模 (m)		開口部規模 (m)		深さ (cm)	覆土	人骨有無	備考	
				長軸面×短軸面	深さ	長軸面×短軸面	深さ					
1	A 6 5	N-5°-W	T字形	1.42 × 0.66	16~34	凹凸	0.38 × 0.32	12	傾斜	人為	有	
2	A 6 6	N-35°-W	T字形	1.10 × 0.40	30	平坦	(0.20) × (0.20)	28	平坦	人為	有	本跡→SK287
3	A 6 7	N-20°-W	T字形	1.02 × 0.45	24	凹凸	0.54 × 0.38	12	平坦	人為	有	
4	A 6 7	N-40°-E	T字形	1.16 × 0.42	24	平坦	0.34 × 0.30	10	傾斜	人為	有	
5	A 6 g8	N-24°-W	T字形	1.34 × 0.50	24	凹凸	0.94 × 0.74	36	傾斜	人為	有	本跡→SD20
6	A 6 e7	N-57°-E	T字形	1.04 × 0.90	34	凹凸	0.54 × 0.54	30	傾斜	人為	無	本跡→SK221
7	A 6 e7	N-45°-E	T字形	1.14 × 0.54	34~42	凹凸	(0.30) × (0.28)	34	平坦	人為	有	本跡→SK221, SD22
8	A 6 f9	N-42°-W	T字形	1.10 × 0.50	24	凹凸	0.70 × 0.56	16	平坦	人為	有	
9	A 6 f9	N-80°-E	T字形	0.82 × 0.36	30	平坦	0.48 × 0.36	14	平坦	人為	有	
10	A 6 g9	N-18°-W	T字形	1.27 × 0.61	42~54	凹凸	0.65 × 0.58	46	平坦	人為	有	
11	A 6 g6	N-2°-W	T字形	1.80 × 0.60	22~34	圓状	0.34 × 0.22	10	傾斜	人為	有	第33号火葬土坑→本跡→PG4
12	A 6 h8	N-2°-E	T字形	1.58 × 0.74	28	平坦	(0.26) × (0.34)	32	傾斜	人為	有	本跡→SK259
13	A 6 h6	-	不定形	1.72 × (1.32)	24	凹凸	-	-	-	人為	有	本跡→第14号火葬土坑, SK266~267
14	A 6 h6	N-13°-W	T字形	1.68 × 0.60	30~40	凹凸	0.46 × 0.40	23	平坦	人為	無	第13号火葬土坑→本跡→SK266・267
15	A 6 h6	N-15°-W	T字形	1.72 × 0.60	24	凹凸	0.80 × 0.60	8~20	凹凸	人為	有	
16	A 6 i5	N-25°-W	T字形	1.30 × 0.58	36	凹凸	1.27 × 0.34	6~28	傾斜	人為	有	本跡→SK154
17	A 6 j6	N-37°-W	T字形	1.05 × 0.50	12~20	凹凸	0.90 × 0.53	6~16	傾斜	人為	無	
18	A 6 j6	N-6°-W	T字形	1.16 × 0.55	20	凹凸	0.40 × 0.31	4~18	傾斜	人為	無	
19	A 6 j5	N-36°-W	L字形	1.00 × 0.70	38	平坦	0.27 × 0.24	16~22	傾斜	人為	無	
20	A 6 f8	N-66°-W	不定形	0.90 × 0.62	22	凹凸	-	-	-	人為	有	
21	A 6 h7	N-40°-W	不整形円	1.10 × 1.06	28	平坦	-	-	-	人為	無	
22	A 6 d7	N-3°-E	[T字形]	0.97 × 0.54	18	平坦	0.60 × (0.33)	12	平坦	人為	有	本跡→SK208, SD21
23	A 6 f6	N-72°-E	不定形	1.66 × 0.58	42~45	平坦	-	-	-	人為	有	第24・32号火葬土坑→本跡
24	A 6 f6	N-30°-W	不定形	(0.64) × (0.50)	42~52	平坦	-	-	-	人為	有	本跡→第23・25・27・32号火葬土坑
25	A 6 f7	N-18°-W	T字形	0.98 × 0.52	30~58	圓状	1.28 × 0.72	58	平坦	人為	有	第24・27号火葬土坑→本跡
26	A 6 f9	-	不明	-	-	-	(0.30) × 0.46	6~10	傾斜	人為	有	本跡→第1号運河跡
27	A 6 g6	N-13°-W	[T字形]	(0.90) × 0.60	48~56	平坦	0.48 × 0.38	-	-	人為	有	第24・32号火葬土坑→本跡→第25号火葬土坑

番号	位置	主軸方向	平面形	燃焼部規模 (m) 深さ (cm)		開口部規模 (m) 深さ (cm)			覆土	人骨 有無	備考 重複関係 (古→新)
				長軸面×短軸面	深さ	底面	長軸面×短軸面	深さ			
28	A 6 g9	N-30°-W	不定形	(1.20) × 0.60	64	平坦	-	-	-	人為	有
29	A 6 h7	-	不定形	(1.72) × (0.84)	-	平坦	-	-	-	人為	無
30	A 6 h9	N-25°-W	不明	(0.22) × (0.50)	22	平坦	-	-	-	不明	無
31	A 6 i5	N-15°-E	T字形	(1.10) × 0.86	70	皿状	(1.06) × 0.55	16~28	傾斜	人為	無
32	A 6 g6	N-28°-W	不定形	1.58 × 1.34	50	平坦	-	-	-	人為	無
33	A 6 g5	N-80°-E	楕円形	(0.90) × 0.77	53	平坦	-	-	-	人為	無
34	A 6 f8	N-30°-W	楕円形	0.72 × 0.52	12	凹凸	-	-	-	人為	有
35	A 6 g8	N-65°-W	不明	(0.76) × (0.54)	40	-	-	-	-	人為	有
36	A 6 h8	N-20°-E	不定形	0.97 × 0.20	34	皿状	0.40 × 0.32	36	皿状	人為	有
37	A 6 e7	N-32°-W	楕円形	1.06 × 0.70	16	平坦	-	-	-	人為	有
38	A 6 g9	N-13°-E	T字形	1.00 × 0.45	42	凹凸	0.50 × 0.42	-	平坦	人為	有
39	A 6 h7	N-80°-E	楕円形	1.17 × 0.70	52	平坦	-	-	-	人為	有
40	A 6 g7	N-86°-E	楕円形	0.80 × 0.60	12~24	皿状	-	-	-	人為	有
41	A 6 g5	N-5°-W	L字形	(0.58) × 0.38	28	平坦	0.36 × 0.36	14	平坦	不明	無

### 3 近世の遺構と遺物

近世の遺構は、墓坑1基、土坑1基、運河跡1条が確認されている。以下、それぞれの遺構の特徴と出土した遺物について記述する。

#### (1) 墓坑

##### 第12号墓坑 (第87図)

**位置** 調査区南部のA6j4区、標高10.0mの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第148号土坑に掘り込まれている。

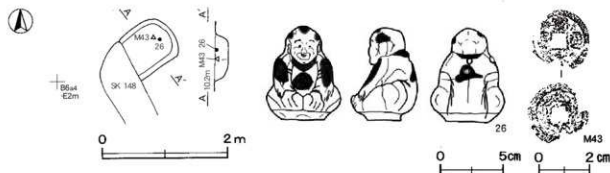
**規模と形状** 確認できた長軸は0.80mで、短軸0.71mの隅丸長方形と推定され、主軸方向はN-20°-Eである。確認面からの深さは20cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

**覆土** 単一層である。ロームブロックを多量に含んだ土で埋め戻されている。

#### 土層解説

1 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量、骨片

**遺物出土状況** 磁器1点(水滴)、古銭1点(寛永通寶)、鉄製品1点(釘)が出土し、骨片も覆土中から検出されている。26・M43は確認面からの出土である。ほかに混入した縄文土器6点も出土している。



第87図 第12号墓坑・出土遺物実測図

**所見** 骨片や副葬品とみられる磁器の水滴、古銭が出土していることから墓坑とみられる。時期は、出土した古銭から近世に比定でき、さらに磁器の水滴から18世紀代と推測される。

### 第12号墓坑出土遺物観察表（第87図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	胎土 胎土色	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
26	磁器	水滴	7.4	5.9	5.2	緻密 灰白	灰白	良好	右肩・後頭部穿孔 唐子形入形	確認面	肥前系 100% PL18

番号	銭名	径	孔幅	重量	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
M43	寛永通寶	2.30	0.70	(1.70)	1636	銅	古寛永 無背	確認面	

#### (2) 土坑

近世の土坑は1基が確認されている。以下、遺構及び遺物について記述する。

### 第31号土坑（第88・89図）

**位置** 調査区南部のA6h4区、標高10.0mの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第311号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 調査区域外へ延びており、確認できた長軸は2.92mで、短軸2.20mの不定形と推測される。北東部、南部及び中央部の3か所には、底面が平坦な平場があり、さらにその中央部には、楕円形の凹みが確認された。確認面からの深さは北東部、南部が40cm、中央部が48cm、楕円形の凹み底面が84cmで、中心に向かって階段状に落ち込んでいる。

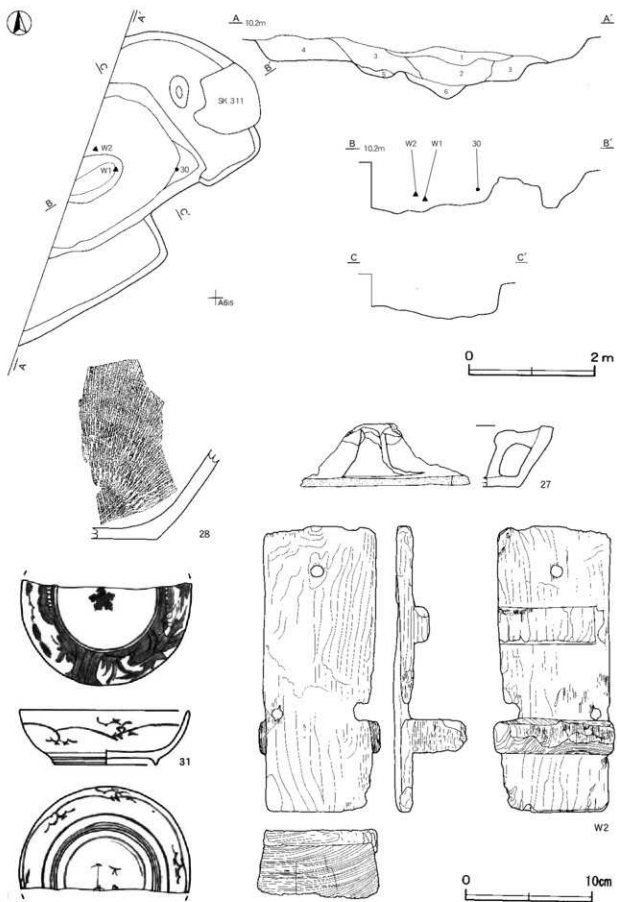
**覆土** 6層に分層できる。粘土ブロックを多量に含んだ土で埋め戻されている。堆積状況からは、第6層が別の遺構ととらえることもできるが、含有物がほかの層と類似しており、同一の遺構のものであるととらえた。

#### 土層解説

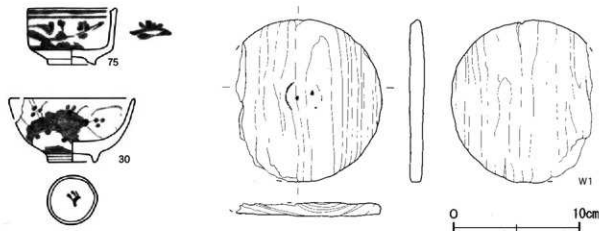
- |        |                               |        |                                |
|--------|-------------------------------|--------|--------------------------------|
| 1 灰 褐色 | 粘土ブロック多量、ロームブロック少量<br>炭化材微量   | 4 褐色   | ロームブロック・粘土ブロック多量、砂粒微量          |
| 2 褐 灰色 | 粘土ブロック多量、ロームブロック・炭化材・<br>砂粒微量 | 5 暗 褐色 | ロームブロック多量、粘土ブロック・炭化粒子・<br>砂粒微量 |
| 3 褐 灰色 | 粘土ブロック多量、ロームブロック・炭化材微量        | 6 灰 褐色 | 粘土ブロック多量                       |

**遺物出土状況** 土師質土器片25点（焙烙22、小皿3）、瓦質土器片7点（焙烙）、肥前系磁器片35点（碗27、瓶7、香炉1）、瀬戸・美濃系磁器片8点（碗7、徳利1）、産地不明磁器片1点（紅皿）、瀬戸・美濃系陶器片63点（碗19、皿5、灯明受皿1、鉢31、香炉7）、明石・堺系陶器片1点（播鉢）、石器5点（砥石）、木製品15点（漆器碗7、蓋1、下駄1、不明6）のほか、種子27点（桃<sup>2</sup>）、軽石17点、板碑片4点、不明鉄製品8点、木材12点、瓦13点、ガラス玉1点も出土している。出土した陶磁器類の総重量は、土師質土器片1317.1g、瓦質土器片266.0g、磁器片1631.0g、陶器片2286.7gである。土器類のほとんどは細片で図示できないが、広範囲にわたる覆土中層から主に出土している。30は東コーナー付近の覆土中層、W1・2は中央部の覆土中層から下層にかけて出土している。木製品は図示したもののほかに、長さ50cmほどの竹材や板状の木材が覆土上層から出土している。これらの使用痕跡は明確でないが、何らかの目的で使用した後に廃棄されたものとみられる。瀬戸・美濃系磁器も出土しているが、本跡に混入したものであり、伴うものではない。

**所見** 本跡は、陶磁器や木製品の出土状況から不要品の廃棄場とみられ、不定形な平面形や覆土の様相からは複数の掘り返しが想定される。平坦な底面の状況からは、3基の土坑が重複していることも推測できるが、出土遺物に時期差がないため明確でない。時期は、出土した陶磁器から19世紀前半に比定できる。



第88图 第321号土坑·出土遺物実測図



第89図 第321号土坑出土遺物実測図

第321号土坑出土遺物観察表(第88・89図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	胎土色	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
27	土師質土器	焙烙	-	(4.8)	-	長石・石英	黒	普通	普通	耳部摩耗	覆土中	5%
28	陶器	播鉢	-	(7.2)	-	長石・石英	暗赤褐	普通	普通	1単位6条以上の播目	覆土中層	明石・堺系 5%
30	磁器	中碗	(9.9)	5.1	3.8	緻密	灰白	灰白	良好	外面雪輪梅樹文 高台一重円	覆土中	肥前系 50%
31	磁器	小皿	13.4	4.3	8.0	緻密	灰白	灰白	良好	内面草花文 見込み五弁花 外面唐草	覆土中	肥前系 50% PL17
75	磁器	香炉	6.8	4.5	3.7	緻密	灰白	灰白	良好	外面草花文 高台際・見込み無輪	覆土中	肥前系 50% PL18

番号	器種	長さ・径	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
W1	蓋	12.9 (11.6)	1.2	(104.1)	-	-	中央部焼印。柘目材	覆土下層	80%
W2	下駄	22.7	9.7	5.8	(255.0)	-	透歯下駄 方形 高台削り出し 柘目材	覆土中層	80% PL15

## (3) 運河跡

今回の調査で確認された運河跡は、調査開始時には1区と呼ぶ直線状の溝状遺構と、2区と呼ぶ先端部にあたる不明遺構に分けられていたが、それぞれが調査区域外に延びていたため、茨城県教育委員会が1・2区の間部にあたる3区の試掘調査及び確認調査を行った。その結果、1・2区の遺構はL字状に屈曲してつながることが判明した。このうち、当遺跡の性格を考えるうえで必要な先端部にあたる2区についてのみ平面図を掲載し、直線状の1区及びL字状に屈曲している3区の平面図は、略図及び遺構全体図で掲載する。

## 第1号運河跡(第90~97図)

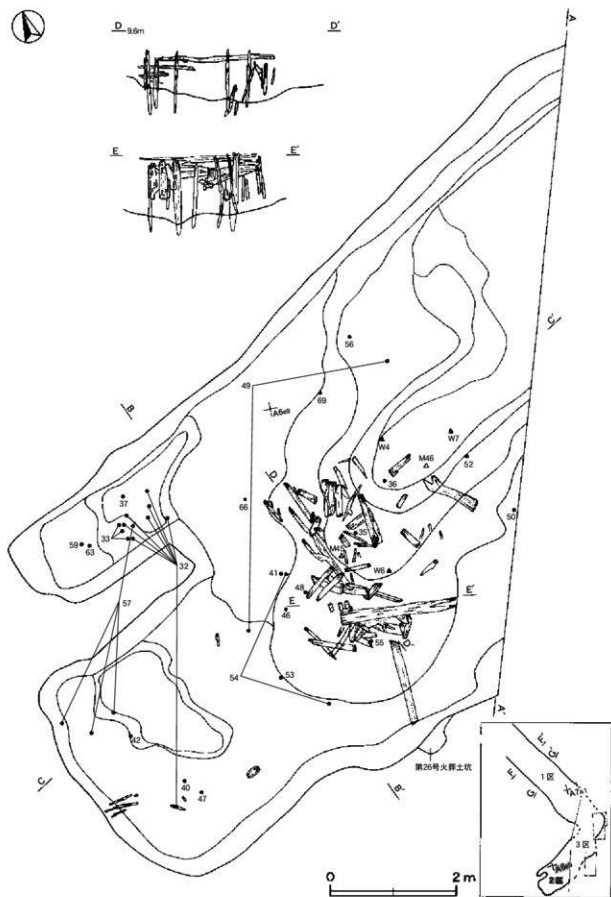
**位置** 調査区北部のA6e9区、標高9.8mの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第26号火葬土坑を掘り込んでいる。

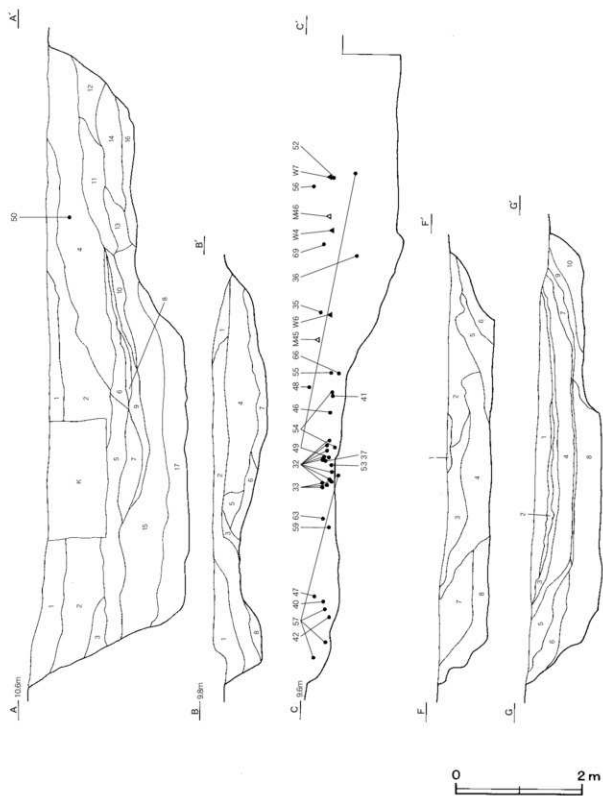
**規模と形状** 本跡の北東部が調査区域外へ延びているため、全容は明らかでないが、運河全体の長さが40mほどを確認した。運河北部にあたる1区は、南東から北西方向(N-30°-W)に直線状に延びている。確認できた長さは24.0m、上幅6.3~8.0m、下幅3.1~5.1mで、確認面からの深さは、74~120cmである。東岸の一部は底面から30cmほど高い階段状であるが、断面はほぼ逆台形状で、底面は平坦である。

運河南部にあたる2区は先端部にあたり、北東方向(N-50°-E)へ緩やかに落ち込んでいる。確認できた





第90图 第1号運河跡実測圖(1)



第91図 第1号運河跡実測図(2)

長さは13.0m、上幅6.7mである。下幅は最大幅6mほどで、杭列に向かって幅0.9m、長さ3mほどの長方形の底面があり、全体の平面形は凸状である。確認面からの深さは、最大で105cmである。南壁が有段状であるが、断面はほぼ逆台形状で、底面は平坦である。先端部に向かって緩やかに立ち上がったところに2か所の平場が設けられている。

**平場** 2区の先端部に2か所確認された。北側の平場は、確認できた長軸が2.75m、短軸1.50mの長方形である。確認面からの深さは35cmほどで、運河に向かって階段状に落ち込んでいる。南西側の平場は、確認できた長軸が3.88m、短軸3.74mの方形である。確認面からの深さは25cmで、底面は中央付近に凹みがややあるものの、ほぼ平坦である。また2か所の平場及び先端部付近から多量の陶磁器が出土しており、平場と運河の遺物が接合関係にあることから、運河に付設された平場とみられる。

**杭列地点** 2区に2か所の杭列が確認されている。この杭列は運河の浅瀬に位置しており、運河に付設されたものとみられる。先端部にほぼ平行な杭列Dは、残存している杭列幅が2.0mで、丸材や板材など16本ほどの木材を確認している。杭列Aと鈍角に交差している杭列Eは、残存している杭列幅が2.36mで、丸材や板材など25本の木材を確認している。杭列D・Eともに杭の径は10～20cm、長さが1mほどのものを使用している。さらに杭上部から長さ3.5mほどの丸材が出土しているほか、板橋と推測される縦方向や横方向の板材が多量に出土している。

**覆土** 1・2区ともに土層観察用ベルトを2か所ずつ設定した。1区は8層(F-F')、10層(G-G')に分層できる。砂粒や粘土粒子を多量に含んだ青灰色系の土で埋め戻されている。断面が有段状であるが、覆土の堆積状況からは掘り直しの痕跡は見当たらない。2区は17層(A-A')、8層(B-B')に分層できる。ロームブロックや粘土粒子を含んだ褐色系の土で埋め戻されている。なお、3区の覆土は確認調査で1区と同様の色調が確認されている。

#### 土層解説 A-A'

- 1 灰褐色 ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 2 褐色 ロームブロック・粘土ブロック中量、砂粒少量
- 3 灰黄褐色 ロームブロック・粘土ブロック中量
- 4 にぶ黄褐色 粘土粒子中量、ロームブロック少量
- 5 暗褐色 ロームブロック・粘土粒子中量
- 6 褐色 粘土粒子中量、ロームブロック少量
- 7 暗緑褐色 粘土粒子多量、ローム粒子微量
- 8 灰褐色 粘土粒子多量、ローム粒子微量
- 9 黒褐色 ローム粒子・粘土粒子少量
- 10 黒褐色 粘土ブロック中量、粘土粒子少量
- 11 灰黄褐色 ロームブロック中量、粘土粒子少量
- 12 暗褐色 ロームブロック中量、粘土粒子少量
- 13 褐色 粘土ブロック中量、ローム粒子少量、炭化物微量
- 14 褐色 ロームブロック・粘土粒子少量
- 15 にぶ黄褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック少量
- 16 褐色 粘土粒子中量、ローム粒子少量、炭化物微量
- 17 黒褐色 粘土粒子多量、ローム粒子・砂粒微量

#### 土層解説 B-B'

- 1 灰褐色 ロームブロック中量、粘土ブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック・粘土ブロック中量
- 3 灰褐色 粘土粒子中量、ロームブロック少量
- 4 黄褐色 粘土粒子多量、ロームブロック少量
- 5 黄褐色 ローム粒子・粘土粒子中量
- 6 褐色 粘土粒子多量、ローム粒子少量
- 7 灰黄褐色 粘土粒子多量、ローム粒子微量
- 8 褐色 ローム粒子・粘土粒子中量

#### 土層解説 F-F'

- 1 黄褐色 粘土ブロック多量
- 2 青褐色 粘土ブロック多量、鉄分中量
- 3 明黄褐色 砂粒多量、粘土ブロック中量
- 4 暗青灰色 砂粒・粘土ブロック多量
- 5 緑褐色 粘土ブロック多量
- 6 暗青灰色 粘土ブロック多量
- 7 暗青褐色 粘土ブロック中量
- 8 黄褐色 砂粒多量

#### 土層解説 G-G'

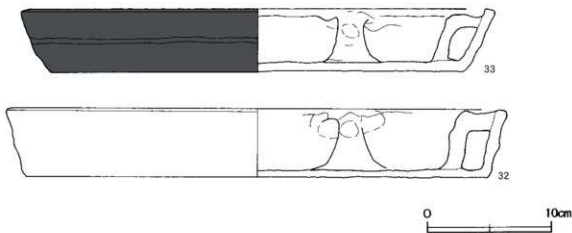
- 1 青褐色 粘土粒子多量、ロームブロック少量
- 2 青褐色 砂粒多量、粘土粒子少量
- 3 明青褐色 粘土粒子多量
- 4 緑褐色 粘土粒子多量
- 5 暗青褐色 砂粒多量、粘土粒子少量
- 6 黒褐色 粘土粒子多量、ローム粒子中量
- 7 暗青褐色 粘土粒子・砂粒多量
- 8 青褐色 粘土粒子多量、鉄分中量
- 9 灰褐色 粘土粒子多量
- 10 黒褐色 粘土粒子多量、ロームブロック少量

**遺物出土状況** 1区からは、明石・堺系陶器片1点(播鉢)、肥前系磁器片3点(碗2、紅猪口1)、瀬戸・美濃系磁器片8点(碗2、皿6)、産地不明磁器片1点(皿)、鉄製品3点(鎌1、不明2)、木製品4点(蓋1、不明3)のほか、瓦3点、煉瓦1点、不明ガラス製品4点、流れ込んだ縄文土器片3点も出土している。陶磁

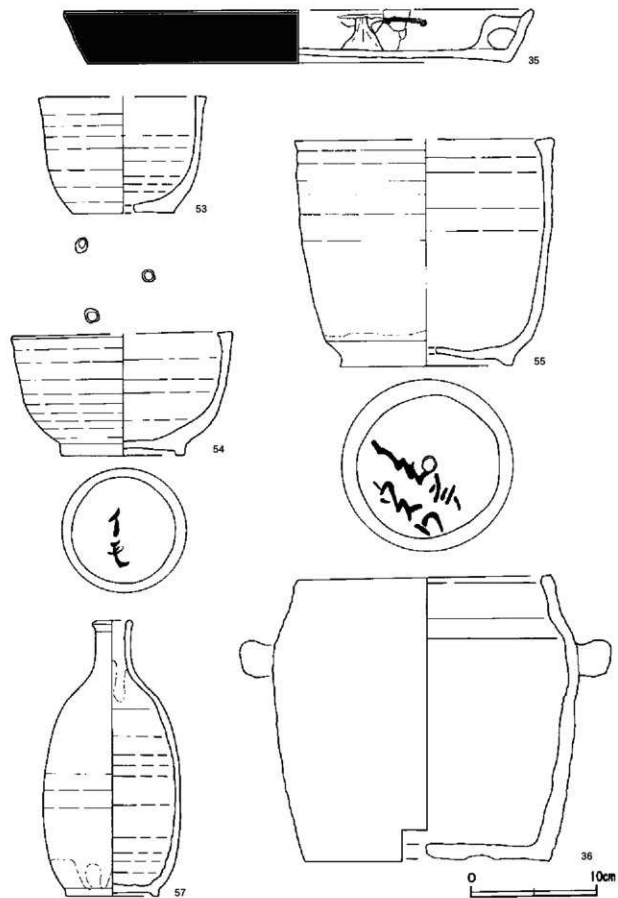
器はすべて細片で図示できないが、覆土中からの出土である。これらは、近世後半とみられるもののほかに近代に比定できるものと混在している。木製品は、W8が覆土中から出土しているほか、「茨城県猿島郡五霞村幸主□□□□」と墨で記された近代以降の箱形木製品の一部分とみられる板材も覆土中から出土している。

2区からは、土師質土器片253点（小皿13、焙烙25、焼塩壺1、鉢2、五徳3、不明9）、瓦質土器片66点（焙烙48、鉢6、火入1、不明11）、肥前系磁器片193点（碗169、紅猪口1、皿18、蓋2、瓶2、水滴1）、瀬戸・美濃系磁器片34点（碗21、蓋1、皿5、瓶1、仏飯器2、香炉1、水滴3）、瀬戸・美濃系陶器片260点（碗169、蓋2、皿15、紅皿1、菊皿1、灯明皿8、灯明台2、壺6、瓶1、鉢25、徳利8、片口1、搦鉢3、鬘皿1、香炉4、不明13）、明石・堺系陶器片20点（搦鉢）、産地不明磁器片30点（碗類26、瓶4）、土製品5点（ミニチュア人形1、ミニチュア犬1、羽口1、不明2）、石器・石製品16点（砥石13、火打ち石1、硯2）、鉄製品15点（釘5、鎌1、火箸1、不明8）、銅製品13点（煙管9、銅板1、不明3）、木製品23点（漆器桶3、蓋3、下駄5、杵状製品1、漆器片2、不明9）、のほか、種子17点（桃8、銀杏1、不明8）、貝22点（シジミ13、ハマグリ6、カワニナ<sub>g</sub>1、アサリ1、不明1）、剥片3点、板碑片12点、礎69点、瓦31点、ガラス製品1点（不明）も出土している。また、数量は明確でないが、杭列に使用したものとみられる板材、竹材、杭、丸太も出土している。出土した陶磁器類の総重量は、磁器片7660.0g、陶器片19838.0g、土師質土器片16129.0g、瓦質土器片6608.8gである。遺物は先端部の覆土上層や2か所の平場から出土しており、大半は破片であるが、ほぼ完形の碗類も出土している。出土している瀬戸・美濃系磁器片の文様は、近代以降の様相を示しており、混入したものである。32は北部平場と南部平場から出土した破片が接合しているほか、49は南部平場と先端部から出土した破片が接合していること、さらに杭列より下のレベルで出土した先端部と平場の遺物には時期差が認められないことから、2区全体が埋め戻される際に廃棄されたものとみられる。

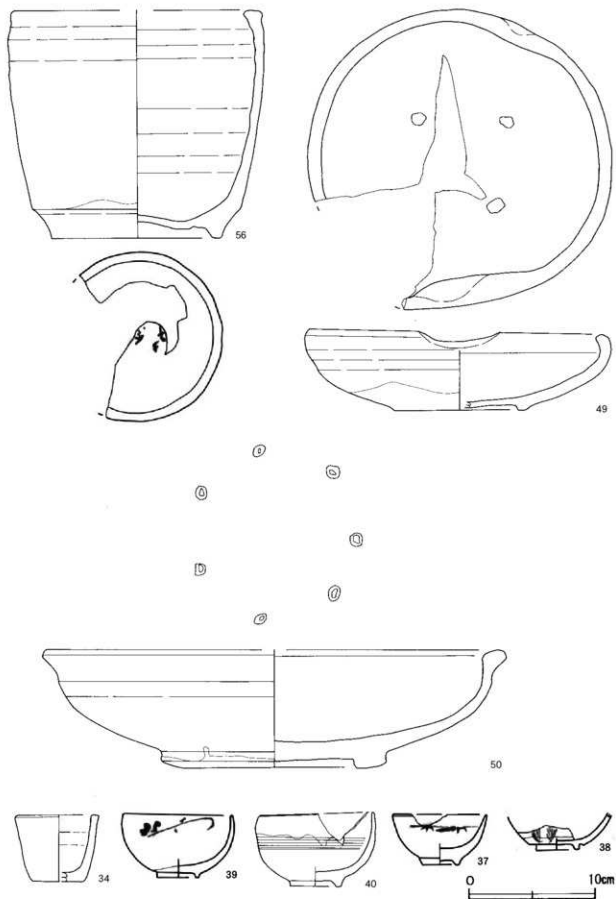
**所見** 2区の運河が機能を終えた時期は、出土した陶磁器から19世紀前半に比定できる。先端の浅瀬に杭列が構築され、その付近の底面が長方形状を呈することから、船着場跡と推測される。1区は、近代以降とみられる磁器や木製品が出土していることから、19世紀末にも機能していたものとみられ、2区とは異なる時期に埋め戻されている。この埋め戻しの詳細な範囲は明確でないが、3区には1区と同様とみられる青灰色系の覆土が確認されていることから、1・3区は同時期に埋め戻されたことが推測される。



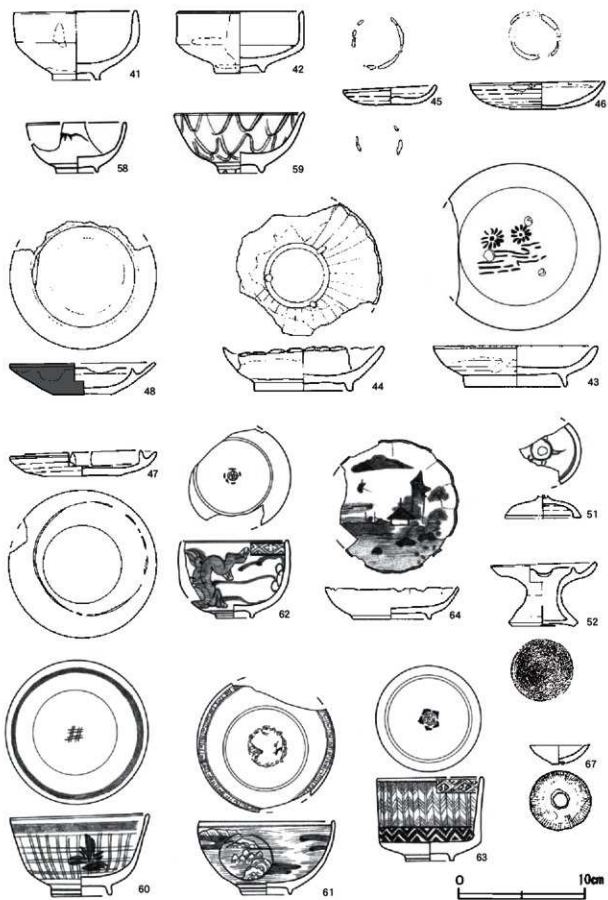
第92図 第1号運河跡出土遺物実測図(1)



第93図 第1号運河跡出土遺物実測図(2)



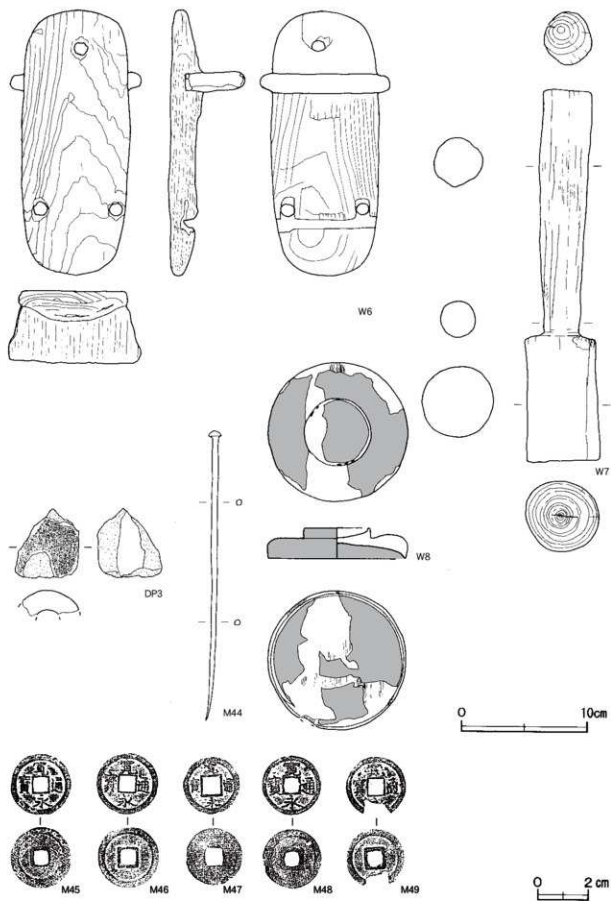
第94図 第1号運河跡出土遺物実測図(3)



第95图 第1号運河跡出土遺物実測図(4)







第97図 第1号運河跡出土遺物実測図(6)

第1号運河跡出土遺物観察表(第92~97図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	胎土色	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
32	土師質土器	焙烙	38.6	5.4	36.4	長石・石英	灰黄褐	普通	普通	口縁部4か所と底部6か所に修繕孔	平塚遺土層 90% PL14	
33	土師質土器	焙烙	36.0	5.0	32.8	長石・赤色粒子	橙	普通	普通	外面煤付着 底部に修繕孔2か所	平塚遺土層 70%	
34	土師質土器	焼塩壺	5.5	5.3	4.0	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	普通	楕形 ロウコ成形 底部調整不明	覆土中	80% PL16
35	土師質土器	焙烙	4.2	4.2	(33.4)	長石・石英	灰	普通	普通	外面煤付着 底部に修繕孔2か所 口縁部1か所に調整による修繕痕	平塚遺土層	60% PL14
36	陶器	火入	30.0	(22.8)	19.2	長石・石英 灰	黄灰	普通	普通	把手1か所欠損 植木鉢転用	平塚遺土層	90% PL14
37	陶器	小碗	7.4	3.9	2.9	細砂 灰白	灰白	良好	良好	外面笹文	平塚遺土層	90% PL14
38	陶器	小碗	-	(2.8)	3.3	細砂 灰白	灰白	良好	良好	外面若松文 削り出し高台	覆土中	90% PL16
39	陶器	小碗	8.5	5.0	3.3	細砂 灰白	灰白	良好	良好	外面草花文	覆土中	90% PL16
40	陶器	小碗	8.8	5.9	4.0	細砂 灰	灰	良好	良好	外面草花文	平塚遺土層	90% PL16
41	陶器	中碗	9.4	5.5	3.8	細砂 灰白	灰白	良好	良好	灰輪 磨折碗	平塚遺土層	90% PL16
42	陶器	中碗	9.8	4.8	3.9	細砂 褐	灰黄	良好	良好	灰輪 磨折碗	平塚遺土層	90% PL16
43	陶器	小皿	13.0	3.3	8.0	細砂 灰白	灰白	良好	良好	見込み磨給着水 トチン痕	覆土中	90% PL17
44	陶器	小皿	(12.6)	3.4	7.8	細砂 灰	灰	良好	良好	菊裏 トチン痕	覆土中	90% PL17
45	陶器	灯明皿	7.3	1.6	3.2	細砂 明褐	明褐	普通	普通	錯輪 輪トチン痕	覆土中	90% PL16
46	陶器	灯明皿	10.6	2.2	3.9	細砂 暗褐	暗褐	普通	普通	錯輪 口縁部油懸付着 輪トチン痕	平塚遺土層	90% PL16
47	陶器	灯明受皿	11.7	2.0	6.0	細砂 暗褐	暗褐	普通	普通	錯輪 油溝切立状 底部同転余切り 外面輪トチン痕	平塚遺土層	90% PL16
48	陶器	灯明受皿	11.5	2.5	4.7	細砂 黄褐	黄褐	普通	普通	内面灰輪 油溝切立状 外面煤付着	平塚遺土層	90% PL16
49	陶器	中皿	23.2	6.5	(10.4)	細砂 浅黄	浅黄	良好	良好	水盤 トチン痕	平塚遺土層 90% PL17	
50	陶器	大皿	(36.0)	9.3	17.7	細砂 浅黄	浅黄	良好	良好	折縁皿 トチン痕	覆土中	90% PL17
51	陶器	蓋	(5.9)	(1.7)	-	細砂 灰白	灰白	良好	良好	つまみ欠損	覆土中	90% PL16
52	陶器	灯明受皿	8.3	5.1	4.9	細砂 にぶい黄	にぶい黄	良好	良好	容器つき 立盤形	平塚遺土層	90% PL16
53	陶器	甕	(11.7)	3.3	8.0	細砂 明黄褐	明黄褐	普通	普通	外面灰輪 植木鉢転用	覆土中	90% PL17
54	陶器	甕	(17.1)	9.8	9.8	細砂 明黄褐	明黄褐	普通	普通	外面灰輪 底部内面トチン痕 高台内側書「イモ」	平塚遺土層	90% PL18
55	陶器	甕	(20.5)	18.1	13.6	細砂 にぶい黄	にぶい黄	普通	普通	外面灰輪 植木鉢転用 高台内側 書「三ツツケ ウタ」	平塚遺土層	90% PL18
56	陶器	甕	(19.4)	18.0	(13.4)	細砂 にぶい黄	にぶい黄	普通	普通	外面灰輪 高台内側書不明	平塚遺土層	90% PL18
57	陶器	徳利	2.4	21.8	7.2	細砂 浅黄	浅黄	良好	良好	船輪 ロウコ成形	平塚遺土層 90% PL18	
58	磁器	小碗	7.8	4.0	3.2	緻密 灰白	灰白	良好	良好	外面笹文 高台際にて二重円	覆土中	肥前系 70%
59	磁器	中碗	10.2	4.7	3.5	緻密 灰白	灰白	良好	良好	内外面二重線目文 高台際にて二重円	平塚遺土層	肥前系 90% PL16
60	磁器	中碗	11.0	6.5	4.6	緻密 灰白	灰白	良好	良好	外面格子目・草文 高台にて二重円 見込み一重円内に井げた	覆土中	肥前系 100% PL16
61	磁器	中碗	10.6	5.9	3.8	緻密 灰白	灰白	良好	良好	外面山水文 高台にて二重円 口縁 部内書文 見込み松竹梅散らし	覆土中	肥前系 90% PL16
62	磁器	小碗	(8.4)	6.2	2.9	緻密 灰白	灰白	良好	良好	外面格子 高台にて二重円 口縁部内側 書 見込み一重円内に五弁花	覆土中	肥前系 60%
63	磁器	小碗	8.1	6.7	3.8	緻密 灰白	灰白	良好	良好	外面羽形刺 高台にて一重円 口 縁部内側書 見込み五弁花	平塚遺土層	肥前系 100% PL16
64	磁器	小皿	10.4	2.5	6.0	緻密 灰白	灰白	良好	良好	山水文	覆土中	肥前系 90% PL17
65	磁器	蓋	3.8	2.6	(9.8)	緻密 灰白	灰白	良好	良好	外面山水文 つまみ部二重円・柄 外面雷文 見込み松竹梅散らし	覆土中	肥前系 50% PL16
66	磁器	小皿	13.5	3.9	7.7	緻密 灰白	灰白	良好	良好	内面草文 見込みフシニヤク印判 草文 外面雷文 高台にて二重円 高台内側書	平塚遺土層	肥前系 90% PL17
67	磁器	紅皿	4.6	1.6	1.2	緻密 灰白	灰白	良好	良好	型押し	覆土中	肥前系 100% PL18
68	磁器	蓋	(3.7)	2.7	(9.6)	緻密 灰白	灰白	良好	良好	外面山水文 高台にて一重円 内面雷文 見込み松竹梅散らし	覆土中	肥前系 20%
TP19	土師質土器	焙烙	-	-	(6.5)	長石・雲母	にぶい橙	普通	普通	底面に不明押印	覆土中	5%
TP20	土師質土器	焙烙	-	-	(10.2)	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	普通	底面に菊形押印	覆土中	5%
TP21	陶器	襷鉢	-	(6.1)	-	長石・石英	明赤褐	普通	普通	1単位8条以上の襷目	覆土中	5%
TP22	陶器	襷鉢	-	(12.8)	-	長石・石英	灰赤	普通	普通	1単位11条以上の襷目	覆土中	5%

番号	器種	口径	器高	底径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
W3	漆器碗	-	(2.6)	5.4	(46.0)	ブナ属	内外面朱 高台内つる。	覆土中	50% PL15
W4	漆器碗	-	(5.5)	7.8	(169.3)	ブナ属	外面黒 内面朱	平塚遺土層	90% PL15
W5	漆器碗	-	6.3	5.8	(210.0)	-	内外面朱 重み顯著 高台内マルヨシ仕入	覆土中	50%
W8	漆器蓋	11.0	2.5	5.2	(82.5)	-	内外面朱	1区覆土中	90%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
69	水滴	100	6.4	3.3	-	-	豆彫彫 菊窪文 底部布目 粘土色灰内 構成良好	谷部覆土層	肥前県 100% PL18
DP3	羽口	(5.5)	(5.0)	(20)	(37.8)	粘土・スサ	先端部のみで両端欠損 外面は青灰色	覆土中	5%
M44	火箸	23.0	1.0	0.5	22.2	鉄	頭部球形 断面円形	覆土中	100%
W6	下駄	21.0	10.5	6.1	(311.0)	朽葉モクレン属	差歯下駄 隅丸形 柀目材	谷部覆土層	90% PL15
W7	片状木製品	29.5	5.9	5.6	(465.0)	-	下端スタンプ状に削り出し	谷部覆土層	100% PL15

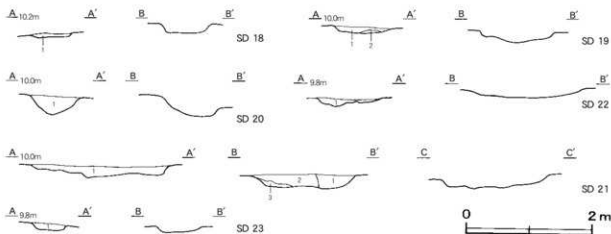
番号	銭名	径	孔幅	重量	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
M45	寛永通寶	2.45	0.61	2.18	1697	銅	新寛永 無背	谷部覆土層	
M46	寛永通寶	2.44	0.66	2.12	1697	銅	新寛永 無背	谷部覆土層	
M47	寛永通寶	2.26	0.70	2.10	1697	銅	新寛永 無背	覆土中	
M48	寛永通寶	2.35	0.60	2.40	1636	銅	古寛永 無背	覆土中	
M49	寛永通寶	2.40	0.67	2.16	1697	銅	新寛永 無背	覆土中	

#### 4 その他の遺構と遺物

遺物が出土していないことなどから時期を決定できない遺構として、溝跡6条、井戸跡5基、土坑129基、ピット群7か所が存在する。いずれも遺構に伴う出土遺物がないことなどから、時期は不明である。以下、それらの遺構については実測図と一覧表を掲載する。

##### (1) 溝跡 (第98図)

今回の調査で、確認された溝跡6条の規模については一覧表で、土層断面図と土層解説については遺構順に掲載し、平面図については遺構全体図で掲載する。



第98図 溝跡断面実測図

##### 第18号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・粘土粒子少量

##### 第19号溝跡土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量  
炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量・炭化粒子微量

##### 第20号溝跡土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック少量

##### 第21号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、粘土粒子微量

##### 第22号溝跡土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子微量

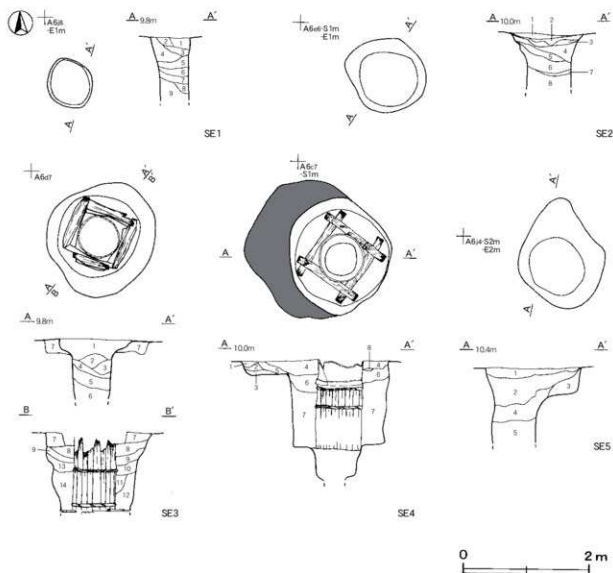
##### 第23号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

表 17 その他の溝跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模 (m) 深さ (cm)				断面形	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係 (古→新)
				確認長	上幅	下幅	深さ						
18	B 6 a3 ~A 6 j	N-87°-E	直線	(16.50)	0.38~0.78	0.22~0.57	10	U字状	横斜	平坦	人為	縄文土器、古銭、銅片	SI3、第3号墓址、SK133・136・145・148・281・313・319→本跡→PG3
19	A 6 e7 ~A 6 gB	N-85°-W	直線	(4.92)	0.72~1.14	0.10~0.62	10~16	浅いU字状	横斜	平坦	人為	縄文土器、板押印、銅片	本跡→SK198、SD20
20	A 6 e8 ~A 6 gB	N-37°-W	直線	(4.52)	0.62~0.90	0.35~0.50	30	U字状	横斜	平坦	人為	縄文土器、板押印、銅片	墓5・25・38号大塚土坑、SC19→本跡
21	A 6 e8 ~A 6 e6	N-57°-E	直線	(9.43)	1.22~2.33	1.08~1.74	12~18	浅いU字状	横斜	平坦	自然	縄文土器、板押印、銅片	SK210→本跡→SE3、SK206・208・209、PG6
22	A 6 e7 ~A 6 e6	N-67°-E N-48°-W	L字状	(9.60)	0.46~1.00	0.20~0.56	10~13	浅いU字状	横斜	平坦	自然	縄文土器、骨片	第2号大塚土坑、SK221→本跡→SK220
23	A 6 b5 ~A 6 c9	N-40°-W	直線	8.52	0.40~0.83	0.26~0.68	10	逆台形	外傾	平坦	自然	縄文土器、古銭、銅片	SK222・308→本跡→SK308

(2) 井戸跡 (第99図)



第99図 井戸跡実測図

#### 第1号井戸跡土層解説

- 1 褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量  
炭化粒子微量
- 2 灰褐色 ロームブロック・粘土ブロック中量  
炭化粒子微量
- 3 暗褐色 粘土粒子多量、ロームブロック中量
- 4 灰褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量
- 5 暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック中量
- 6 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 7 褐色 ロームブロック・粘土ブロック中量
- 8 黒褐色 ロームブロック中量、粘土ブロック少量
- 9 褐色 ロームブロック中量、粘土ブロック少量

#### 第2号井戸跡土層解説

- 1 灰褐色 粘土粒子多量、炭化物・骨粉微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、粘土ブロック微量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量、粘土ブロック少量
- 4 灰褐色 粘土ブロック中量
- 5 灰褐色 粘土ブロック少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 極暗褐色 粘土粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 7 暗褐色 ロームブロック多量
- 8 灰褐色 粘土粒子多量、ロームブロック・炭化粒子微量

#### 第3号井戸跡土層解説（第7～14層は埋土）

- 1 灰褐色 粘土ブロック中量
- 2 灰褐色 粘土ブロック多量
- 3 灰褐色 粘土ブロック多量、ロームブロック少量

- 4 灰褐色 粘土ブロック多量、ローム粒子中量
- 5 青灰色 粘土ブロック多量、ロームブロック中量
- 6 青灰色 粘土ブロック多量
- 7 暗青灰色 粘土ブロック多量、ロームブロック少量
- 8 黄褐色 ロームブロック・粘土ブロック多量
- 9 暗青灰色 ロームブロック・粘土ブロック多量
- 10 褐色 ロームブロック・粘土ブロック多量
- 11 暗青灰色 粘土ブロック多量、ロームブロック中量
- 12 褐色 ロームブロック・粘土ブロック中量
- 13 暗褐色 ロームブロック多量、粘土ブロック中量
- 14 黒褐色 ロームブロック多量、粘土ブロック中量

#### 第4号井戸跡土層解説（埋土）

- 1 褐色 粘土ブロック中量、ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量
- 4 灰黄褐色 ロームブロック・粘土ブロック多量
- 5 黒褐色 粘土ブロック多量、ロームブロック中量
- 6 黒褐色 ロームブロック多量、粘土ブロック中量
- 7 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック中量
- 8 黒褐色 ローム粒子少量

#### 第5号井戸跡土層解説

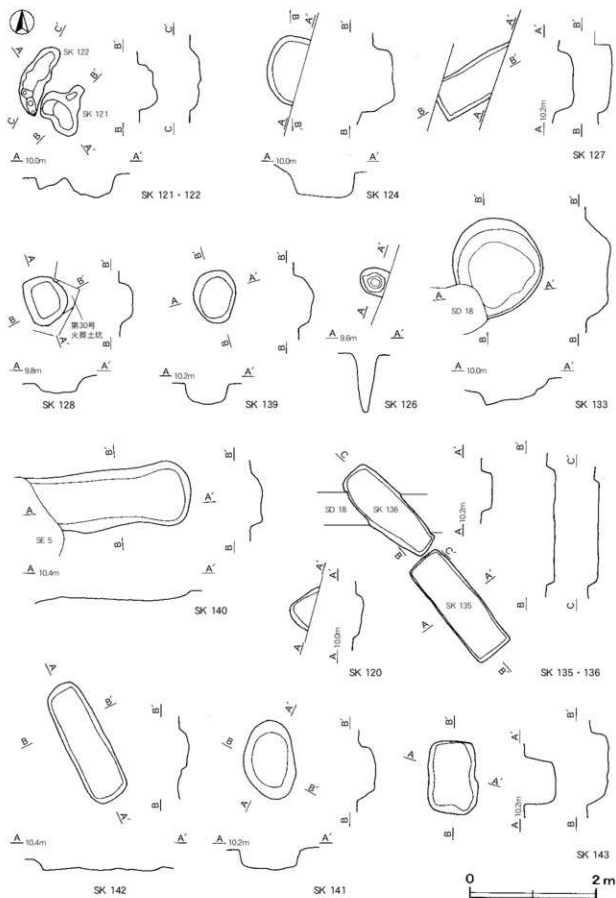
- 1 灰褐色 粘土ブロック多量、ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 3 極暗褐色 粘土ブロック・ローム粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・粘土粒子微量
- 5 黒褐色 ロームブロック中量、粘土粒子微量

表18 その他の井戸跡一覧表

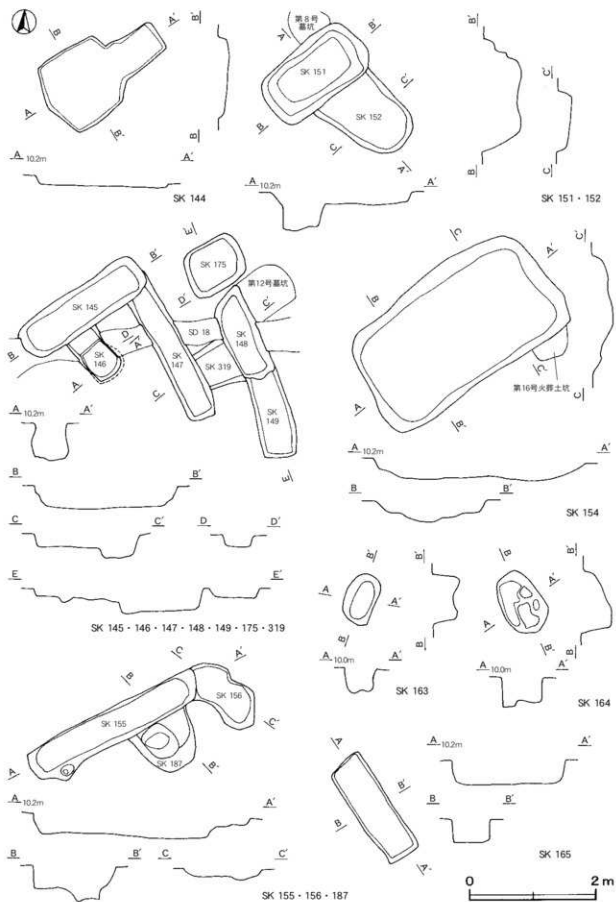
番号	位置	長径方向	平面形	規模 (m) 深さ (cm)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長径×短径	深さ					
1	A 6 j8	-	円形	0.74×0.70	(102)	直立	-	人為	縄文土器、土師質土器、陶器、磁器	
2	A 6 e6	-	円形	1.14×1.12	(84)	直立	-	人為	縄文土器、土師質土器、陶器	SK189→本跡
3	A 6 d7	-	円形	0.66×0.65	(125)	直立	-	人為	縄文土器、土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器、不明鉄製品、瓦	SK207・208、SD21→本跡
4	A 6 c7	-	円形	0.71×0.71	(195)	直立	-	人為	縄文土器、土師質土器、陶器、磁器、不明鉄製品、瓦	
5	A 6 j4	N-30°-W	不整形円形	1.74×1.36	(120)	外傾	-	人為	縄文土器、土師質土器、陶器、磁器、不明鉄製品、不明銅製品、銅片	SI3、SK140→本跡

#### (3) 土坑（第100～108図）

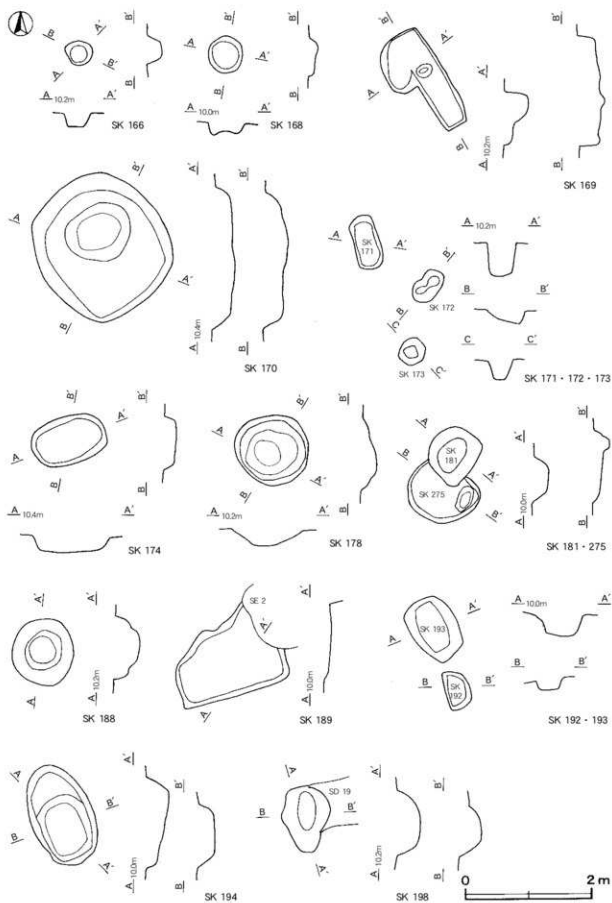
今回の調査で確認された土坑128基については、平面図と一覧表のみ掲載する。



第100図 土坑実測図(1)

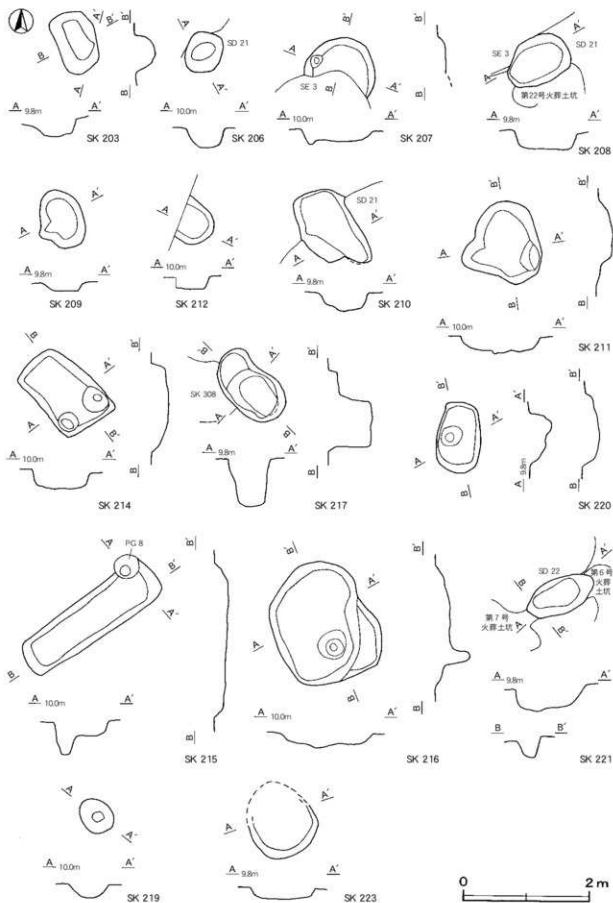


第101图 土坑实测图(2)

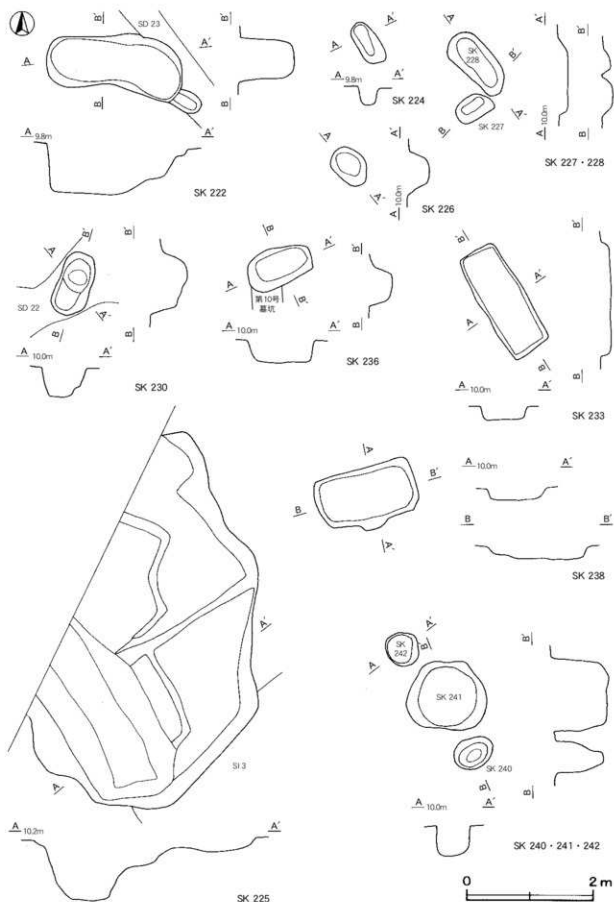


第102図 土坑実測図(3)



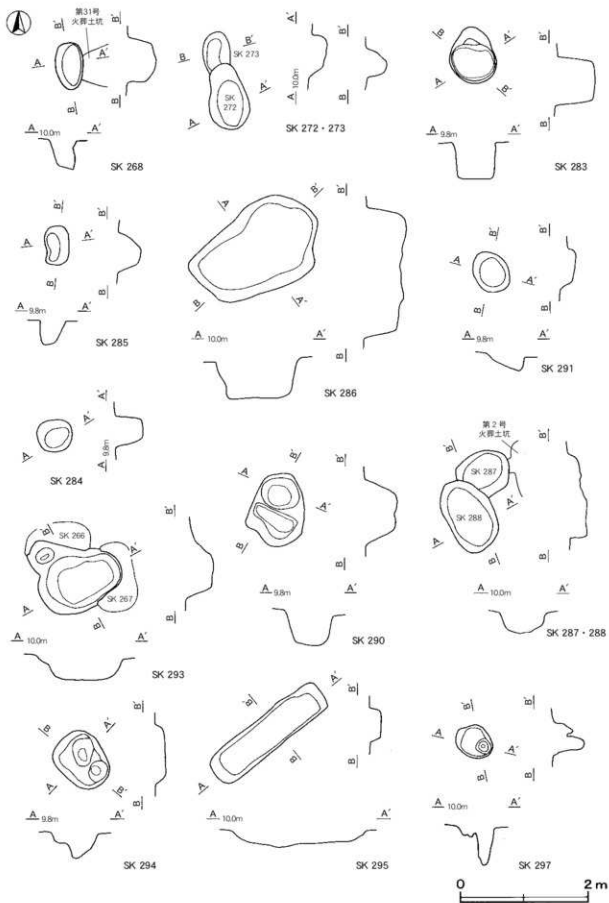


第103图 土坑实测图(4)

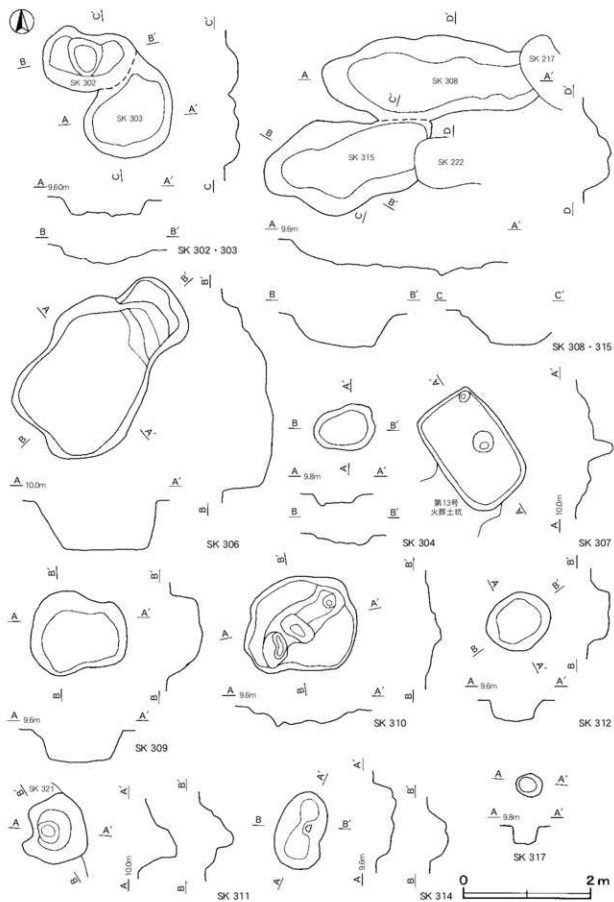


第104図 土坑実測図(5)

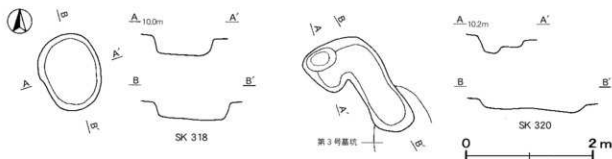




第106図 土坑実測図(7)



第107图 土坑实测图(8)



第108図 土坑実測図(9)

表19 その他の土坑一覧表

番号	位置	長軸(径)方向	平面形	規模(m)		深さ(cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長軸(m)	短軸(m)						
120	B 6 e7	N-15°-E	(楕円形)	0.68	× (0.34)	5	外傾	平坦	人為		
121	B 6 e7	N-28°-E	不定形	0.80	× 0.66	30-36	外傾	凹凸	自然	縄文土器	
122	B 6 e7	N-22°-E	不定形	1.05	× 0.45	13-22	緩斜	凹凸	自然		
124	B 6 a8	-	(楕円形)	(1.08)	× (0.56)	42	外傾	平坦	自然 人為	縄文土器、陶器、磁器、鏝	
126	A 6 i8	N-52°-W	(楕円形)	(0.42)	× 0.40	90	垂直	皿状	人為		
127	A 6 i8	N-62°-E	(楕円形)	(1.20)	× 0.64	29	外傾	外傾	平坦		
128	A 6 b9	N-21°-W	不整形	1.06	× 0.65	16-21	外傾 緩斜	平坦	人為	縄文土器	第30号火葬土坑→本跡
133	A 6 j7	-	円形	1.50	× 1.40	34	緩斜	平坦	人為	縄文土器、陶器	本跡→SD18
135	B 6 a6	N-39°-W	長方形	1.88	× 0.65	17	外傾	平坦	人為	縄文土器、土師質土器、鏝	
136	B 6 a6	N-45°-W	楕円長方形	1.71	× 0.65	14	緩斜	平坦	人為	縄文土器、骨片	本跡→SD18
139	A 6 i7	N-27°-E	楕円形	0.82	× 0.67	32	外傾	平坦	人為	縄文土器	
140	A 6 j5	N-82°-E	(楕円長方形)	(2.45)	× 1.03	17	緩斜	平坦	自然	縄文土器	本跡→SE5
141	A 6 j6	N-11°-E	楕円形	1.25	× 0.82	32	外傾	平坦	人為	縄文土器、土師質土器、銅片、鏝	
142	A 6 i6	N-11°-W	楕円長方形	2.00	× 0.64	16	外傾	平坦	人為	縄文土器、土師質土器、陶器、骨片	
143	A 6 i8	N-4°-E	不整形	1.15	× 0.79	14	外傾	凹凸	人為	縄文土器、鏝	
144	A 6 h8	N-56°-E	不定形	2.11	× 1.26	14	外傾	平坦	人為	縄文土器、土師質土器、鏝	
145	A 6 j3	N-54°-E	長方形	1.10	× 0.62	34	外傾	平坦	人為	縄文土器、土師質土器、鏝	SK146・147→本跡→SD18
146	B 6 a3	N-35°-W	(楕円長方形)	(0.86)	× 0.52	58	内傾	凹凸	人為	縄文土器	本跡→SK145・SD18
147	B 6 a4	N-28°-W	長方形	2.86	× 0.50	18	外傾	平坦	人為	縄文土器、土師質土器、陶器	SK319→本跡→SK145・SD18
148	B 6 a4	N-19°-W	長方形	1.42	× 0.58	34	外傾	凹凸	人為	縄文土器	SK149・319、第12号墓坑→本跡→SD18
149	B 6 a4	N-19°-W	長方形	(1.28)	× 0.54	14	外傾	凹凸	人為	縄文土器	SK319→本跡→SK148
151	A 6 j5	N-49°-E	楕円長方形	1.79	× 1.00	52	外傾	平坦	自然	縄文土器、陶器、磁器、瓦、釘、包丁、鉄鏝、骨片	SK152・第8号墓坑→本跡
152	A 6 j5	N-51°-E	(楕円形)	1.39	× (1.35)	15-23	緩斜	平坦	人為	縄文土器	本跡→SK151
154	A 6 i5	N-50°-E	楕円形	3.35	× 1.84	19-26	緩斜	平坦	人為	縄文土器、土師質土器、陶器、磁器、銀石、釘、古銭、瓦、軽石、鏝、骨片	第16号火葬土坑→本跡
155	A 6 i7	N-62°-E	長方形	2.96	× 0.54	36	垂直	平坦	人為	縄文土器	SK156・187→本跡
156	A 6 i7	N-54°-W	(楕円形)	1.34	× 0.64	16	外傾	凹凸	人為	縄文土器、土師質土器、銅片、鏝	本跡→SK155
163	A 6 g8	N-28°-E	楕円形	0.78	× 0.50	33-38	外傾	凹凸	人為	縄文土器、球状土鏝	
164	A 6 g8	N-24°-W	楕円形	1.01	× 0.69	35-46	外傾	凹凸	人為	縄文土器、軽石、鏝	
165	A 6 g7	N-34°-W	楕円形	1.80	× 0.59	36	外傾	平坦	人為	縄文土器、陶器、鉄鏝、鏝	
166	A 6 g5	-	円形	0.44	× 0.40	20	外傾	平坦	人為	縄文土器	
168	A 6 g8	-	円形	0.59	× 0.55	15-20	緩斜	凹凸	人為	縄文土器	
169	A 6 g7	-	不定形	1.72	× 0.83	29-40	外傾	凹凸	人為	縄文土器、土師質土器、陶器、鏝	
170	A 6 j4	N-43°-W	楕円長方形	2.39	× 2.08	30-36	緩斜	平坦	人為	縄文土器、土師質土器、土質土器、陶器、磁器、古銭、不明鉄製品、鏝	
171	A 6 g5	N-15°-W	楕円長方形	0.86	× 0.41	54	垂直	平坦	人為	縄文土器、鏝	

番号	位置	長軸(径)方向	平面形	規模(m) 深さ(cm)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長軸径×短軸径	深さ					
172	A 6 g6	N-40°-E	楕円形	0.58 × 0.33	13-20	織斜 外傾	平坦	人為	縄文土器	
173	A 6 g6	N-36°-E	楕円形	0.44 × 0.39	31	外傾	皿状	人為	縄文土器、剥片	
174	A 6 j4	N-70°-E	楕円形	1.22 × 0.75	20-29	織斜	凹凸	人為	縄文土器	
175	A 6 j4	N-63°-E	隅丸方形	0.95 × 0.76	15	外傾	平坦	人為	縄文土器	
178	A 6 g6	-	円形	1.18 × 1.15	24	織斜	皿状	人為	縄文土器、土師質土器、陶器、磁器 磁石、銅片、釘、不明鉄製品	
181	A 6 f6	N-46°-E	楕円形	0.85 × 0.75	24	織斜	平坦	人為	縄文土器、土師質土器、陶器、剥片	SK275→本跡
187	A 6 i7	N-36°-W	(楕円形)	1.00 × (0.82)	50	外傾	凹凸	人為	縄文土器	本跡→SK155
188	A 6 g5	-	円形	1.06 × 0.98	40	外傾	皿状	人為	縄文土器、磁器、球状土師	
189	A 6 e6	N-65°-E	不定形	1.78 × 1.16	16	外傾	凹凸	人為		本跡→SE2
192	A 6 f7	N-23°-W	楕円形	0.62 × 0.40	20-29	外傾	凹凸	人為	縄文土器	
193	A 6 f7	N-35°-W	隅丸長方形	1.02 × 0.74	36	外傾	皿状	人為	縄文土器、骨片	
194	A 6 e5	N-15°-W	楕円形	1.62 × 1.00	30	外傾	平坦	人為	縄文土器、骨片	
198	A 6 g7	N-5°-W	楕円形	1.05 × 0.81	35	織斜	皿状	人為	縄文土器	SD19→本跡
203	A 6 g9	N-18°-W	不整形円形	0.98 × 0.66	25	外傾	皿状	人為		
206	A 6 d7	N-43°-E	楕円形	0.66 × 0.56	30	外傾	皿状	人為	縄文土器、礫	SD21→本跡
207	A 6 c7	-	(円形)	1.15 × (0.54)	14-23	外傾	平坦	人為	縄文土器	本跡→SE3
208	A 6 d7	N-60°-E	楕円形	1.10 × 0.64	28-47	外傾 織斜	皿状	人為	縄文土器、骨片、礫	第22号火葬土坑 SD21→本跡→SE3
209	A 6 d6	N-27°-W	楕円形	0.86 × 0.62	14	外傾	平坦	人為	縄文土器	SD21→本跡
210	A 6 d6	N-38°-W	不定形	1.50 × 0.94	27	外傾 織斜	皿状	人為	縄文土器、剥片	本跡→SD21
211	A 6 b7	N-5°-W	不定形	1.33 × 1.26	23	織斜	皿状	人為	縄文土器、礫	
212	A 6 b6	N-19°-E	(楕円形)	0.66 × (0.53)	20	外傾	平坦	人為		
214	A 6 b7	N-45°-W	隅丸長方形	1.40 × 0.93	31	外傾	皿状	人為	縄文土器	
215	A 6 c8	N-54°-E	長方形	2.46 × 0.74	24	外傾	平坦	人為	縄文土器	本跡→PG8
216	A 6 b8	N-23°-W	不定形	1.94 × 1.44	15-23	織斜	平坦	人為	縄文土器	
217	A 6 b9	N-46°-W	楕円形	1.38 × 0.71	74	垂直	平坦	人為	縄文土器	SK308→本跡
219	A 6 a6	N-52°-W	楕円形	0.60 × 0.46	21	外傾	皿状	人為	骨片	
220	A 6 a8	N-2°-E	楕円形	1.12 × 0.70	21-35	外傾	凹凸	人為	縄文土器	
221	A 6 e7	N-38°-W	楕円形	(1.16) × 0.62	34	外傾	皿状	人為	縄文土器	第6・7号火葬土坑→ 本跡→SD22
222	A 6 c8	N-80°-W	不定形	2.18 × 0.94	86	外傾 垂直	平坦	人為	縄文土器	SK315→本跡→SD23
223	Z 6 j7	N-65°-E	(楕円形)	1.07 × (0.67)	19	外傾	平坦	人為		
224	A 6 d8	N-30°-W	長方形	0.70 × 0.38	28	垂直	皿状	人為	縄文土器	
225	A 6 i4	-	不定形	5.62 × (3.00)	20-84	外傾 織斜	凹凸	人為	縄文土器、剥片、礫	SI3→本跡
226	A 6 d6	N-41°-W	楕円形	0.68 × 0.50	32	外傾	平坦	人為	縄文土器	
227	A 6 f7	N-35°-E	楕円形	0.58 × 0.38	17	外傾	平坦	人為	縄文土器	
228	A 6 f7	N-44°-E	楕円形	1.12 × 0.54	12	外傾 織斜	皿状	人為	縄文土器	
230	A 6 e7	N-28°-E	楕円形	1.04 × 0.54	50	外傾	凹凸	人為	縄文土器	SD22→本跡
233	A 6 g7	N-32°-W	長方形	1.81 × 0.72	17	外傾	平坦	人為	縄文土器	
236	A 6 b7	N-65°-E	隅丸長方形	1.08 × 0.62	62	垂直	平坦	人為	縄文土器	第10号墓坑→本跡
238	A 6 b7	N-74°-E	長方形	1.60 × 0.86	20-42	織斜 垂直	平坦	人為	縄文土器、礫	
240	B 6 b5	N-60°-E	楕円形	0.67 × 0.50	76	織斜	皿状	自然		
241	B 6 b5	-	円形	1.24 × 1.19	95	外傾	平坦	人為	縄文土器	
242	B 6 b5	-	円形	0.55 × 0.54	46	外傾	平坦	人為		
243	B 6 a6	N-55°-W	楕円形	0.64 × 0.55	12	織斜	凹凸	人為		
244	B 6 a6	N-14°-W	不整形円形	0.57 × 0.45	49	外傾	皿状	人為		
245	A 6 i8	N-26°-W	隅丸長方形	0.98 × 0.86	39	外傾	皿状	人為	縄文土器、礫	
246	A 6 j7	N-11°-W	不定形	0.70 × 0.42	63	織斜	皿状	自然		
247	A 6 j5	-	円形	0.76 × 0.74	30	外傾	平坦	人為		SI3→本跡

番号	位置	長軸(径)方向	平面形	規模(m) 深さ(cm)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長軸(m) × 短軸(m)	深さ					
248	A 6 18	-	円形	0.50 × 0.48	38	外傾	皿状	自然		
249	A 6 g4	N-42°-W	楕円形	0.79 × 0.68	18	外傾	平坦	人為		
250	B 6 a3	N-47°-W	楕円形	0.69 × 0.62	28	緩斜	皿状	人為		
251	A 6 g8	N-1°-W	楕円形	0.60 × 0.47	42	外傾	平坦	自然		
253	A 6 18	N-33°-W	楕円形	0.75 × 0.66	14-17	緩斜	凹凸	人為		
254	A 6 17	N-36°-W	{楕円形}	{0.51} × {0.52}	9-13	緩斜	凹凸	人為		本跡→SK255
255	A 6 17	N-14°-E	楕円形	0.58 × 0.50	13-16	緩斜	凹凸	人為	縄文土器	SK254→本跡
256	A 6 b8	N-68°-E	楕円長方形	1.22 × 0.85	32-72	外傾	平坦	人為	縄文土器、陶器	
257	A 6 19	N-26°-W	楕円形	0.91 × 0.59	40	外傾 緩斜	皿状	自然		
258	B 6 b6	N-50°-E	楕円形	1.00 × 0.90	75	垂直	平坦	人為	縄文土器	
259	A 6 b8	N-82°-E	{楕円形}	{0.74} × {0.50}	16-21	外傾	平坦	人為	縄文土器	第12号火葬土坑→本跡
260	A 6 b6	N-59°-W	不定形	1.88 × {0.84}	6-8	緩斜	凹凸	人為		本跡→SK261
261	A 6 b6	N-67°-W	不定形	0.90 × 0.83	8-14	緩斜	凹凸	人為	縄文土器	SK260→本跡
266	A 6 b6	N-75°-E	{楕円形}	{0.94} × 0.66	22	外傾	平坦	人為	縄文土器	SK263、第13、14号 火葬土坑→本跡
267	A 6 b6	N-24°-W	楕円形	1.06 × 0.64	28	外傾	平坦	人為	縄文土器	SK263、第14号火葬土坑 →本跡
268	A 6 15	N-3°-W	楕円形	0.74 × 0.43	45	外傾	皿状	人為		本跡→第31号火葬土坑
272	A 6 g5	N-18°-W	楕円形	1.01 × 0.64	26	緩斜 外傾	平坦	人為	縄文土器、礫	SK273→本跡
273	A 6 g5	N-18°-W	楕円形	{0.55} × 0.45	34	外傾	皿状	人為	縄文土器	本跡→SK272
275	A 6 16	N-55°-W	楕円形	1.13 × {0.93}	10-14	緩斜	平坦	人為		本跡→SK181
283	A 6 15	N-1°-E	楕円形	0.89 × 0.75	60	外傾 垂直	平坦	人為		
284	A 6 15	N-59°-E	楕円形	0.60 × 0.54	43	外傾 垂直	平坦	人為		
285	A 6 e5	N-1°-E	楕円形	0.62 × 0.37	38	外傾 垂直	平坦	人為		
286	A 6 16	N-53°-E	不要長方形	2.09 × 1.31	49	外傾	平坦	人為		本跡→PG4
287	A 6 16	N-61°-E	楕円形	1.20 × 0.68	24	外傾	平坦	人為		第2号火葬土坑→本跡 →SK288
288	A 6 16	N-33°-W	{楕円形}	{0.78} × 0.61	32	外傾	皿状	人為	縄文土器	SK287→本跡
290	A 6 b7	N-13°-E	不要楕円形	1.20 × 0.90	48-51	外傾	平坦	人為		
291	A 6 17	N-30°-W	楕円形	0.67 × 0.55	17-23	緩斜	皿状	人為	縄文土器	
293	A 6 b6	N-50°-W	不定形	1.48 × 0.84	36	緩斜	平坦	人為	縄文土器、陶器、剥片	本跡→SK266・267
294	A 6 17	N-50°-W	楕円長方形	0.93 × 0.75	16	外傾	平坦	自然	縄文土器	
295	B 6 a4	N-50°-W	長方形	2.14 × 0.54	18-37	緩斜	平坦	人為	縄文土器、土師質土器、剥片、礫	
297	A 6 h7	N-56°-W	楕円形	0.60 × 0.53	7-30	外傾	凹凸	人為		
302	A 6 a8	N-80°-E	楕円形	1.48 × 0.91	14-25	緩斜	平坦	人為	縄文土器	SK303→本跡
303	A 6 a8	N-12°-E	{楕円形}	{1.60} × 1.28	21-26	外傾	平坦	人為	縄文土器、剥片	本跡→SK302
304	A 6 b7	N-60°-E	不要楕円形	1.02 × 0.70	10-20	緩斜	凹凸	人為		
306	B 6 a5	N-50°-E	不定形	3.02 × 1.80	65-77	外傾 緩斜	平坦	人為	縄文土器、剥片	
307	A 6 g6	N-33°-W	{楕円長方形}	{1.79} × 1.16	20-33	緩斜	凹凸	人為	礫	第13号火葬土坑→本跡
308	A 6 b8	N-88°-E	不要楕円形	{3.25} × 1.29	41-50	緩斜	平坦	人為	縄文土器、剥片、礫	SK315→本跡→SK217
309	A 6 b8	N-80°-E	不要長方形	1.52 × 1.31	42-49	外傾	平坦	人為	縄文土器	
310	A 6 a8	N-78°-E	不定形	1.88 × 1.47	11-25	緩斜	凹凸	人為	縄文土器	
311	A 6 h5	N-12°-E	不定形	1.13 × 0.86	15-51	緩斜	皿状	人為		SK321→本跡
312	A 6 c7	N-52°-E	楕円形	1.03 × 0.87	33	外傾	平坦	人為	縄文土器	
314	A 6 c8	N-11°-E	楕円形	1.25 × 0.77	24-30	緩斜	皿状	人為		
315	A 6 c8	N-75°-E	不要楕円形	2.73 × 1.28	42-48	外傾	平坦	人為	縄文土器	本跡→SK222・308
317	A 6 g5	N-75°-W	楕円形	0.41 × 0.35	27	垂直	平坦	自然		
318	A 6 17	N-15°-W	楕円形	1.22 × 0.93	23-28	外傾	平坦	人為	縄文土器	
319	B 6 a4	N-64°-E	{長方形}	{0.78} × {0.54}	20	-	平坦	人為		本跡→SK147・148・ SD18
320	A 6 16	N-32°-W	不定形	1.72 × 0.56	12	外傾	平坦	人為		第3号墓坑→本跡

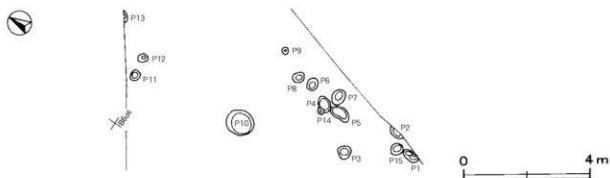


#### (4) ビット群

今回の調査で、ビット群が8か所確認された。いずれのビット群も中世または近世の遺構確認面から確認されているが、第9～11号ビット群は第2～4・6・8号ビット群より下層で確認されており、やや時期差があるものとみられる。重複関係から近世以降とみられるが、明確な出土遺物がなく、時期を決定することができない。ここでは、ビット一覧表と平面図をそれぞれ記載する。

#### 第2号ビット群 (第109図)

調査区南部のB6c6～B6f7区にかけての東西8m、南北16mの範囲から、柱穴状のビット15か所が確認された。平面形は長径23～86cmの円形または楕円形で、深さが12～60cmである。覆土中から縄文土器片が出土しているが、ビットの分布状況から建物跡は想定できない。時期・性格ともに不明である。



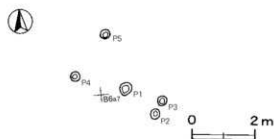
第109図 第2号ビット群実測図

表20 第2号ビット群 ビット一覧表

番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ				長径	短径	深さ
1	B 6 f7	不定形	52	30	36	9	B 6 d7	楕円形	23	20	26
2	B 6 e7	[楕円形]	54	(18)	60	10	B 6 d6	円形	86	80	40
3	B 6 e6	楕円形	44	39	50	11	B 6 c6	楕円形	32	29	13
4	B 6 e7	楕円形	54	42	25	12	B 6 c6	不定形	34	28	15
5	B 6 e7	不定形	59	37	40	13	B 6 c6	[楕円形]	40	(14)	40
6	B 6 e7	楕円形	41	33	25	14	B 6 e6	楕円形	24	19	25～54
7	B 6 e7	楕円形	55	36	48	15	B 6 e7	楕円形	38	34	46
8	B 6 e7	楕円形	33	28	12～18						

#### 第3号ビット群 (第110図)

調査区南部のA6j6～B6a7区にかけての東西8m、南北8mの範囲から、柱穴状のビット5か所が確認された。平面形は長径27～35cmの円形で、深さが9～29cmである。本ビット群は、重複関係から第18号溝跡より新しいものである。覆土中から縄文土器片が出土しているが、ビットの分布状況から建物跡は想定できない。時期・性格ともに不明である。



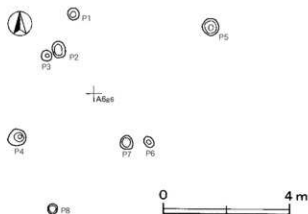
第110図 第3号ビット群実測図

表21 第3号ピット群 ピット一覧表

番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ				長径	短径	深さ
1	A 6 j7	円形	35	35	9	4	A 6 j6	円形	27	27	15
2	B 6 a7	円形	27	26	29	5	A 6 j7	円形	27	25	23
3	B 6 a7	円形	28	27	8						

## 第4号ピット群 (第111図)

調査区中央部のA 6 i5～A 6 g6区にかけての東西8 m、南北8 mの範囲から、柱穴状のピット8か所が確認された。平面形は長径30～57cmの円形または楕円形で、深さが15～55cmである。覆土中から縄文土器片や土師質土器片が出土しているが、ピットの分布状況から建物跡は想定できない。時期・性格ともに不明である。



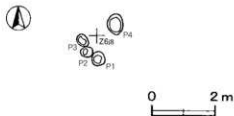
第111図 第4号ピット群実測図

表22 第4号ピット群 ピット一覧表

番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ				長径	短径	深さ
1	A 6 i5	楕円形	35	31	23	5	A 6 g6	楕円形	50	43	26
2	A 6 i5	楕円形	48	36	15	6	A 6 g6	楕円形	30	23	23
3	A 6 i5	楕円形	33	28	25	7	A 6 g6	円形	40	38	19
4	A 6 g6	楕円形	57	50	-	8	A 6 g6	円形	30	30	-

## 第6号ピット群 (第112図)

調査区北部のZ 6 i7～Z 6 j8区にかけての東西8 m、南北8 mの範囲から、柱穴状のピット4か所が確認された。平面形は長径39～61cmの円形または楕円形で、深さが13～24cmである。覆土中から縄文土器片が出土しているが、ピットの分布状況から建物跡は想定できない。時期・性格ともに不明である。



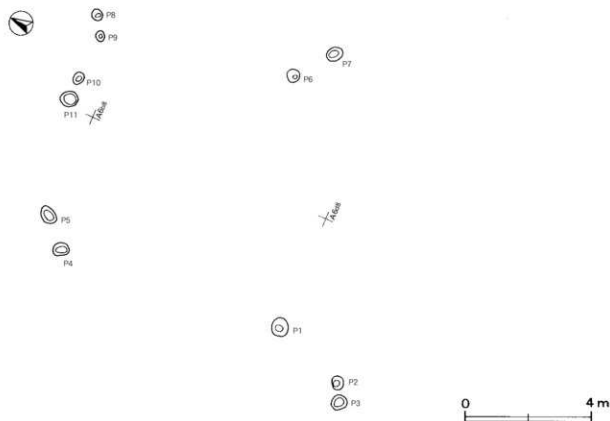
第112図 第6号ピット群実測図

表23 第6号ピット群 ピット一覧表

番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ				長径	短径	深さ
1	Z 6 j7	円形	41	40	15	3	Z 6 j7	楕円形	40	32	20
2	Z 6 j7	楕円形	39	35	24	4	Z 6 j8	楕円形	61	50	13

### 第8号ピット群 (第113図)

調査区北部のA 6 a7～A 6 d9区にかけての東西12m、南北16mの範囲から、柱穴状のピット11か所が確認された。平面形は長径37～60cmの円形または楕円形で、深さが17～75cmである。覆土中から縄文土器片が出土しているが、ピットの分布状況から建物跡は想定できない。時期・性格ともに不明である。



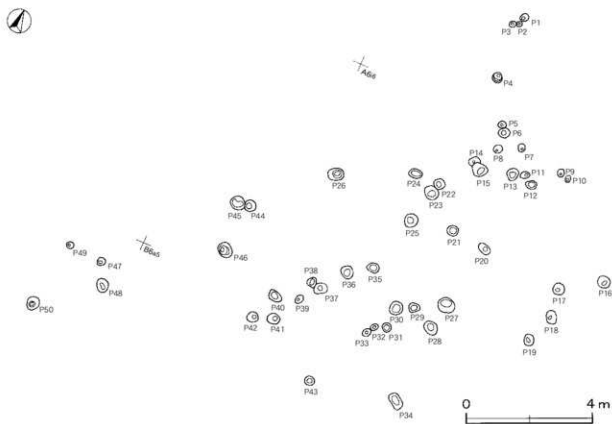
第113図 第8号ピット群実測図

表24 第8号ピット群 ピット一覧表

番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ				長径	短径	深さ
1	A 6 d7	不整楕円形	57	50	35	7	A 6 c9	楕円形	50	40	48
2	A 6 d6	楕円形	40	28	45	8	A 6 a8	円形	40	37	25
3	A 6 d6	不整楕円形	50	44	75	9	A 6 a8	楕円形	37	26	25
4	A 6 b6	楕円形	51	41	17	10	A 6 a8	楕円形	40	31	25
5	A 6 a7	楕円形	60	44	20	11	A 6 a8	円形	57	52	20
6	A 6 c8	円形	41	38	52						

### 第9号ピット群 (第114図)

調査区南部のA 6 h4～B 6 a8区にかけての東西20m、南北16mの範囲から、柱穴状のピット50か所が確認された。平面形は長径16～53cmの円形または楕円形で、深さが5～64cmである。覆土中から縄文土器片が出土しているが、ピットの分布状況から建物跡は想定できない。時期・性格ともに不明である。



第114図 第9号ピット群実測図

表25 第9号ピット群 ピット一覧表

番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ				長径	短径	深さ
1	A 6 h7	楕円形	25	20	37	26	A 6 j6	楕円形	47	36	20
2	A 6 h7	楕円形	16	12	52	27	A 6 j7	楕円形	53	44	15
3	A 6 h7	楕円形	20	14	59	28	A 6 j7	楕円形	44	32	20
4	A 6 h7	円形	29	28	64	29	A 6 j7	不整形円形	30	28	23
5	A 6 i7	楕円形	24	21	19	30	A 6 j7	楕円形	40	35	18
6	A 6 i7	円形	33	30	12	31	A 6 j7	円形	28	26	5
7	A 6 i7	楕円形	22	18	28	32	A 6 j6	楕円形	27	13	33
8	A 6 i7	楕円形	25	22	13	33	A 6 j6	楕円形	30	18	33
9	A 6 i7	楕円形	25	18	20	34	B 6 a7	楕円形	50	30	16
10	A 6 i7	楕円形	20	13	17	35	A 6 j6	楕円形	39	28	8
11	A 6 i7	楕円形	28	21	17	36	A 6 j6	楕円形	39	34	14
12	A 6 i7	楕円形	33	25	10	37	A 6 j6	不整形楕円形	46	38	20
13	A 6 i7	楕円形	36	31	17	38	A 6 j6	不整形楕円形	34	29	18
14	A 6 i7	[楕円形]	35	(19)	35	39	A 6 j6	楕円形	25	16	24
15	A 6 i7	不整形楕円形	45	39	8~14	40	A 6 j6	不整形楕円形	43	31	10
16	A 6 j8	円形	36	34	25	41	B 6 a6	楕円形	45	37	13
17	A 6 j8	円形	37	34	15	42	B 6 a6	楕円形	35	28	10
18	A 6 j8	不整形楕円形	41	30	18	43	B 6 a6	円形	28	26	15
19	A 6 j8	楕円形	34	28	12	44	A 6 j5	楕円形	34	30	19~24
20	A 6 i7	楕円形	38	23	51	45	A 6 j5	楕円形	45	38	12
21	A 6 i7	円形	32	31	8	46	A 6 j5	楕円形	47	38	28
22	A 6 j6	円形	35	32	9	47	B 6 a4	楕円形	26	23	17
23	A 6 j6	楕円形	43	40	14	48	B 6 a4	楕円形	43	35	14
24	A 6 j6	楕円形	40	24	13	49	B 6 a4	円形	23	21	16
25	A 6 j6	楕円形	40	36	14	50	B 6 a4	楕円形	40	34	23

### 第10号ピット群 (第115図)

調査区中央部の A 6 d4 ~ A 6 i6区にかけての東西28m, 南北24mの範囲から, 柱穴状のピット33か所が確認された。平面形は長径22~53cmの円形または楕円形で, 深さが9~65cmである。覆土中から縄文土器片が出土しているが, ピットの分布状況から建物跡は想定できない。時期・性格ともに不明である。



第115図 第10号ピット群実測図

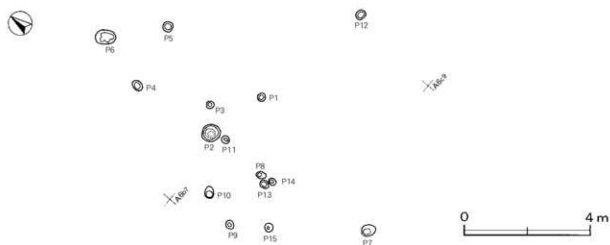
表26 第10号ピット群 ピット一覧表

番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ				長径	短径	深さ
1	A 6 h5	楕円形	39	32	47	12	A 6 i5	楕円形	24	22	15
2	A 6 i4	楕円形	30	25	20	13	A 6 e5	円形	33	30	28
3	A 6 i4	楕円形	37	33	33	14	A 6 e6	楕円形	41	38	29
4	A 6 g5	楕円形	35	25	11	15	A 6 e6	楕円形	35	29	27
5	A 6 g5	楕円形	30	26	21	16	A 6 g6	楕円形	37	34	26
6	A 6 g5	楕円形	40	33	38	17	A 6 g6	円形	30	29	25
7	A 6 g6	楕円形	53	42	30	18	A 6 g6	円形	35	34	31
8	A 6 g5	楕円形	37	30	15	19	A 6 g6	円形	44	40	43
9	A 6 g5	楕円形	34	29	9~15	20	A 6 d6	楕円形	32	22	30
10	A 6 g5	楕円形	44	35	34	21	A 6 e6	円形	30	29	16
11	A 6 i5	楕円形	26	24	13~30	22	A 6 e6	円形	25	24	21

番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ				長径	短径	深さ
23	A 6 d6	楕円形	45	37	23	29	A 6 e5	円形	22	22	31
24	A 6 d6	楕円形	30	27	19	30	A 6 e5	円形	28	28	65
25	A 6 d6	楕円形	36	31	20	31	A 6 e5	円形	23	22	11
26	A 6 d6	楕円形	47	37	14~27	32	A 6 e5	楕円形	25	21	15
27	A 6 e6	楕円形	26	22	14	33	A 6 e5	楕円形	31	25	15
28	A 6 e5	円形	30	29	15						

## 第11号ピット群 (第116図)

調査区北部のZ 6 j7~ A 6 c9区にかけての東西12m、南北16mの範囲から、柱穴状のピット15か所が確認された。平面形は長径23~61cmの円形または楕円形で、深さが19~55cmである。覆土中から縄文土器片が出土しているが、ピットの分布状況から建物跡は想定できない。時期・性格ともに不明である。



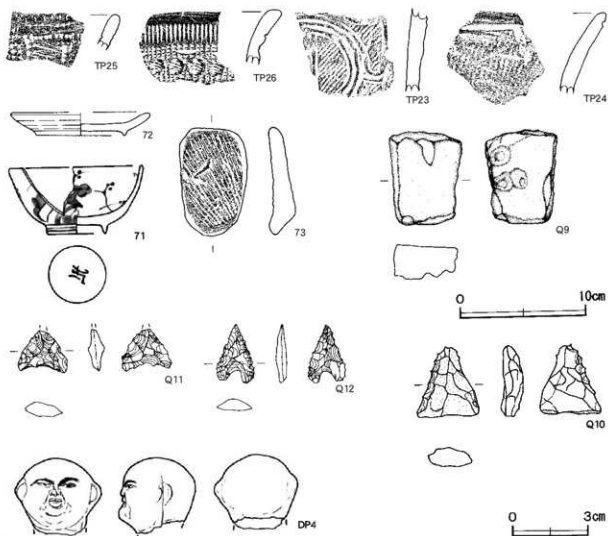
第116図 第11号ピット群実測図

表27 第11号ピット群 ピット一覧表

番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ				長径	短径	深さ
1	A 6 b8	円形	26	26	27	9	A 6 b7	円形	27	26	43
2	A 6 a7	楕円形	61	55	55	10	A 6 b7	楕円形	36	30	33
3	A 6 a7	円形	24	23	19	11	A 6 b7	円形	23	22	31
4	A 6 a7	楕円形	34	25	20	12	A 6 b9	楕円形	30	23	21
5	A 6 a8	円形	35	33	42	13	A 6 b7	楕円形	27	24	28
6	Z 6 j7	楕円形	63	47	60	14	A 6 b7	楕円形	25	20	27
7	A 6 c7	楕円形	45	36	28	15	A 6 b7	円形	25	25	22
8	A 6 b7	円形	24	22	25						

## (5) 遺構外出土遺物

今回の調査で出土した遺物のうち、遺構に伴わない特徴的なものを実測図 (第117図) と観察表で記載する。



第117図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表 (第117図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	胎土色	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
71	磁器	中碗	10.3	5.3	4.5	細砂	灰白	灰白	良好	外面青輪梅樹文 高台に二重戸高台内「□」	SK124 甌土中	肥前系 80%
72	陶器	小皿	(10.7)	1.9	6.9	細砂	黄灰	黄灰	良好	志野丸皿 長石軸	SK5 甌土中	瀬戸・美濃系 30%
TP23	縄文土器	深鉢	-	(6.5)	-	長石・雲母	明赤褐		普通	口縁部が弓う隆帯による文様 区画内は短. 単筋縄文施す	SK3 甌土中	中期後半 5% PL15
TP24	縄文土器	深鉢	-	(6.4)	-	長石・石英・雲母	橙		普通	口縁部の沈線下に短. 単筋縄文施す	SK132 甌土中	前期前半 5%
TP25	縄文土器	深鉢	-	(2.8)	-	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙		普通	口縁部はキヤミ目を施す 口縁部は半風竹管による刺突文の上に糸線文を施す	SK144 甌土中	前期後半 5%
TP26	縄文土器	深鉢	-	(4.3)	-	長石・雲母	にぶい黄橙		普通	口縁部は縦方向の沈線を施文 胴部は貝殻刺線文を施文後、工具痕による円形文	SK194 甌土中	前期後半 5% PL15
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考	
73	播鉢	8.5	5.3	2.1	-	細砂	播鉢の側面を紙面として使用 胎土色灰			表土	丹波系 5%	
DP4	人形	(30)	3.4	3.0	(16.2)	細砂	陶製前後組み合わせ 灰輪 眉と目は鉄軸を施す			表土		
Q9	磨石	(7.4)	(5.7)	2.7	(150.1)	安山岩	凹み石転用			表土		
Q10	二次加工を有する磨石	28	24	0.8	5.05	チャート	表面は多くの自然面で、左側縁のみ加工を残す 背面はほぼ平面で、右側縁に加工面を残す 石製未製品			表土	PL15	
Q11	石碾	(1.7)	1.9	0.6	(1.30)	チャート	両面押圧剥離			表土	PL15	
Q12	石碾	2.3	1.5	0.4	1.20	チャート	両面押圧剥離			表土	PL15	

## 第4節 ま と め

瀬沼遺跡は、平成18年度の調査（以下、「前回の調査」）で明らかにされたように、縄文時代の竪穴住居跡1軒と古墳時代の竪穴住居跡1軒が確認され、標高10mほどの台地平坦部を居住域としていたことが判明している。平成19年度の調査（以下、「今回の調査」）では、縄文時代の竪穴住居跡のほか、中世の墓跡、さらに近世の墓跡や運河跡などが新たに確認されている。ここでは、今回確認できた主な遺構と出土遺物の特徴について述べていく。

### 1 縄文時代の遺構と遺物について

前回の調査では、阿玉台Ⅱ式期の竪穴住居跡1軒、土坑2基、ピット1基が確認されており、当遺跡は居住域であったことが判明している。今回の調査で確認された縄文時代の遺構は、第3号住居跡及び第289・298・313号土坑である。第313号土坑は遺物が出土していないが、ほかの遺構から出土している縄文土器片は、頸部が無文帯であるものや、隆帯に沿った爪形の文様がみられるもの、波頂部下に隆帯によるU字状・O字状を有し、縄文を施文しないなどの特徴がある。これらのことから、阿玉台Ⅲ式期にあてはめることができ、前回の調査で出土した阿玉台式土器とはやや時期差がみられる。石器・石製品は、石鏃や凹み石を転用した磨石などのほか、遺構に流れ込んだ剥片やチップ状の碎片や石鏃未製品を想起させる三角形に加工したチャートの剥片も出土していることは特筆される。また、今回の調査で中世・近世の遺構が構築された層中に、阿玉台Ⅲ式期の土器片が含まれていたことが確認されている。その出土範囲は明確でないが、3000点を超える総数からみると、当遺跡で確認された阿玉台Ⅲ式期の住居跡が単独ではなく、小規模ながらも同時期の竪穴住居跡などが調査区域外に存在しているものと想定される。遺構に伴わない縄文土器片は、土塔貝塚や冬木貝塚などから出土している浮島Ⅱ～Ⅲ式期や加曾利EⅠ式期、堀之内Ⅰ式期の土器片も数点確認されている。

### 2 中世の遺構について

#### (1) 墓坑

確認された11基の墓坑のうち、六道銭が中央あるいはコーナー付近にまとまって確認された墓坑は9基存在し、その古銭から埋葬された時期は中世後半（15世紀後半から16世紀前半）と大別することができる。これらの墓坑は、後世の遺構に掘り込まれて原形をとどめていないものもあるが、その規模の平均は長軸（径）が1.24m、短軸（径）が0.85m、平面形が隅丸長方形あるいは楕円形で、その形状から屈葬の状態で埋葬されたものとみられる。ほかに土師質土器が出土した墓坑が2基確認されており、その規模は六道銭を伴う墓坑とほぼ同じである。この2基の墓坑は、土師質土器の様相から、六道銭が出土している墓坑とはほぼ同時期に比定できるものの、出土品が異なっている。

#### (2) 火葬土坑

火葬土坑は41基検出されている。骨片や骨粉が確認され、覆土中に炭化物や焼土ブロックを含んでいる土坑が該当するが、当遺跡で確認できた火葬土坑は、壁面や底面に火熱を受けた痕跡が残っているものが少ないため、含有物や形状などを考慮して火葬土坑と判断した。火葬土坑の形状を分類すると、掘り込まれているために形状は不明なものが多いものの、T字形、円形または楕円形、L字形や不定形などに分けることができる。この分類は、本来の形状が明らかでないものも含まれているため再考の余地はあるが、確認された状況からは



火葬土坑の形状が複数に分類できる。最も多いのはT字形で、41基のうち20基で約5割を占めている。T字形の燃焼部は、平均すると長軸1.25m、短軸0.57mほどのものが多く、その規模からは屈葬の状態では火葬された可能性が考えられる。また、中世墓坑の長軸や短軸と規模を比較すると、T字形の火葬土坑とはほぼ同じ規模であることは注目される。このことは石守見氏も群馬県の事例において指摘しており<sup>9)</sup>、当遺跡の様相が一致していることは興味深い。火葬土坑の時期は、中世の墓坑と重複しているものも確認されていることから、中世後半と推定できる。

### (3) 墓跡の様相

町域あるいはその周辺において中世の墓地に関連する遺構が確認された遺跡は、近隣の境町に所在する板井前遺跡から火葬土坑4基、町域の石畑遺跡から火葬墓1基などであるが、当遺跡で確認された墓坑や火葬土坑と数量を比較すると大きな差がみられ、墓坑の集団化された様相がうかがえる。当遺跡は、調査区中央付近の南北幅30m、確認できた東西幅20mの範囲にまとまって墓域を形成している。その墓域を区画するような溝や櫓などは確認されていないものの、離れた位置に墓坑や火葬土坑が見当たらないことや、火葬土坑同士の重複、さらに墓坑を掘り込んでいる火葬土坑もあることは、この範囲を火葬の地、また墓地として利用していたと考えられる。斉藤弘氏は、北関東地方における中世墓地の様相について「中世墓地に火葬施設や井戸及び地下式坑が伴う事例が多い」と述べている<sup>9)</sup>。当遺跡では地下式坑は確認されていないが、墓域内に出土遺物がないため時期不明とした第1・2・5号井戸跡が存在していることから、これらが墓地に関連することも想定される。なお、集落や寺院などと墓地の関係が今回の調査では明らかにすることができなかったが、14～15世紀頃に庶民層の造墓活動が始まり、15～16世紀には一部で共同墓地を形成される現象<sup>9)</sup>を当遺跡の様相からもうかがうことができる。

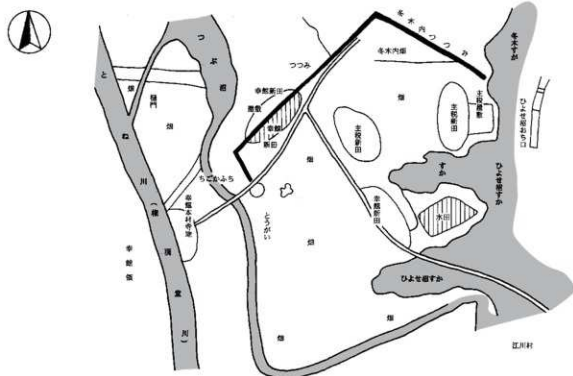
## 3 近世の遺構と遺物について

### (1) 墓坑

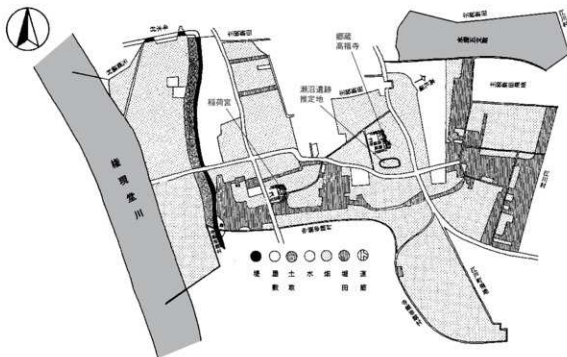
近世の墓坑は第12号墓坑の1基のみで、共同墓地化された中世期とは異なる様相を示している。この墓坑は、隅丸方形あるいは隅丸長方形と推測され、副葬品である肥前系の水筒のほか、寛永通寶が1点出土しており、さらに骨片1点も確認されている。遺骨を納めたとみられる棺材や蔵骨器などはなく、その遺存状況から屈葬の状態では直葬されたものとみられる。当遺跡から200mほど離れた北西方向に高福寺が存在しているが、当遺跡周辺が墓地として利用した記録はなく、寺院墓地は想定しにくい。本跡は、確認された中世期の集団化された墓地様相とは異なっている。

### (2) 運河跡

第1号運河跡は、古地図や古文書で確認できなかったため、運河についての詳細は明らかにできていないが、今回の調査で確認された先端部は舟着場跡とみられ、底面が長方形を呈しており、杭列の遺存状況や杭列周辺に板橋とみられる板材も多量に出土している。この運河跡が機能していた近世後半の五箇町は、周囲に権現堂川、赤堀川、逆川が流れ、村内いくつかの沼が存在していた。近世の史料(図-118)によれば、17世紀中葉頃の幸主地区は幸館村と幸館新田村、主税新田村に分かれており、それらの村落内に多くの畑地が広がっていたことを読み取ることができる。当遺跡の位置は幸館新田村内と推定され、その周囲には畑地が広がっているほか、南東方向にひよせ沼が存在していた。また、この史料には権現堂川とひよせ沼を結ぶ水路が存在し



第118図 幸館新田・主税新田絵図 寛文九年（1669）



第119図 幸館新田村耕地絵図 欠年

ている。それは沼と川を結んでいることから、村落あるいは耕地の悪水を排水したり、権現堂川から取水したりするための水路と推測される。図-119は欠年であるが、畑地が水田化している状況から前述した図-118よりも新しいものとみられ、さらに主税新田や幸館新田の地名が存在することから、幸主地区となる近代以前の史料と推測でき、当遺跡で確認された運河跡の時期と最も近い時期の史料に位置づけられる。この史料には17

世紀中葉に当遺跡付近にみられた畑地が水田化されているなど、村内の土地利用が変わっているようすを読みとることができる。当遺跡周辺が水田化されていった当時の状況を踏まえれば、沼と河川を結ぶ大規模な水路に合流している小規模な水路ともみることができ、第1号運河跡は周辺の水田と結びついた水路としての機能も兼ねていたことが想定される。

確認された先端部の舟着場跡は、出土遺物から19世紀前半に埋め戻されて、運河としての機能を終えている。その遺物は陶器片が瀬戸・美濃系、磁器片は肥前系がそれぞれ大半を占めているのが特徴で、遺物時期は、17世紀後半のものも一部含まれているが、ほとんどの遺物が18世紀後半から19世紀前半に比定できるものである。ほかに、羽口の破片1点と鉄滓1点も出土している。「茨城県の地名」によれば、近世後半の主税新田村に古鉄商を営む者がいたことが記されているが<sup>9)</sup>、鍛冶屋などの記録は確認できていない。

また、船着場付近を除く河道部は、青灰色系の砂粒を含む覆土が類似しており、さらに1区覆土中から「茨城県泉島郡五霞村幸主 □□□□(人名)」と墨で住所などが記された荷札状の板材が出土していることから、1・3区の運河は明治29年以降も存在していたことが判明している。

### (3) 土坑

近世の土坑は第321号土坑の1基である。本来の性格は不明であるが、遺物の出土状況から埋め戻される際に廃棄場とされている。平面形は不定形で、底面が有段状であることから、異なる3基の土坑が重複していることも想定できる。しかし、図示できなかった遺物も含めた総重量は5500gを超えることや、その出土範囲に偏りがなく、土坑内にまんべんなく分布していることから、単一の土坑とした。本跡や第1号運河跡から多量に出土した陶磁器類の様相は、庶民向けに大量生産されたものであり、焙烙の割れた箇所を銅線で結びつけた修繕痕もみられるなど、前章で述べた同所新田遺跡で確認された土坑の陶磁器と時期に差はほとんどみられない。

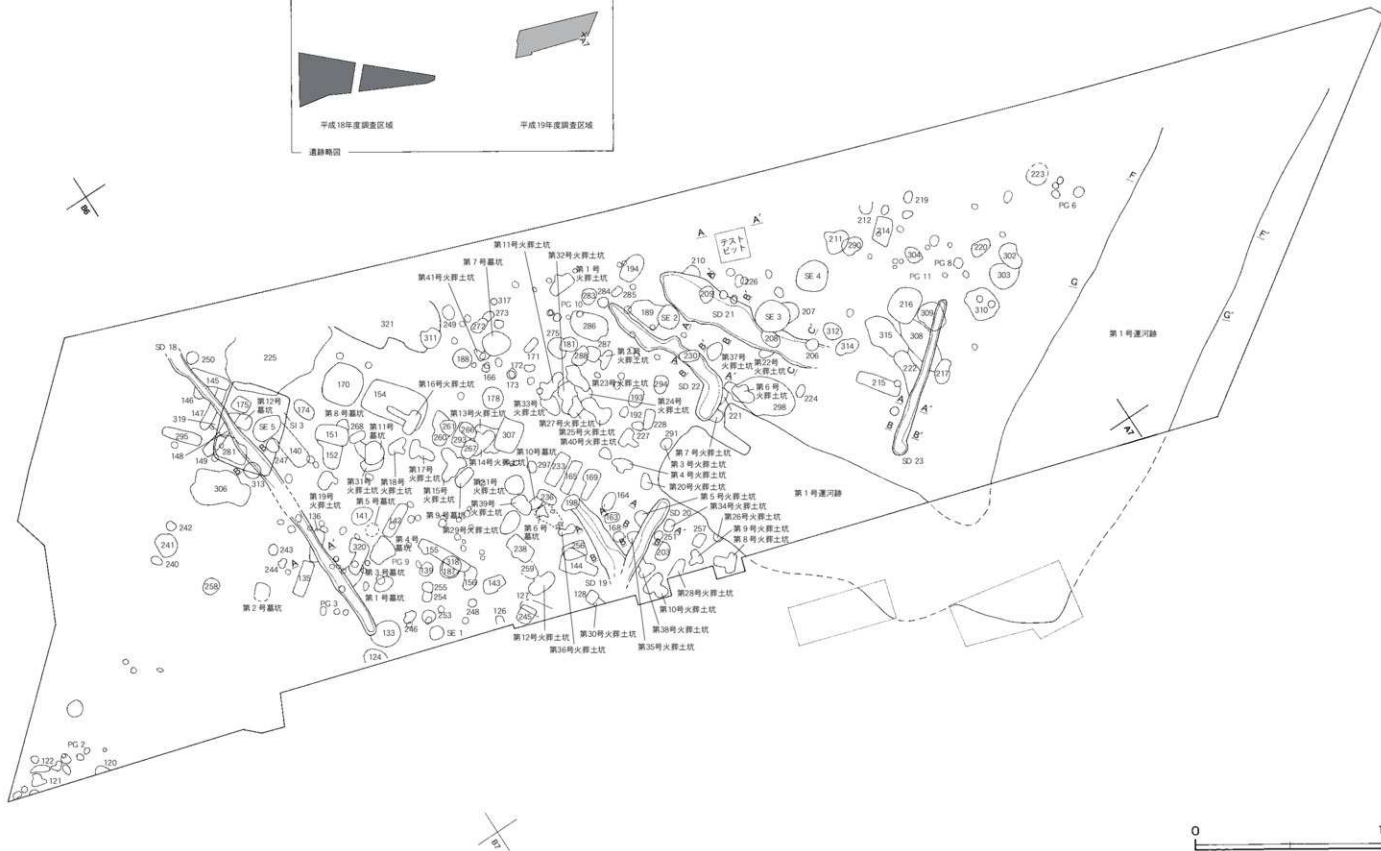
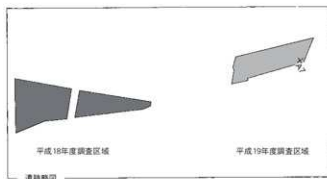
以上、今回の調査で確認された各時代の主な遺構について述べてきた。2年次にわたる調査から、縄文時代中期の遺構が確認できたことで、町域における縄文時代の様相が若干ではあるが明らかになった。近世期の古地図や古文書によって、当遺跡周辺の景観を具現化するには至らなかったが、中世の集団墓地や近世に構築された運河跡などの新たに確認された遺構は希少で、景観を復元していく具体的な資料の一つになるとと思われる。

#### 註)

- 1) 石守晃「所謂中世土坑墓について：その基本的な形態などについての覚書」『群馬の考古学』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988年
- 2) 斉藤弘「中世後期の墓地－下野を中心に－」『栃木県考古学会誌』第18集 栃木県考古学協会 1996年11月
- 3) 2)と同じ 斉藤弘は、当該期の集団墓地について先学の研究論考を紹介し、全国的にみられることを述べている。
- 4) 五霞町教育委員会「五霞町の村誌図(2)」『五霞町の歴史資料6』2004年3月
- 5) 下中邦彦編集「茨城県の地名」『日本歴史地名大系』第8巻 1982年11月 P. 780  
「天保14年の一札之事」(松本好司文書)によると、天保14(1843)年の五霞村主税新田の集落に古鉄商1とある。文書は実見できていない。

#### 参考文献

- 須藤政美「土塔貝塚 瀬沼遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第289集 2008年3月
- 桑村祐「清水遺跡 同所新田遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第290集 2008年3月
- 橋崎修一郎「火葬人骨と考古学」『墓と葬送の中世 狭川真一編』高志書院 2007年5月
- 斉藤弘「中世墓地に伴う井戸について」『唐沢考古』唐沢考古会 第14号 1995年5月
- 五霞町教育委員会「五霞の古文書」『五霞町の歴史資料2』五霞町 1996年3月
- 木村礎はか「村落景観の史的研究」八木書店 1988年12月



第120図 瀬沼遺跡遺構全体図

# 付 章

## 同所新田遺跡出土鉄滓等の分析調査（抜粋）

JFE テクノリサーチ株式会社

分析・評価事業部

埋蔵文化財調査研究室

### 1. はじめに

茨城県泉島郡五霞町大字小福田に所在する同所新田遺跡から出土した鉄関連遺物について、化学成分分析を含む自然科学的観点での調査を依頼された。出土遺物の化学成分分析、外観観察、マイクロ組織観察、資料の製造工程上の位置づけおよび始発原料などを中心に調査した。その結果について報告する。

なお、紙面制約のため外観写真は割愛した。実測図を参考にされたい。また、顕微鏡写真、図表については重要なもののみを記載した。

### 2. 調査項目および試験・観察方法

調査資料の記号、出土遺構・注記および調査項目を表1に示す。調査項目、調査方法は昨年度調査（参考文献1）と同一である。

### 3. 調査結果および考察

分析調査結果を図表にまとめて144頁～147頁に示す。表1に調査資料と調査項目をまとめた。表2～表4に資料の化学成分分析結果を示す。砂鉄・鉄滓の顕微鏡マイクロ組織を147頁～148頁に、マクロ写真と金属鉄の顕微鏡組織、EPMAのカラマッピングと定性分析結果を148頁に示す。鉱物組織の英文、化学式は一括して5. 参考に示した。各資料の調査結果をまとめ、最も確からしい推定結果を最後にまとめる。以下、資料の番号順に述べる。

資料番号 No. 1 砂鉄、着磁度：(強)、MC：なし

**外観：**重量は水洗前2.4g、水洗後1.68gで、約30%が付着泥土である。表面には粘土質の泥土がまぶしたように付着し、通常の砂鉄の黒色は見られない。水洗により部分的に泥が除去されるが密着したものが多く、完全には除去できない。粒径が2～3 mm大のやや大きな粒子が観察されるが小さな砂礫と思われる。水洗後の粒子は大きな粒子側に長石類と思われる粒子が多く見られ、半透明な石英（Quartz:SiO<sub>2</sub>）は余り観察されない。粒子は全体に角がとれており、川砂鉄の可能性が高いように思われる。定義に基づく着磁度は測定できないが強い着磁がある。メタル反応はない。

**顕微鏡組織：**10倍のマクロ組織は、白色の砂鉄粒子とともに灰色の砂鉄粒子よりも大きい珪石や長石粒などが観察される。十分に精製された様には思えない。147頁の組織写真1-2に100倍の顕微鏡組織を示す。乳白色の磁鉄鉱系の砂鉄、ウィードマンステッテン型格子模様の子タン磁鉄鉱砂鉄粒子、やや灰色気味でややガラス質様の石英などが観察される。格子模様の子タン磁鉄鉱があまり多くなく、酸化チタンの含有量は余り高くはないと思われる。

**化学成分：**化学成分分析結果を表2に示す。泥土は後天的に付着したと考えられ、水洗により泥土を除去して分析した。全鉄 (T. Fe) が41.9%である。酸化第一鉄 (FeO) は21.0%，酸化第二鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) は36.6%で FeO と  $\text{Fe}_2\text{O}_3$  の比率は36.5 : 63.5である。酸化チタン ( $\text{TiO}_2$ ) は8.26%含まれ中酸化チタン砂鉄 ( $\text{TiO}_2$ :10%前後) の範疇にある代表的な不純物である  $\text{SiO}_2$  は18.6%， $\text{Al}_2\text{O}_3$  は4.98%である。この砂鉄の品質を砂鉄の特徴的成分である酸化チタン ( $\text{TiO}_2$ )、全鉄 (T. Fe)、酸化マンガン (MnO)、バナジウム (V) の面から検討した。全鉄と  $\text{TiO}_2$  の関係は、T. Fe がやや低く、中酸化チタン砂鉄の位置づけにある。昨年度調査の砂鉄は夾雑物が多く、全鉄、 $\text{TiO}_2$  も低い位置にあるが、本来であれば今年度調査砂鉄と同程度であろう。V/T. Fe と  $\text{TiO}_2$ /T. Fe の関係は、T. Fe で基準化してあり、不純物、夾雑物の影響を受けにくい。やや V/ $\text{TiO}_2$  の比が高いが栃木、千葉などの砂鉄と同種の位置づけにある。図2の V/ $\text{TiO}_2$  と  $\text{TiO}_2$ /T. Fe の関係や MnO/ $\text{TiO}_2$  と  $\text{TiO}_2$ /T. Fe の関係でも関東地方の砂鉄と同種と見られる位置にある。造滓成分量 ( $\text{SiO}_2+\text{Al}_2\text{O}_3+\text{CaO}+\text{MgO}+\text{Na}_2\text{O}+\text{K}_2\text{O}$ ) と T. Fe の関係では造滓成分量が多くなっているが、おそらく、付着土砂などの影響も受けているはずで、砂鉄そのものの造滓成分量はもっと少なく、全鉄分は多くなるであろう。

以上の結果から本砂鉄は利根川、那珂川水系に由来する関東地方 (栃木、茨城、千葉) の砂鉄と同系統ではないかと思われる、昨年度調査の砂鉄と同質と推察される。

資料番号 No. 2 梶型滓、(第6号不明遺構出土) 着磁度：1~2, MC：なし

**外観：**重量は343.9gで、法量は長さ78mm、幅103mm、厚さ43mm。2段の梶型鍛冶滓で、全体に鉄錆 (オキシ水酸化鉄) 茶褐色が染みている。破面はない。上面は中央がやや窪み、突起状の滓の盛り上がりが見られる。写真右側に見える。写真下側は直線状を呈し、板状鉄素材が接していた可能性がある。突起状の欠けた面で見ると、滓そのものは黒色で小さく発泡している。下面は炉内の堆積状態を写し、凹凸が激しい。不明瞭ながら5~10mm大の木炭痕が観察される。着磁度は1~2で弱く、メタル反応はない。右1/5を直線切断。

**顕微鏡組織：**滓部分の顕微鏡組織を組織写真2-1に示す。写真2-1に示す凝集状に近いウスタイト (Wustite : FeO) が大部分で、その背後にファイヤライト (Fayalite :  $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ) が観察される組織が全体の半分程度である。残りの半分は、樹枝状ウスタイトと蘆玉状ウスタイトとファイヤライトからなる。鍛冶滓に多く見られる組織である。

**X線回折結果：**ウスタイト (Wustite : FeO) が最強の回折線を示し、主要鉱物相である。次いでマグネタイト (Magnetite :  $\text{Fe}_3\text{O}_4$ ) 弱い回折線を示す。その他にはリューサイト (Leucite :  $\text{K}_2\text{O} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3 \cdot 4\text{SiO}_2$ )、モンチセライト (Monticellite :  $\text{CaO} \cdot \text{MgO} \cdot \text{SiO}_2$ )、ファイヤライト (Fayalite :  $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ) 等が微弱な回折線を示し、存在が確認される。主要鉱物相は顕微鏡観察と一致する。

**化学成分：**化学成分分析結果を表3に示す。全鉄45.4%に対して金属鉄は0.39%と少量の金属鉄が含まれている。FeO は36.9%， $\text{Fe}_2\text{O}_3$  は23.34%である。結合水は1.16%で、ゲーサイトなどの錆化鉄も少量含まれると思われる。FeO- $\text{Fe}_2\text{O}_3$ - $\text{SiO}_2$  の3成分系に換算すると46.9%，29.6%，23.5%となり図1ではマグネタイト、ウスタイト、ファイヤライトの3組織が晶出すると思われる成分である。顕微鏡組織とはやや異なり、ウスタイトはマグネタイトとの混晶の可能性もある。 $\text{SiO}_2$  は18.5%で  $\text{Al}_2\text{O}_3$  は5.91%である。 $\text{TiO}_2$  は0.30%と少なく、成分のみでは始発原料が砂鉄と判断できない。CaO は多く含まれ5.73%で、MgO は1.52%含まれている。アルカリ成分である  $\text{K}_2\text{O}$  は2.88%， $\text{Na}_2\text{O}$  は0.35%含まれている。造滓成分量 ( $\text{SiO}_2+\text{Al}_2\text{O}_3+\text{CaO}+\text{MgO}+\text{Na}_2\text{O}+\text{K}_2\text{O}$ ) は34.89%で、鍛冶滓としては多めである。鉄滓の化学成分の特徴から製鉄工程の位置づけを検討する図3、4、5で見ると図3では鍛煉鍛冶滓の T. Fe の低い側で、精練鍛冶滓の  $\text{TiO}_2$ 、T. Fe の低い位置にあり、

造滓成分で薄められていると見られる。また、通常の鍛冶滓の平均的な T.Fe として 50%~60% 位を想定すると TiO<sub>2</sub> は 0.33%~0.39% となり、鍛練鍛冶滓と見なせる位置になる。図 4 では鍛冶滓としては造滓成分が多く、炉壁や粘土などが多く溶けていると想定される。図 5 では TiO<sub>2</sub> の低い鍛練鍛冶滓グループの位置にあり、T.Fe が薄まっていると見てもこのグループの範囲にある。これらの図には昨年度調査の鉄滓データもプロットしているが同質の資料と推察される。

以上の結果から、本資料は鍛練鍛冶工程で生成した炉壁や粘土との反応が多い、鍛練鍛冶滓と推察される。始発原料は砂鉄か否かは判断できない。

資料番号 No. 3 椀型滓、(第 6 号不明遺構出土) 着磁度: 1, メタル反応: 2 mm 大

**外観:** 重量は 251.8g で、法量は長さ 84mm, 幅 72mm, 厚さ 37mm である。羽口の付着した椀型滓の破片で、滓そのものの破面は 1 である。滓には茶褐色の鉄錆(オキシ水酸化鉄)が染みている。付着した羽口の先端付近を中心にして、上面は窪み、下面は炉床の粘土や混和された礫なども付着して椀形を呈している。破面で観察すると中央側の滓は非常によく熔融し、気泡も少なく緻密で黒色を呈する。周縁部は発泡して粗整である。付着羽口は薄褐色で滓との接触部は黒色ガラス化している。羽口内径は推定困難であるが厚みは 15~18mm と推察される。着磁は 1 で弱く、下側の写真上部に 2 mm 大のメタル反応がある。右斜め 1/3 を直線切断する。

**顕微鏡組織:** 顕微鏡組織を組織写真 3-1 に示す。写真 3-1 では樹枝状のウスタイト(Wustite: FeO)とその背後に沈むようにファイヤライト(Fayalite: 2FeO·SiO<sub>2</sub>)が観察される。明瞭な鉱物相はこの 2 種類のみで、ガラス質から晶出している。ウスタイトは繭玉状で、量的には写真 3-1 の部分より少ないところもあるが、資料全体としてはこれらの組織が半々程度である。鍛冶滓に多く見られる組織である。

**化学成分:** 化学成分分析結果を表 3 に示す。全鉄 40.8% に対して金属鉄は 0.28% と少ない。FeO は 35.2%, Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub> は 18.8% である。結合水は 1.51% で、ゲーサイトなどの錆化鉄も少量含まれると思われる。FeO-Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-SiO<sub>2</sub> の 3 成分系に換算すると 45.7%, 24.4%, 29.9% となり図 1 ではマグネタイト、ウスタイト、ファイヤライトの 3 組織が晶出すると思われる成分である。顕微鏡組織とはやや異なり、ウスタイトはマグネタイトとの混晶の可能性もある。SiO<sub>2</sub> は 23.0% と多く、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> は 7.19% である。TiO<sub>2</sub> は 0.31% と少なく、成分のみでは始発原料が砂鉄か判断できない。CaO は多く含まれ 6.65% で、MgO は 1.36% 含まれている。アルカリ成分である K<sub>2</sub>O は 3.54%, Na<sub>2</sub>O は 0.42% 含まれている。造滓成分量(SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO+Na<sub>2</sub>O+K<sub>2</sub>O)は 42.16% で、鍛冶滓としては多い。鉄滓の化学成分の特徴から製鉄工程の位置づけを検討する図 3, 4, 5 で見ると図 3 では鍛練鍛冶滓の T.Fe の低い側で、精練鍛冶滓の TiO<sub>2</sub>、T.Fe の低い位置にある。造滓成分で薄められていると見られ、通常の鍛冶滓の平均的な T.Fe として 50%~60% 位を想定すると TiO<sub>2</sub> は 0.38%~0.46% となり鍛練鍛冶滓であったと見なせる。図 4 では鍛冶滓としては造滓成分が多く、炉壁や粘土などが多く溶けていると想定される。図 5 では TiO<sub>2</sub> の低い鍛練鍛冶滓グループの位置にあり、T.Fe が薄まっていると見てもこのグループの範囲にある。

以上の結果から、本資料は鍛練鍛冶工程で生成した炉壁や粘土との反応が多い、鍛練鍛冶滓と推察される。始発原料は砂鉄か否かは判断できない。

資料番号 No. 4 椀型滓、(第 12 号溜め井跡出土) 着磁度: 1, メタル反応: なし

**外観:** 重量は 1652.3g で、法量は長さ 150mm, 幅 126mm, 厚さ 78mm である。厚みのある大きな椀型滓で、側面方向に 3 ヶ所破面がある。全体に茶褐色の鉄錆が浸み込み、上面には酸化土砂が付着している。10mm 大

も木炭痕もみられ、写真中央から下にかけては黒色ガラス質味の滓が観察される。下面はきれいな碗形で炉内の小さな木炭を写し、小さなあばた状の凹凸で覆われている。滓そのものは黒色で気泡を多く含んでいる。着磁度は1で、メタル反応はない。右下1/4で調査資料を採取する。

**顕微鏡組織：**資料断面は通常の鉄滓とは異なり、やや黄色を帯びている。顕微鏡組織は鉄分の少ないガラス質の印象である。ほとんど大部分が鉱物組織の存在しないガラス質である。鉱物相がわずかに見られる部分の顕微鏡組織は、ガラス質の中に短冊状や棒状のファイヤライト (Fayalite:  $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ) が観察される。小さな金属鉄粒も散見される。さらにガラス質の部分でファイヤライトと思われる組織はさらに希薄になっている。金属鉄粒とゲーサイト (Goethite:  $\alpha\text{-FeOOH}$ ) などの錆化鉄がその周囲に見られる。ガラス成分の多い組織である。

**化学成分：**化学成分分析結果を表3に示す。全鉄41.4%に対して金属鉄は0.03%とほとんどない。FeOは38.8%、 $\text{Fe}_2\text{O}_3$ は16.0%である。結合水は0.79%で、ゲーサイトなどの錆化鉄はほとんど少ないと見られる。FeO- $\text{Fe}_2\text{O}_3$ - $\text{SiO}_2$ の3成分系に換算すると45.1%、18.6%、36.3%となり図1ではが $\text{SiO}_2$ 多いクリストバライト (Cristobalite:  $\text{SiO}_2$ ) 領域にある。ガラス質が多く、ファイヤライトが見られる成分系である。顕微鏡組織とはほぼ一致している。 $\text{SiO}_2$ は31.2%と非常に多く、 $\text{Al}_2\text{O}_3$ は5.8%である。 $\text{TiO}_2$ は0.24%と少なく、成分のみでは始発原料が砂鉄か判断できない。CaOは多く含まれ3.04%で、MgOは1.48%含まれている。アルカリ成分である $\text{K}_2\text{O}$ は2.95%、 $\text{Na}_2\text{O}$ は0.29%含まれている。造滓成分量 ( $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O}$ ) は44.76%と鍛冶滓としては非常に多い。鉄滓の化学成分の特徴から製鉄工程の位置づけを検討する図3.4.5で見ると資料No.2、資料No.3とほとんど同じで、炉壁や粘土などが多く溶けた鍛練鍛冶滓と想定される。

以上の結果から、本資料は鍛練鍛冶工程で生成した炉壁や粘土との反応が多い、鍛練鍛冶滓と推察される。始発原料は砂鉄か否かは判断できない。

資料番号No.5 釘 (第12号溜め井跡出土)

**外観：**重量は5.4gで、法量は長さ65.1mm、幅5.7mm、厚さ5.1mmである。大きく緩やかに曲がった釘で、小さな錆瘤で覆われている。錆化による縦亀裂も3ヶ所認められる。金属検知では頭部側3/5にメタル反応があり、反対の釘の先端側にはメタルは遺存していない。X線による透過でも、金属検知と一致して頭部側にメタルが遺存し、先側にはない。外観同様に中央付近では折損した状態である。頭部側を用いて調査する。

**顕微鏡組織：**断面の半分位の金属鉄が残り、周囲は錆化している。断面の縦横比は約1:1.35である。明瞭な加工痕跡は認められない。亀裂や空隙、介在物などが見られる。金属鉄は中央左にフェライト (\*1)・パーライト (\*2) 組織のやや灰色の濃い組織が見られ、その周囲に白色で結晶粒の大きなフェライト組織が取り囲んで錆化前の健全な状態の組織分布を想定すると、加工時に周囲が脱炭したというよりも素材の炭素濃度が不均質であったと見る方が妥当である。(\*1) フェライト: Cが0.02%以下の炭素をほとんど含まない純鉄 ( $\alpha$ 鉄) (\*2) パーライト: フェライトと鉄の炭化物 $\text{Fe}_3\text{C}$ が交互に層状をなす組織で、炭素量が増加すると $\text{Fe}_3\text{C}$ が増え、低倍の顕微鏡では次第に灰色を増す) 100倍の顕微鏡組織を組織写真5-1に示す。組織写真5-1はマクロ写真のやや灰色の濃いフェライト・パーライト組織の部分でフェライトの素地にパーライトが析出している。炭素濃度は0.3%程度と推察される。400倍の顕微鏡組織はマクロ写真の白色部分で結晶粒が大きく、炭素をほとんど含まない純鉄 (フェライト) の組織である。資料断面の約85%を占めている。顕微鏡組織としてはC量は0.04%程度と思われる。顕微鏡組織からみると浸炭や脱炭の形跡はなく低炭素の軟鉄が素材として使われたと思われる。



**化学成分：**顕微鏡観察からはCは0.045%と推定され、純鉄に近い亜共析鋼の範囲にある。通常は還元されないSiやAlが0.18%、0.046%含まれるがこれらは鉄滓などが非金属介在物として残存し、分析されたものと思われる。不純物は少ない。MnやCuは0.001%以下、0.013%である。磷(P)は0.026%で比較的少ない。

以上の結果から、本資料は炭素の低い軟鉄を素材として作られた鉄釘と推察される。

資料番号 No. 6 釘 (第12号溜め井跡出土)

**外観：**重量は30.2gで、法量は長さ102.1mm、幅12.4mm、厚さ10.9mmである。断面は先端側で6.3mm×4.1mm、後端側で8.3mm×5.4mmである。やや扁平な釘で全体に錆瘤で覆われている。長手方向に5ヶ所錆化膨張による亀裂が生じている。錆瘤の剥落部には黒錆が観察される。金属検知では中央付近には10mm大のメタル反応があるが、先端と後端は3mm大で鉄の遺存は悪い。金属検知と一致して中央にメタルが遺存し、先側は空洞化が起きている。メタルの遺存状態のよい中央付近を用いて調査する。

**顕微鏡組織：**長手方向に平行なL断面の20倍の顕微鏡組織を観察した。うち、L断面のみ148頁のマクロ写真3-1に示す。C断面は、中央から斜め左下側がフェライト・パーライト組織で、右上側は炭素の少ないフェライト組織である。黒く見える非金属介在物は左下部を中心に弧を描くように伸びており、この方向に伸びるような加工がなされたと思われる。脱炭したようには見えず、炭素濃度に不均質のある素材が使われたと思われる。L断面のマクロ写真3-2は、C断面での比較的炭素濃度の高い部分の断面に当たる。L断面の非金属介在物は非常に伸びており、C断面の介在物が余り伸びていないことから、L断面の上下方向に圧縮加工されたと推察される。(C断面では左右方向に相当する) L断面では、組織がほとんどフェライト・パーライト組織である。C断面の炭素濃度が高いと思われる左下側では、フェライト素地に結晶粒界にパーライトが析出した組織になっている。右上の白いフェライト主体と思われる部分では、ほとんど炭素を含まないフェライト単独の純鉄組織である。148頁に示した100倍の鉄組織写真3-1は横方向に長く伸びた介在物を示す。100倍の写真ではファイヤライトとウルボスピネル (Ulvospinel :  $2FeO \cdot TiO_2$ ) とと思われる砂鉄系の滓組織が認められる。ほかに結晶粒が伸びている部分で、フェライトの素地と粒界など析出したパーライトや結晶粒が余り伸びず、小さい結晶粒と大きな結晶粒が層をなす部分でフェライトの素地に少量のパーライトなども観察される。いずれも、炭素濃度が低い亜共析鋼 (C < 0.8%) の組織である。

**EPMA分析：**L断面資料で砂鉄由来と思われる非金属介在物のEPMA分析を行なった。マッピング分析結果を148頁のマッピング分析結果1に示す。Ti含有鉱物が検出される。TiとSiの高い鉱物が主体である。Tiの高い鉱物にはFeOが66.1%、 $TiO_2$ が26.3%含まれ鉱物相としてはウルボスピネル ( $2FeO \cdot TiO_2$ ) と考えられる。Siの高い組織ではFeOが64.5%、 $SiO_2$ が29.1%含まれファイヤライト ( $2FeO \cdot SiO_2$ ) と考えられる。これは砂鉄由来の製煉滓や精煉滓に見られるもので本資料の始発原料は砂鉄であったと考えられる。

**化学成分：**Cは0.13%で亜共析鋼 (C < 0.8%) の中でも炭素の少ない方である。通常は還元されないSiやAlが0.058%、0.016%含まれるがこれらは鉄滓などが非金属介在物として残存し、分析されたものと思われる。Tiは0.011%とAlと同レベルで含まれており、砂鉄系の滓が含まれていたことを示唆する。全体として不純物は少ない。MnやCuは0.001%、0.015%である。磷(P)は0.042%で比較的少ない。

以上の結果から、本資料は砂鉄を始発原料とする炭素の低い軟鉄を素材として作られた鉄釘と推察される。

資料番号 No. 8 梃型滓 (第6号不明遺構出土) 着磁度：1、メタル反応：2mm大

**外観：**重量は1258.5gで、法量は長さ131mm、幅136mm、厚さ61mmである。厚みのある梃型滓である。全

体に土砂の付着が多い。上面は中個が盛り上がり、褐色の酸化土砂が厚く付着している。白い皮で覆われたようなガラス質層も見られる。下面側はきれいに椀形に湾曲し、土砂・塵が付着し木炭灰も観察される。土砂が剥かれた部分には黒錆がみられ、2 mm 大のメタル反応がある。気孔も多く観察される。着磁度は1で、メタル反応は2 mm 大である。左1/4で調査資料を採取する。

**顕微鏡組織：**再結合滓の様に鍛造薄片や微細な鉄薄片がまきこまれている。顕微鏡組織を組織写真5-1に示す。写真5-1は巻き込まれている鍛造薄片やウスタイトを主体とする鉄滓の微小片である。ほかの組織写真ではガラス質とおそらくファイヤライトと思われる組織が主体でこれに蘭玉状のウスタイトが分散する組織も見られる。

**X線回折結果：**ウスタイト (Wustite: FeO) が最強の回折線を示し、主要鉱物相である。次いでマグネタイト (Magnetite: Fe<sub>3</sub>O<sub>4</sub>) 弱い回折線を示す。その他にはリュウサイト (Leucite: K<sub>2</sub>O·Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>·4SiO<sub>2</sub>)、モンチセライト (Monticellite: CaO·MgO·SiO<sub>2</sub>)、ファイヤライト (Fayalite: 2FeO·SiO<sub>2</sub>) 等が微弱な回折線を示し、存在が確認される。主要鉱物相は顕微鏡観察と一致する。

**化学成分：**化学成分分析結果を表3に示す。全鉄53.6%に対して金属鉄は0.27%と少ない。FeOは46.7%、Fe<sub>3</sub>O<sub>4</sub>は24.3%である。結合水は1.12%で、ゲーサイトなどの錆化鉄が少量含まれると見られる。FeO-Fe<sub>3</sub>O<sub>4</sub>-SiO<sub>2</sub>の3成分系に換算すると53.6%、27.9%、18.5%となり図1ではマグネタイト、ウスタイト、ファイヤライトの3組織が晶出すると思われる成分である。顕微鏡組織とはやや異なり、ウスタイトはマグネタイトとの混晶の可能性もある。SiO<sub>2</sub>は16.1%で、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>は5.02%である。TiO<sub>2</sub>は0.26%と少なく、成分のみでは始発原料が砂鉄か判断できない。CaOは3.50%で、MgOは1.0%含まれている。アルカリ成分であるK<sub>2</sub>Oは2.08%、Na<sub>2</sub>Oは0.23%含まれている。造滓成分量 (SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO+Na<sub>2</sub>O+K<sub>2</sub>O) は27.93%である。鉄滓の化学成分の特徴から製鉄工程の位置づけを検討する図3、4、5で見ると図3、図5では鍛錬鍛冶滓と見られる位置にあり、図4では精錬鍛冶滓と鍛錬鍛冶滓の中間的な位置にある。

以上の結果を総合すると、本資料は鍛錬鍛冶工程で生成した鍛錬鍛冶滓と推察される。始発原料は砂鉄か否かは判断できない。

資料番号 No. 9 包丁 (第9号廃棄土坑出土) 着磁度3, メタル反応 4~5 mm 大

**外観：**重量は57.8gで、法量は長さ102.1mm, 幅12.4mm, 厚さ10.9mmである。小刀の破片で重量感もあり、しっかりしているが刃側は錆化欠落し、膨張により長手方向に長い亀裂が走っている。側面の片側も写真に見られるように太い錆化亀裂が発生している。全体に鉄錆の茶褐色を呈し、刃側の欠落部のみが黒錆の暗褐色を呈している。金属鉄の遺存は余りよくなくメタル反応は最大でも5 mm 大である。

**顕微鏡組織：**錆化が著しく金属鉄の遺存が低倍率では確認できない。縦横に錆化亀裂が発生している。ほとんど錆化鉄で金属鉄はわずかである。通常のナイタル液 (5%硝酸のアルコール溶液、金属鉄の組織を出すために腐食液として使用する) で腐食しても鉄組織は現われず、さらに強力な王水 (硝酸と塩酸の3:1の混合液、非常に強い腐食性を持つ) によってもパーライトなどの組織は現われず、顕微鏡で見られる鉄はフェライト思われる。錆化部も観察したが鉄組織は痕跡を残していない。おそらく、低炭素の鉄であったと推察される。

**EPMA分析：**非金属介在物のEPMA分析を行なった。マッピング分析結果を148頁のマッピング分析結果2に示す。Ti含有鉱物が検出される。TiとSiの高い鉱物が主体である。ポイント分析した結果はFeOが64.2%、TiO<sub>2</sub>が32.2%含まれ鉱物相としてはウルボスピネル (2FeO·TiO<sub>2</sub>) と考えられる。一方の分析ではFeOが17.45%、SiO<sub>2</sub>が45.9%、CaOが16.4%、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>が2.52%含まれ、ファイヤライトとガラスの混合状態と思われる。

る。これは砂鉄由来の製錬滓や精錬滓に見られるもので本資料の始発原料は砂鉄であったと考えられる。

以上の結果から、本資料は砂鉄を始発原料とする炭素の低い軟鉄を素材として作られた鉄製品（包丁）と推察される。

#### 4. まとめ

本分析調査を以下にまとめた。

##### 1) 遺跡の性格

第6号不明遺構から検出された鉄滓資料 No. 2, No. 3, No. 4, No. 8 は成分的に鍛錬鍛冶滓と判断された。資料 No. 8 では鍛造剥片も検出されている。これらの資料の分析値や、顕微鏡組織は昨年調査した第1号製鉄遺構、第10号井戸跡、第1号廃棄土坑から検出された資料 No. 3, No. 4, No. 5 と同質と推察される。本遺構での鍛冶滓の検出量や鉄製品の出土状況に関する情報は提供されていないが、本遺跡では鍛錬鍛冶が行われていたと推察される。

##### 2) 鉄製品

金属鉄が遺存した No. 5（釘）、No. 6（釘）、No. 9（包丁）については、顕微鏡観察では低炭素の素材が使用されたと思われる。炭素濃度の異なる素材を接合して用いた痕跡はない。

##### 3) 始発原料

鉄滓資料に含まれる  $TiO_2$  は 0.24%～0.31% と低く、始発原料が砂鉄か否か判断はできない。鉄製品資料 No. 6, No. 9 の介在物を EPMA で分析調査したが、 $TiO_2$  を多く含む鉱物相であるウルボスピネルが検出され始発原料は砂鉄と推察された。

##### 4) 砂鉄

今回調査した砂鉄は、 $TiO_2$ 、 $MnO$ 、 $V$ 、 $T$ 、 $Fe$  等の砂鉄の特徴を表す成分の比率などから、昨年度調査の2種の砂鉄と同質と判断された。このことは、同所新田遺跡で砂鉄が何らかの形で利用されていた可能性を示すようにも思われる。しかし、本遺跡が鍛冶に関連であることは確実であり、なぜ鍛冶関連遺跡で砂鉄が出土するのか、またどのような利用がされたのか今後の課題である。

#### 5. 参考

(1) 鉄滓の顕微鏡組織、(2) 鉄-炭素系平衡状態図……参考文献1を参照されたい。

## 6. 図表・写真

表1 調査資料と調査項目 (同所新田遺跡 平成20年分析調査)

資料No.	出土地点	層位	資料 種別	着磁度	MC 反応	外観写真	化学成分	組織写真	X線回折	X線透過	EPMA
1	第5号不明遺構	覆土中	砂鉄	○	○	○	○	○			
2(M102)	第6号不明遺構	覆土下層	鉄滓	○	○	○	○	○	○		
3(M101)	第6号不明遺構	底面	陶型滓	○	○	○	○	○			
4(M81)	第12号溜め井跡	底面	陶型滓	○	○	○	○	○			
5(M79)	第12号溜め井跡	覆土中	鉄製品 (釘)	○	○	○	○	○		○	
6(M80)	第12号溜め井跡	覆土上層	鉄製品 (釘)	○	○	○	○	○		○	
7(M98)	第6号不明遺構	覆土下層	鉄製品 (包丁*)	○	○	○				○	
8(M105)	第6号不明遺構	覆土上層	陶型滓	○	○	○	○	○	○		
9(M83)	第9号廃棄土坑	覆土上層	鉄製品 (包丁*)	○	○	○		○			○

表2 砂鉄の化学成分分析結果 (%)

資料No.	T. Fe	FeO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CaO	MgO	K <sub>2</sub> O	Na <sub>2</sub> O	比率 (%)	
										Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	FeO
1	41.9	21.0	36.6	18.6	4.98	1.04	5.14	0.24	0.35	36.5	63.5

資料No.	TiO <sub>2</sub>	MnO	V	C. W.	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	Cu	TiO <sub>2</sub> /T. Fe	MnO/TiO <sub>2</sub>	V/TiO <sub>2</sub>	造滓成分%
1	8.26	0.35	0.270	1.48	0.113	0.006	0.197	0.042	0.033	30.35

表3 鉄滓の化学成分分析結果 (%)

資料No.	T. Fe	M. Fe	FeO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CaO	MgO	K <sub>2</sub> O	Na <sub>2</sub> O	比率 (%)	
											FeO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>
2(M102)	45.4	0.39	36.9	23.34	18.5	5.91	5.73	1.52	2.88	0.35	61.3	38.7
3(M101)	40.8	0.28	35.2	18.8	23.0	7.19	6.65	1.36	3.54	0.42	65.2	34.8
4(M81)	41.4	0.03	38.8	16.0	31.2	5.8	3.04	1.48	2.95	0.29	70.8	29.2
8(M105)	53.6	0.27	46.7	24.3	16.1	5.02	3.50	1.00	2.08	0.23	65.7	34.3

資料No.	TiO <sub>2</sub>	MnO	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	Co	C. W.	C	V	Cu	TiO <sub>2</sub> /T. Fe	MnO/TiO <sub>2</sub>	造滓成分%
2(M102)	0.30	0.14	0.785	0.005	1.16	0.23	0.006	0.007	0.007	0.467	34.89
3(M101)	0.31	0.13	0.952	0.007	1.51	0.18	0.006	0.007	0.008	0.419	42.16
4(M81)	0.24	0.12	0.364	<0.001	0.79	0.03	0.005	0.006	0.006	0.500	44.76
5(M79)	0.26	0.10	0.497	0.003	1.12	0.06	0.004	0.006	0.005	0.385	27.93

C. W. = 化合水, 造滓成分 = SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO+Na<sub>2</sub>O+K<sub>2</sub>O

表4 鉄塊系遺物の化学成分分析結果 (%)

資料No.	C	Si	Mn	P	S	Cu	Ni	Co	Al	V	Ti	Ca	Mg
5 (M79)	0.045	0.180	<0.001	0.026	-	0.013	0.027	0.028	0.046	<0.001	0.007	0.043	0.007
6 (M80)	0.13	0.058	0.001	0.042	0.028	0.015	0.014	0.018	0.016	0.002	0.011	0.014	0.003

資料5は試料量少なくC, Sは分析できず, Cは顕微鏡組織から推定  
※表中の資料No.中の( )内は, 本文の遺物番号と同じ

## 参考文献

- 1) 委村裕「清水遺跡 同所新田遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第290集 2008年3月

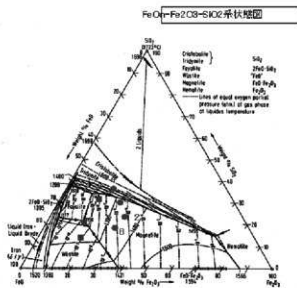


図1 FeO-Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-SiO<sub>2</sub>系平衡状態図 (■は昨年度調査の鉄澆データ)

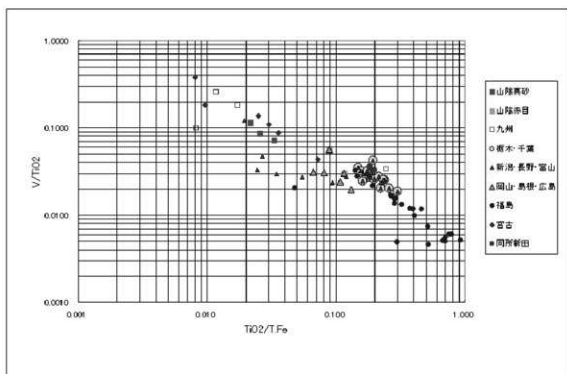


図2 砂鉄の  $TiO_2/T_{Fe}$  と  $V/TiO_2$

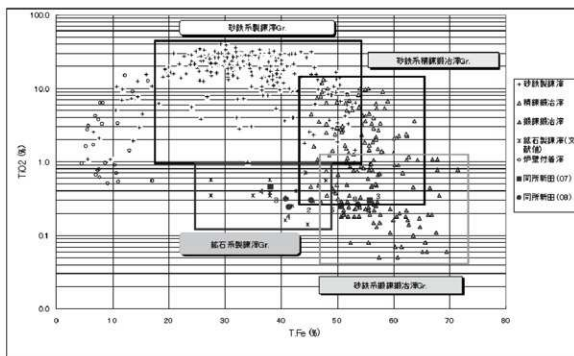


図3 出鉄滓類の全鉄量と二酸化チタン量の分布

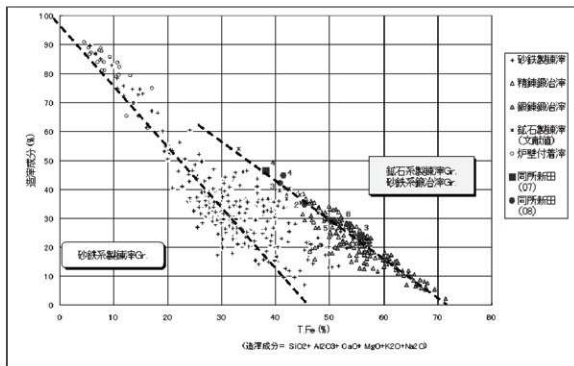


図4 製煉萍と鉄治萍の分類

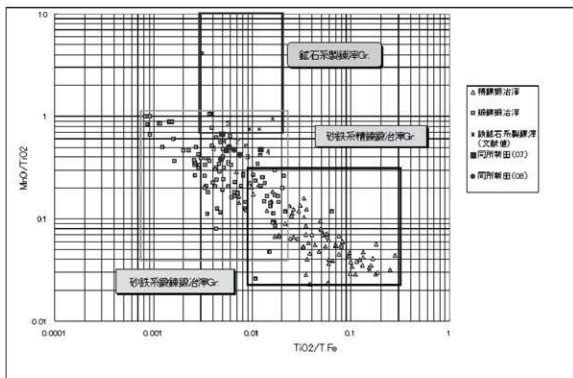
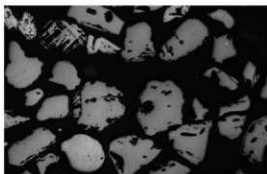
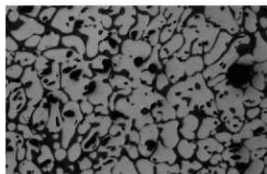


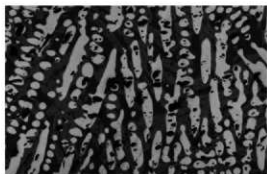
図5 砂鉄系鋼治滓と鉻石系製煉淨の分類



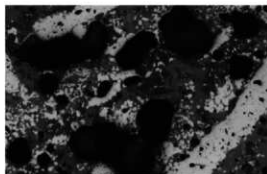
組織写真1-2x100 (資料 No.1)



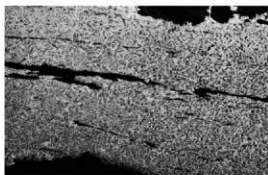
組織写真2-1x100 (資料 No.2)



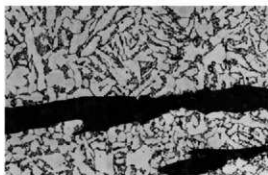
組織写真3-1x100 (資料 No.3)



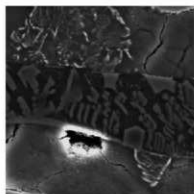
組織写真5-1x100 (資料 No.8)



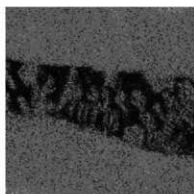
マクロ写真3-1x20 (資料 No. 6 L断面)



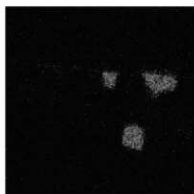
鉄組織写真3-1x100 (資料 No. 6 L断面)



SE 像

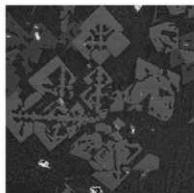


Fe



Ti

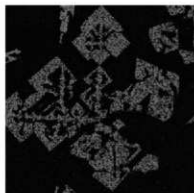
マッピング分析結果1 資料 No. 6(L断面)x2000



SE 像



Fe



Ti

マッピング分析結果2 資料 No. 9x300



写 真 图 版

同 所 新 田 遺 跡

瀬 沼 遺 跡



遺跡全景（西側から）



第10号掘立柱建物跡  
完掘状況



第9号溜め井跡  
完掘状況





第 1 1 号 溜 め 井 跡  
完 掘 状 況



第 1 2 号 溜 め 井 跡  
第 9 号 廃 棄 土 坑  
遺 物 出 土 状 況



第 6 号 廃 棄 土 坑  
遺 物 出 土 状 況

第 5 号 不 明 遺 構  
完 掘 状 況



第 5 号 不 明 遺 構  
遺 物 出 土 状 況



第 5 号 不 明 遺 構  
遺 物 出 土 状 況





第 6 号 不 明 遺 構  
完 掘 状 况



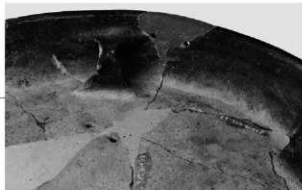
第 6 号 不 明 遺 構  
遺 物 出 土 状 况



第 1 号 炉 跡  
方 完 掘 状 况



SX5-177



SX6-210



SX6-205



SX5-176



SX5-186



第8号廃棄土坑-161



遺構外-TP22



遺構外-TP23

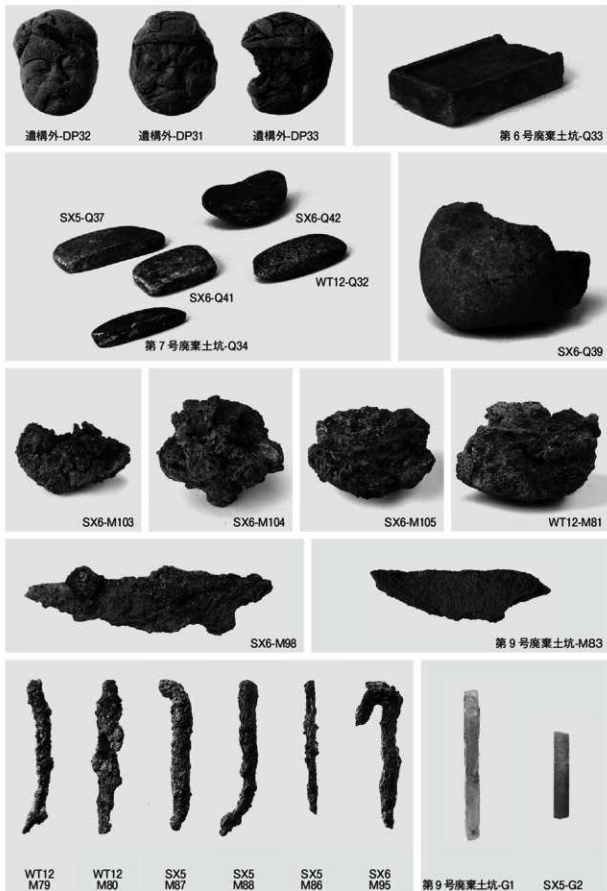


第5号廃棄土坑-DP22



SX6-DP25

第5・8号廃棄土坑，第5・6不明遺構，遺構外出土遺物



第12号溜め井跡，第 6・7・9号廃棄土坑，第 5・6号不明遺構，遺構外出土遺物



第9号廃棄土坑，第571号土坑，第5・6号不明遺構出土遺物





第9号廃棄土坑，第5・6号不明遺構出土遺物



SX6-226



SX6-228



第8号廃棄土坑-160



SX5-191



SX6-245



遺構外-249



SX6-232



遺構外-248



第9号廃棄土坑-168

第8・9号廃棄土坑，第5・6号不明遺構，遺構外出土遺物



瀬沼遺跡全景



第3号住居跡  
完掘状



第3号住居跡  
遺物出土状

第 3 号 住 居 跡  
遺 物 出 土 状 況



第 2 9 8 号 土 坑  
遺 物 出 土 状 況



第 1 号 墓 坑  
遺 物 出 土 状 況





第 1 2 号 墓 坑  
遗 物 出 土 状 况



第 2 号 火 葬 土 坑  
完 掘 状 况



第 3 号 火 葬 土 坑  
完 掘 状 况

第 4 号 井 戸 跡  
井 戸 枠 出 土 状 況

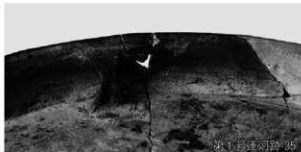


第 1 号 運 河 跡  
完 掘 状 況



第 1 号 運 河 跡  
遺 物 出 土 状 況







第3号住居跡，第1・4・5・6号墓坑，第321号土坑，第1号運河跡，遺構外出土遺物





第1号運河跡-34



第1号運河跡-37



第1号運河跡-39



第1号運河跡-40



第1号運河跡-41



第1号運河跡-42



第1号運河跡-59



第1号運河跡-61



第1号運河跡-60



第1号運河跡-63



第1号運河跡-61・65



第1号運河跡-60



第1号運河跡-59



第1号運河跡-46



第1号運河跡-47



第1号運河跡-66



第1号運河跡-44



第1号運河跡-43



SK321-31



第1号運河跡-64



第1号運河跡-53



第1号運河跡-49



第1号運河跡-50



第1号運河跡-55



第1号運河跡-54



第12号墓坑-26



第1号運河跡-69



第1号運河跡-67



SK321-75



第1号運河跡-57

## 抄 録

ふりがな	どうしょしんでんいせき		せぬまいせき					
書名	同所新田遺跡2		瀬沼遺跡2					
副書名	一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第312集							
編著者名	本橋弘巳							
編集機関	財団法人茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行年月日	2009(平成21)年3月23日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
どうしょしんでんいせき 同所新田遺跡	いばらきけんさしまつごかまち 茨城県猿島郡五霞町 大字小福田739番地 の1ほか	08542   069	36度 06分 43秒	139度 45分 36秒	11.0 m ~ 12.0 m	20071001 ~ 20071231	2.831m <sup>2</sup>	一般国道468号首都圏中央連絡自動車道建設事業に伴う事前調査
せぬまいせき 瀬沼遺跡	いばらきけんさしまつごかまち 茨城県猿島郡五霞町 大字幸主496番地の1 ほか	08542   068	36度 05分 27秒	139度 45分 34秒	9.0 m ~ 10.0 m	20071225 ~ 20080331	1.727m <sup>2</sup> (生活面 2面として調査)	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
同所新田遺跡	生産跡	近世	堀立柱建物跡 溝跡 井戸跡 溜め井跡 廃棄土坑 土坑 不明遺構	2棟 1条 1基 4基 5基 17基 2基	土師質土器(焙烙・火鉢)、 陶器(碗、皿、德利、播鉢)、 磁器(碗、皿、瓶)、土製品 (羽口、ミニチュア、泥面子)、 石器・石製品(砥石、 火打ち石)、金属製品(釘)、 ガラス製品(簪、箸置き)、 碗状滓、鉄滓			
	その他	時期不明	炉跡 欄跡 溝跡 土坑 ピット群	1か所 1列 8条 68基 5か所	縄文土器、石器(石鏃)、 陶器、磁器、瓦、煉瓦			
瀬沼遺跡	集落跡	縄文	堅穴住居跡 土坑	1軒 3基	縄文土器(深鉢)、石器(磨 製石斧)、剥片		舟着場跡が検出された近世後半の運河跡が確認されている。	
	墓跡	中世	墓坑 火葬土坑	11基 41基	土師質土器(小皿)、古銭 (北宋銭・明銭)			
	その他	近世	墓坑 土坑 運河跡	1基 1基 1条	土師質土器(焙烙)、瓦質土 器(焙烙、火鉢)、陶器(碗、 皿、德利)、磁器(碗、皿、 水注)、金属製品(煙管)、 古銭(寛永通寶)、木製品 (漆器桶、下駄)			
		時期不明	溝跡 土坑 井戸跡 ピット群	6条 128基 5基 8か所	縄文土器(深鉢)、土師質土 器、陶器、磁器			
要約	両遺跡とも昨年度からの継続調査である。同所新田遺跡は、財団報告第290集で報告されている製鉄関連遺構が確認され、鍛錬鍛冶を中心とした製作跡であることが判明した。瀬沼遺跡は、財団報告第289集で報告されている縄文時代の集落のほか、中世・近世の墓跡、近世以降の運河跡など、時代によってさまざまな土地利用がされている。							

茨城県教育財団文化財調査報告第312集

同所新田遺跡 2

瀬沼遺跡 2

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道  
新設事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成21(2009)年3月18日 印刷

平成21(2009)年3月23日 発行

発行 財団法人茨城県教育財団  
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2  
茨城県水戸生涯学習センター分館内  
TEL 029-225-6587

印刷 株式会社 イセブ  
〒305-0005 茨城県つくば市天久保2丁目11-20  
TEL 029-851-2515